

北朝・隋唐と高句麗壁画

四神図像と畏獣図像を中心として

Mural Paintings of Northern Dynasty, Sui, and Tang China and
Koguryo, Korea

東 潮

はじめに

- ① 高句麗壁画の四神・畏獣図像
- ② 高句麗壁画の変容
- ③ 三燕・北朝の壁画墳
- ④ 三燕・北朝墓の構造と壁画
- ⑤ 北朝と高句麗壁画
- ⑥ 隋唐壁画の四神図像
- ⑦ 隋唐四神図像の変遷

【論文要旨】

古代東アジア世界において、高句麗・三燕・北朝・隋唐壁画の比較研究を試みる。とくに三燕・北朝・隋唐壁画墳の従来の墓室構造および壁画構成の変遷過程を追究した。

高句麗の三室塚・通溝四神塚・五蓋墳4・5号墳、北朝の茹茹公主墓・婁叡墓、隋の李和墓、唐の蘇定方墓など、四神図像・畏獣図像の表現空間、図像の変化に着目して分析する。高句麗壁画に表現された神怪図像を、畏獣像（鬼神・鬼面）・力士像・門衛像に分類し、それらの図像の変遷過程に北朝壁画との影響関係、その背景に国際的な交流関係がみられる。

高句麗の王陵は、6世紀中葉の陽原王いらい、風水の地理的条件に叶う地勢に、四神壁画をとりいれ、造営されたが、その四神思想は高句麗王権の統治思想となった。

4～8世紀の高句麗・北朝・隋・唐壁画に表現された異人・胡人像は国際的な交流関係をもがたるとともに、西域・西方に対する辟邪という観念を象徴するのであるが、それは他界観の表現である。また高句麗壁画に記された図像の榜題のなかで、通溝四神塚の畏獣も辟邪思想を表象したものである。

北朝壁画の四神図像、乗駕龍虎神仙像、牽引青龍・白虎図像、墓主図像、屏風画の変遷過程を解明することによって、東魏の茹茹公主墓壁画は、四神図や宮廷儀礼図など、初唐壁画の原形をなすことなどを明らかにした。

隋唐壁画の四神図像は、7世紀中葉ごろに墓室から墓道に表現されることや、隋唐と高句麗の四神壁画を比較したうえで、キトラ・高松塚古墳壁画の四神図像の系譜関係について言及した。

はじめに

高句麗において、壁画墳は4世紀中葉ごろに出現する。その壁画のモチーフは、墓主図像から四神図像に変化する。具体的には、墓主図像の表現空間が、5世紀前葉ごろから右壁・西壁（「座西朝東」）から後壁・北壁（「座北朝南」）に変化する。遼東地域の影響をうけて成立した壁画墳は、安岳3号墳から徳興里古墳へと、高句麗独自の展開をとげる。そうした壁画の変遷は、高句麗のみならず、遼東地域・甘粛地域などにみられる〔東 1992〕。そして5世紀前半代に四神図像が出現し、6世紀代になると四神図像が中心となる〔朱栄憲 1961〕。5世紀後半には、集安三室塚など、壁画は神仙思想を主体とするモチーフに変容する。舞踊塚・角抵塚から三室塚・四神塚への図像上の変遷過程に、造墓思想・埋葬観念の変化がみられるが、高句麗壁画の変遷上の大きな画期であった。

畏獣図像・四神図像を中心に、その変化の内的・外的要因をさぐり、当時の高句麗をとりまく東アジアの国際環境のなかで、三燕・北朝・隋・唐の壁画との関係を明らかにしたいとおもう。

①……………高句麗壁画の四神・畏獣図像

高句麗壁画の図像の構成・表現空間については、朱栄憲〔1972〕・森貞次郎〔1985〕・斎藤忠〔1989〕・東〔1988〕・南秀雄〔1995〕・全虎兌〔1997〕などの諸研究があるが、四神図像・畏獣図像を対象として考察する。

遼東城塚〔朝鮮科学院 1958〕 多榔墓で、四神図は、「前室西側の側室のようになった部分の壁面の上部」に描かれる。その「南壁の朱雀はなくなっており、北壁の玄武は、亀の甲羅の部分と人面のような頭部の一部がのこり、西壁上部には白虎の下半身がわずかに遺存する。東側は壁がなく、天井の梁部に青龍を描き、尾の部分のみがのこる」。南壁に朱雀はみられないという。報告書には、模写図が掲載されているが、復元が可能な状態で遺存していたのかどうか明らかでない。墓室の構造からみて、安岳3号墳に後続し、4世紀後半ごろに位置づけられる。高句麗壁画における四神図像の初出例である。墓室の構造は遼東の壁画墓の系統にあるが、遼東地域では同時期の四神図像は未確認である。遼西地域では、袁台子壁画墓などが存在するので、遼東地域においても四神図像が出現していたとかがえられる。

長川1号墳〔吉林省文物工作隊 1982〕 墓道・羨道・前室・甬道・後室からなる双室墓である。後室四壁と天井の全面に蓮華文が描かれている。天井には、対角線で区画し、日象（三足鳥）・月象（蟾蜍と兎・杵搗臼）と北斗七星二座を配する。門吏は異人であり、墓主夫人の左上に異人（胡人）が描かれている。天井第一層の東壁に1対の朱雀と1対の麒麟、北壁に青龍、南壁に白虎があり、西壁に1対の玄武の痕跡をとどめる。天井第1・3・5層の四隅に鬼神（畏獣）が描かれている。羨道の南北壁にそれぞれ1侍女がみえる。南壁の侍女は長竿の団扇を持ち、北壁の侍女は両手で長い竿（団扇）を持つ。

長川2号墳〔陳相偉 1983〕 玄室・両側室・羨道からなる。羨道側の男子像の門卒は、方幘の冠をかぶり、右耳に耳環をつける。黄地に黒色の太い襟のついた右衽の短襦を着て、緑地に黒花を綴

った裳をはく。石扉の背面の侍女は、黄地に黒花綴りの合わせ襟の裙を着て、両手を胸の前であわせる姿態である。

環文塚 [池内宏・梅原末治 1940] 壁画は、玄室・羨道ともに表現。玄室の四壁に斗拱があり、梁枋の部分に雲龍文、柱に唐草文で装飾されている。また各壁に同形・同大の環文が20数個ずつ描かれている。天井は剝落がいちじるしいが、右壁に青龍の胴部、左壁に白虎の脚の痕跡をとどめることから、四神が配置される。西壁に「素描の人物」図もある。羨道の両壁に1対の怪獣が描かれている。辟邪・天祿のような性格の図像であろう。

角抵塚 [池内・梅原 1940] 玄室・前室からなる双室墓である。天井全面は唐草文で装飾され、天井東壁の中央に日象三足鳥、西壁に月象蟾蜍が描かれ、天井頂部には星宿が配されている。後室左（東）壁の角抵図は、格闘する人物の1人が胡人であることに意味をもつ。甬道右（西）壁に「獠猛なる1頭の犬の首尾」が遺存する。これは犬であるが、尾の形態は異様であり、頸輪のような装飾がみられる。獅子や鎮墓獣との関係が問題となろう。環文塚羨道両壁の怪獣、長川1号墳の仏像台座の両脇の怪獣と類似する。後室の左壁（東壁）の、扶桑樹の根元の2頭の動物と表現が異なっている。赤い豹とみられる [東 1993]。

舞踊塚 [池内・梅原 1940] 双室墳。墓主図像が主体の壁画である。後室の天井部東壁に青龍と日象三足鳥、西壁に白虎と月象蟾蜍が描かれている。玄武は表現されていないが、南壁に、対向する朱雀（鶏）がみえる。天井頂部に北斗七星を中心とする星座を描く。

徳興里古墳 [朝鮮科学院 1981] 双室墓。羨道両壁に、力士（鬼神）像が描かれる。西壁に半裸体の交脚で、槍を持つ、獣面の門衛でもある。その左に舌出し獣がいる。白虎かどうかは不明である。東壁にも、舌出し獣がみえる。

天井西壁に「千秋」・「萬歳」図像、天井南壁に「富貴」・「吉利」・「仙人持蓮」・「牽牛」・「猩猩」・「玉女持幡」・「玉女持幢」、天井北壁に「天馬」・「地軸一身両頭」・「賀鳥」、天井東壁に「飛魚」・「青陽之鳥」など、榜題の書かれた図像がある [南 1995]。徳興里壁画には、四神図像が表現されていないが、天界の図像・星宿図は方位を示している。

薬水里古墳 [朝鮮科学院 1963] 双室墓。玄室には、柱・梁・桁・斗拱の建造物が表現され、四神図は、その梁上部に描かれる。北壁には墓主図像の左側に玄武が描かれるが、墓主像とほぼ同じ大きさである。東壁に青龍と日象（三足鳥）、西壁に白虎と月象（蟾蜍）図、南壁に朱雀が描かれるが、いずれも星宿図が近接して表現されている。前室壁画には、墓主坐像（北壁）、侍従坐像・厩（西壁）・牛舎（南壁）、踏臼・竈（東壁）の図がみられるが、この下段のモチーフは地上における生活にかかわり、上段は天界への行程を表現する昇仙図像といえる。また後室の墓主図像は、四神図像とともに天界でのさまであり、前室から後室への昇仙過程も表わされている。

天王地神塚 [関野貞他 1930, 関野 1941] 後室の四壁には、側視蓮華文を中に配した連続亀甲文、北壁に建物と墓主夫婦座像を描く。婦人像は、花文の垂飾のつく帽をかぶる、異様な容貌である。天井部には、双人首蛇、獣首鳥、鳳凰、乗駕鳳凰人物、鹿、蛇、雲文、日象、月象、星宿図をえがく。「地神」銘は双人首蛇の頭部の上方、蛇身内に書かれる。徳興里古墳の「地軸一身両頭」像に類似し、いずれも北壁に描かれる [南秀雄 1995]。この「一蛇身双人頭四亀肢」は変形の玄武で、四肢は亀身で、亀首と蛇首を人頭におきかえたとかんがえる [金元龍 1974]。朱栄憲 [1972] も玄

武としている。玄武は地の神で、天を支える神でもある。なお「双人頭龍身像」と解することもできる。「天王」の銘は、北西壁の旗を持ち鳥に乗る人物の頭上に書かれている。北東壁にも同様の図像がある。これらは、北壁に描かれた墓主夫婦の昇仙とかかわるであろう。天井東壁の鳥身像の上に「千秋」の文字がのこる。西壁の獸頭鳥身像は「萬歳」像であろう〔南 1995〕。

梅山里四神塚（狩獵塚）〔関野貞他 1915〕 片袖式の単室墳である。玄室北壁に帷幔に座る墓主像と玄武、飾馬を牽く御者がいる。東壁の上部に日象三足鳥、その下に青龍を大きくえがく。青龍の尾の部分に小さく、飾馬に乗る人物像がみえる。北壁に向かうような位置関係にあり、墓主の像であろう。西壁には狩獵と月象蟾蜍図が遺存する。白虎は不鮮明である。南壁に2体の朱雀が対向して描かれる。北壁の墓主図像と玄武という構図は双楹塚にみられたが、四神図像が強調して描かれるようになっている。梅山里四神塚壁画の描写は全体に繊細である。四神図像主体の壁画に移行する過渡期のものといえる。

三室塚〔池内・梅原 1940〕 三室塚は、3室と甬道と羨道からなる石室である。壁画の構成要素は、3室で異なるが、3室の壁画があわさって、完結した世界が表現されている。羨道から入ると、第1室の西壁（両袖部内面にあたる）に門衛像が描かれる。向かって右の壁（南壁）は2段構成で、下段に狩獵図、上段に幔幕を張りめぐらされた建物と行列図がみえる。行列図は、右から左に歩む11人の像からなる。右端の男子像は不明であるが、2人と3人目は墓主夫妻と解釈しえる。天蓋を持つ従者が先導する。次いで従者が先導するかたちで再び墓主夫妻が描かれ、さらに墓主夫妻が強調され、大きく描かれている。これらの行列図には、墓主図像が重出して表現されている。その情景は東壁に連続する。そこでは墓主夫妻が個々の建物に描かれる。このように第1室では、墓主が昇仙するさまが表現されている。そして第2室以降には墓主像は表現されていない。第1室の天井部には、北壁に流雲文、東壁に玄武1対、西壁に朱雀1対と菩提樹、鳳鳥などがえがかれる。青龍・白虎図は不明である〔李殿福 1981B〕。

第1室から第2室への通路（甬道）の両壁に、衛士像が描かれる。その容貌は西域人的で、角抵塚の相撲をとる人物像と相い通じている。第2室は、北・東・南壁に力士像が大きく描かれる。いずれも梁を支える姿であり、衣に唐草文化した領巾がなびくように表現されている。梁の上の天井部には、東壁に玄武、南壁に青龍、北壁に白虎、西壁に朱雀、天井頂部に日象・月象図、星宿図、そのほか各壁に流雲文・有角奇獸・麒麟・瑞鳥などが描かれている。

第2室から第3室への入口にあたる2室の西壁に甲冑で武装した門衛が表現される。3室の前壁にあたる東壁に描かれた人物像（男子像）には蛇をからみつかせている。他の北・西・南壁は梁をささえる姿態の力士像である。西壁・南壁の力士像の両脚に蛇がからみつく。第2室の力士像と異なる。天井部に描かれた四神図は第2室と同方向で、石室の方位とはずれている。

三室塚壁画全体の主要なモチーフは、昇仙（昇天）であろう。第1室で表現された墓主図像は第2・3室で昇華し、天界に往く。2・3室では力士像が天界と地界の境を象徴する梁を支えている。さらに第3室の力士像には蛇がからみつき、2室の世界とは区分されているようである。墓主は、第1室から第3室と石室空間としては水平的であるが、垂直的に移行、昇仙・昇天する。門衛の図像は、第3室に対しては武人であった。被葬者も埋葬空間は第3室であった可能性が大きい。

三室塚の発掘において、第1室の床面で人骨・鉄釘・土器・獸骨が出土した〔李殿福 1981〕。第

2・3室では未確認である。第1室に埋葬施設（木棺）が存在したのであろうが、2・3室の性格が問題である。埋葬空間が第1室にのみ限られていたとすれば、2・3室は特別空間となる。三室が同時に築造されたことは確認されている。つまり第1室での墓主図像は、第2・3室で昇華し、天界に往くさまが表現されている。2室西南隅に牛首人身像と技楽仙人は昇仙にかかわる。第1室は埋葬空間、第2・3室は靈魂の空間といえよう。

大安里1号墳 [朝鮮科学院 1959] 四壁の壁画は2段で構成されている。上下のあいだに梁や桁の建築物がある。四壁の四隅には、梁・桁を支える姿態の畏獣がえがかれる。玄室北壁の上段に墓主坐像、その下段に玄武2対が描かれ、玄武の直上には雲文が配されている。東壁の青龍の上部に家居図がのこる。西壁の青龍の上部には人物の群像があり、その直上に蟾蜍を描いた月象図がみえる。東壁の相対する位置に日象（三足鳥）図があったのであろう。南壁には朱雀が遺存する。前室北壁の斗拱の部分に鬼面文が表現されているが、安岳3号墳の斗拱の鬼神像の系譜をひくものである。

双楯塚 [関野貞 1941] 双室墳で、後室・前室・羨道に壁画がみられる。羨道東壁に牛車と御者・侍従、その下位に鎧馬にまたがる騎馬武人像、その下に墓主とみられる男子像と女侍3人、西壁に鳥翼形冠帽をかぶった飾馬に乗る人物像と同じ衣服の男子立像立飾りが表現される。前室入口（前室甬道）東壁に環頭大刀を持つ門衛（力士）、前室南壁の各袖部に門吏が描かれる。前室壁面に梁・斗拱、東西壁に青龍・白虎、天井全面が蓮華文・流雲文・星座で飾られ、天井頂部には十二弁の重弁蓮華文一華が配置される。後室の壁面に建物、東壁に墓主の行列図、天井南壁に朱雀、天井東・北・西壁に華瓶・蓮華、天井隅に日象三足鳥、月象蟾蜍図、後室後壁に墓主夫婦坐像が強調して描かれ、侍従群は小さく表現されている。帷幔の頂部に鳳凰がとまる。墓主像の右側に玄武がみえる。羨道両壁の人物群像は、牛車や馬に乗り、他界（昇仙）する墓主の図像と解釈されるが、墓室の入口に描かれていることは高句麗壁画としては特異である。前室への甬道壁面の門衛（力士）像、前室南壁の門吏が立つという構成である。四神は、前室に青龍と白虎、後室に玄武と朱雀と、二つの空間にわけて描かれる。後室東壁の人物群像も墓主夫婦の他界の様相が表現されているのであり、後壁の墓主坐像は昇仙した姿である。梅山里四神塚の墓主図像と類似する。力士像は、歯をむき出し、鬼神の顔貌をもつが、着服している。石室構造から5世紀後半に比定しえる。

鎧馬塚 [関野他 1930] 羨道から玄室への入り口（甬道）の両壁に力士を描く。「裸体で禪を著く。左方力士の顔面一部辨すべく、猛勇の相」[関野 1941]を示すが、発掘中に損壊したという。羨道両壁に「獅子」、右壁に鎧馬を描く。玄室四壁に四神図が描かれ、持送り式天井第2段に連続唐草文、日象（三足鳥）、月象（蟾蜍・搗葉兔）、第1段に墓主の昇仙図、鎧馬像、榜題、侍従群像を描く。

高山里9号墳 [小場恒吉 1938] 玄室の四隅に柱を描き、西壁に柱・梁と白虎の胴部・足部が遺存する。東壁の青龍はほぼ半分ほど遺存する。南壁の朱雀は西側が1足と羽毛の一部がのこる。東耳室（翼室）の東南壁に黄色の隅柱と土台がみられるという。

高山里1号墳 [小場 1938] 羨道両側壁の柱・斗拱の間に墨線と黄色の痕跡をとどめる。北壁に相対する玄武が描かれ、周囲に蓮華文をほどこす。東壁の最下段は床面から24cmまで朱色を塗り、その上27cm幅に火焰文と唐草文を交互に施し、さらに幅12cmの3条の斜線文に黄黒色を交互に

着色する。その上に青龍を描く。南壁の両側に武人像（門衛）を描く。東側の武人像は「黄袍を着し冠を戴き鞞を穿ち、右手に鋸齒を刻みたる短き武器を杖」とする。

内里1号墳 [有光教一 1937] 東壁に青龍の尾と胴の痕跡をとどめる。北壁には「亀背を上方より俯瞰せるが如き形を描き、此に首部と肢足とを附し、更に纏綿卷曲の長蛇を配せる状を察し得るものあり、但し玄武の精細認め難く、蛇頭不明なり」[有光 1937] という遺存状態である。天井部に忍冬唐草文、東北隅と西北隅に忍冬唐草文と山岳・樹木文を配する。天井の持送り部の東壁面に日象・三足鳥、その左右に山岳・流雲文、西に月象と桂樹・白兔搗薬図、南北壁面に中央に蓮華文、左右に同心円を配する。この同心円文は中央の蓮華文が形式化したものかもしれない。

真坡里1号墳 [田疇農 1963] 東西両壁と北壁には、流雲文・正視蓮華唐草文・忍冬唐草文で飾られた蓮華化生が表現されている。玄室北壁中央に玄武を描き、その両側に樹木をえがく。東壁全面に青龍をえがき、龍の尾にそって流雲文化した鳥文を配する。西壁の白虎は北壁側を向く。鳥文は付随していない。南壁に1対の朱雀を描き、流雲文を配する。天井頂部に日象三足鳥・月象蟾蜍（葉搗図）・蓮華文・蓮華唐草文を配置する。羨道の東西両壁に神将図を描く。光背をもつ仏像として表現されている。壁画の四神図像は蓮華唐草文化され、天界が表現されている。全体に南朝壁画の影響を受けている。

真坡里4号墳 [田疇農 1963] 玄室四壁の下半部に四神、上半部に天人を描く。北壁には玄武ではなく、青龍が描かれる。その頭部は不明であるが、「火を吐く状態は判別でき、体もその輪郭」がわかるという。「北壁の玄武、東壁の青龍の二面が断続してその痕跡を止めていたに過ぎない」[小泉顕夫 1986] と記している。調査報告の図によるかぎり、玄武よりは青龍像であるが、同時期の平壤地域においては、大安寺1号墳のような四神図がみられ、不可解である。天王地神塚のような一蛇身双人頭四亀肢像でもない。その青龍の上部に「禽獸に乗った人物像（男像）」と「鳳凰に乗って飛翔する天人」を表現する。東壁には、青龍と龍に乗る天人、禽獸に乗る天人像がのこる。西壁には白虎、月桂樹をえがいた月象、鳳凰に乗る天女、流雲文が描かれる。天井頂部に星宿図。羨道東西壁に蓮池・山岳文が描かれる。西壁は、蓮池・松樹・蓮華文・忍冬唐草文で構成される。羨道部に門衛や力士像は表現されていない。真坡里4号墳→通溝四神塚→真坡里1号墳の年代序列が想定されている [田疇農 1963]。

湖南里四神塚 [関野 1941] 両袖式石室。四壁に柱・斗拱を描く。南壁に朱雀、その西側に「奇古なる蓮花の如き」ものがある。北壁の玄武、西壁の白虎などは不明である。天井部にS字形の連続渦文が全面に描かれる。

星塚 [関野他 1915, 関野 1941, 朱栄憲 1961] 三角・平行持送り式天井の単室墳。四壁の「隅には柱及び一種奇異なる斗拱」を描くが、「飛鳥時代の雲斗を想起せしむ」。南壁入口に「鳳凰即朱雀」を描き、西方に「奇古なる蓮花の如き者あり」。東壁には「蒼龍の如き者あり。両角眼尾等僅に辨ずべし」。北壁に「玄武を圖せしならんも今明らかならず」。西壁の白虎は剝落のため不明である。天井持送り壁面に「唐草文様星形の圖文」があり、天井頂部に「八葉蓮花の如き者あれども明かならず」。「巫述の忽冬より脱化し来りしがごとき珍異なる蓮花模様」[関野 1941] は、横S字形である。おそらく角抵塚の蓮華唐草文が変化したものであろう。星塚壁画は、四神図と蓮華文を主体とする。

五盛墳4号墳 [李殿福 1984, 朝鮮日報社 1993, 韓国放送公社 1994] 石室は、羨道・甬道・玄室

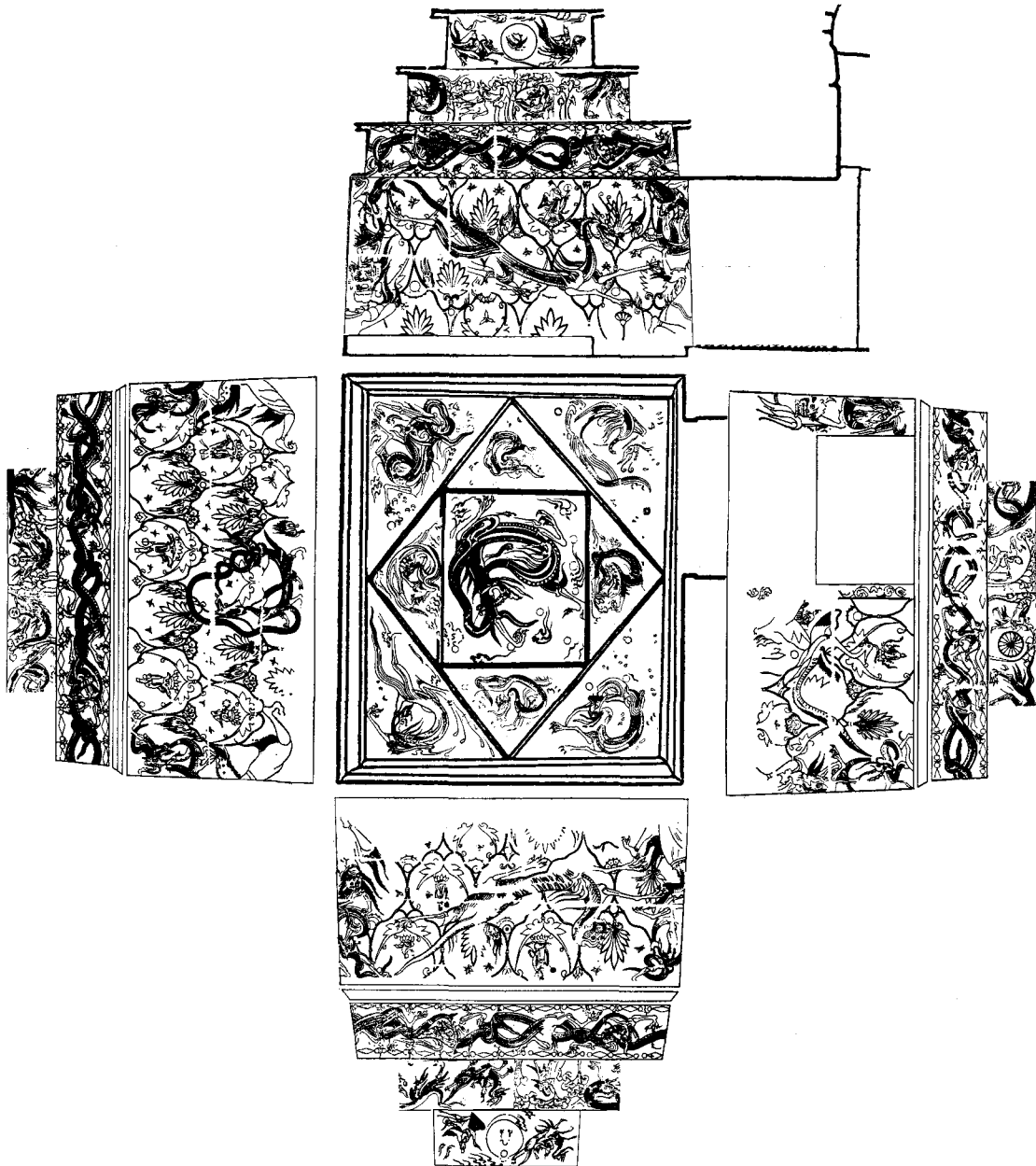


図1 五盃墳4号墳

からなる。羨道の両壁に、各1人の門衛（力士）が描かれる。この二つの図像に共通するのは、下部に如意靴を履く交脚ないし立脚の姿態である。両脚のかかとの部分に二色（朱と茶系）の帯（環）を巻く。上半部は胡人の形相で、大刀を押さえ持つ人物像（右壁）と、獣頭で器物を持つ像（左壁）である。いずれも袍を着る。上下の像は、同一のものでなく、下部の図像は最初に描かれた図像とみられ、上半部の図像が上書きされたようである。剥落し、下の絵が露出したのであろう。ただ右壁の図像は、肩車の状態、股にもぐりこむような姿態である。下部の図は、五盃墳5号墳羨道の神将図に類似する。それに対し、上半部の図像は通溝四神塚の畏獣（獣頭）に近似する。墓室

の四壁には、輪つなぎ唐草文（「網状蓮華火焰文」）の連続図案を下地として、四神図が描かれる。輪つなぎ唐草文内に、10人の手に団扇や塵尾を持つ人物図像が描かれる。墓室の四隅に、龍文の頂梁を支える鬼神（畏獣）が描かれている。畏獣は龍角がはえ、口を開き、牙をむき出す。脇の下に羽翼があり、裸身で胸を出し、筋肉は隆起し、下半身に短い羽袴をつける。左足は完全に曲げ、右足をうしろにのばす。からまりつきながら相対する二龍を持ちあげる。龍は頭を上に向け、龍の口は相対する龍身を噛む。各壁の梁の上に、二龍交結の連続図が配される。第1層抹角石の側面に、首を回し、体を曲げる龍が描かれ、その左右に日月神、仙人、冶鉄、工輪などが配される。北隅の第2抹角石の上に描かれた日神・月神像、人首蛇尾（龍身）像は、「日神義和」と「月神常義」であろう〔曾布川寛 1981〕。東角に牛首人身像と飛仙像がある。南隅の抹角石上に、鍛冶と輪をつくる人物像がある。鍛冶工は、左手で鉄鉗を握り、鉄塊をはさみ、鉄床上に置き、右手に持った鉄鎚で鍛打する。製輪人は、左手に車輪を握り、右手で鉄鎚を挙げて打つ。西角の抹角石の人物像は、砥石を樹の台上に置き、両手で物を握り磨く状態である。その右にいる龍に乗る仙人は頭が長く、尖った耳で、顔に口髭があり、南を向き、龍にまたぎ、躍動する。仙人は左手に幡を持つ。第4抹角石の中央に4体の龍がみえる。第2層の天井石に、伎楽人・日月星宿・北斗星座・流雲文がある。東面には、日輪と龍に乗り、鳳凰に乗る伎楽人が描かれる。南面に南斗七星、竿を吹き孔雀に乗る伎楽人がいる。西面に月輪と龍、鶴に乗った伎楽人がいる。第2段の天井石の四面には、伎楽人・星宿・流雲文が描かれている。第1・第2段の天井石の抹角石の底部に、8条の龍が描かれる。天井の五彩の青龍と流雲文と星宿がある。

五盛墳5号墳〔梅原・藤田 1976, 吉林博 1964, 読売テレビ放送 1988, 朝鮮日報社 1993, 韓国放送公社 1994〕 石室構造は4号墳と同一構造である。羨道の左右両壁の両側に力士を描く。東壁の力士は弓を張り、如意靴をはき、複弁の蓮台上にすわる〔金元龍 1974〕。西壁の力士はまた複弁蓮台にのり、手に戟を持つ。墓室の四壁は輪つなぎ唐草文を下地として、四神図が描かれている。4号墳と異なり、人物図像は表現されていない。墓室の四隅に龍の頂梁を支える鬼神（畏獣）が描かれる。前肢を挙げて、龍を手の平でささえる。その交龍は絡み合い、共に上端の梁枋をささえている。西南角の畏獣は西壁の一部にわずかに左肢をとどめるのみで、東南角の畏獣は全く消失している。梁枋上に8条の交結、からみ合う龍の連続文がある。第1層の天井石の四面にそれぞれ龍、その四隅に菩提樹がある。飛走する牛首人は、眼に緑松石が嵌められ、右手に稲の穂を持つ。飛天は右手に火把を持つ。東北に人身龍尾の日月神像がある。龍に乗り、冠をかぶる仙人、飛簾に乗り、両耳を立て、細長い高冠をいただく仙人像がみえる。飛簾に乗る鹿のような独角獣がある。西南に輪を鍛冶する人物像が描かれている。第2層の頂石の各面に龍に跨ぎ乗る伎天人が描かれている。東南の天女は龍に乗り左を向く。第2層の頂石の底面に、日月・雲気・星象が描かれている。天井の菱形の蓋頂石の上に相い戦う龍・虎がからまりあう。虎は西、龍は東に位置する。

通溝四神塚〔池内・梅原 1940〕 石室は南々東方向に開口し、玄室・羨道からなる単室墓である。玄室の各壁の一面に四神が描かれ、その周囲は流雲文で充填される。四神図は黒線によって輪郭がとられている。玄室の四隅に、梁を支える「怪異なる神人」〔池内・梅原 1940〕と表現された獣頭人身の畏獣像が配されている。五指は鉤状の爪が付き、上半身は裸身で、腰に領巾状の帯をつける。持送り天井の梁にあたる第1段天井石の側面に連続忍冬唐草文が施されている。三角持送りの各抹

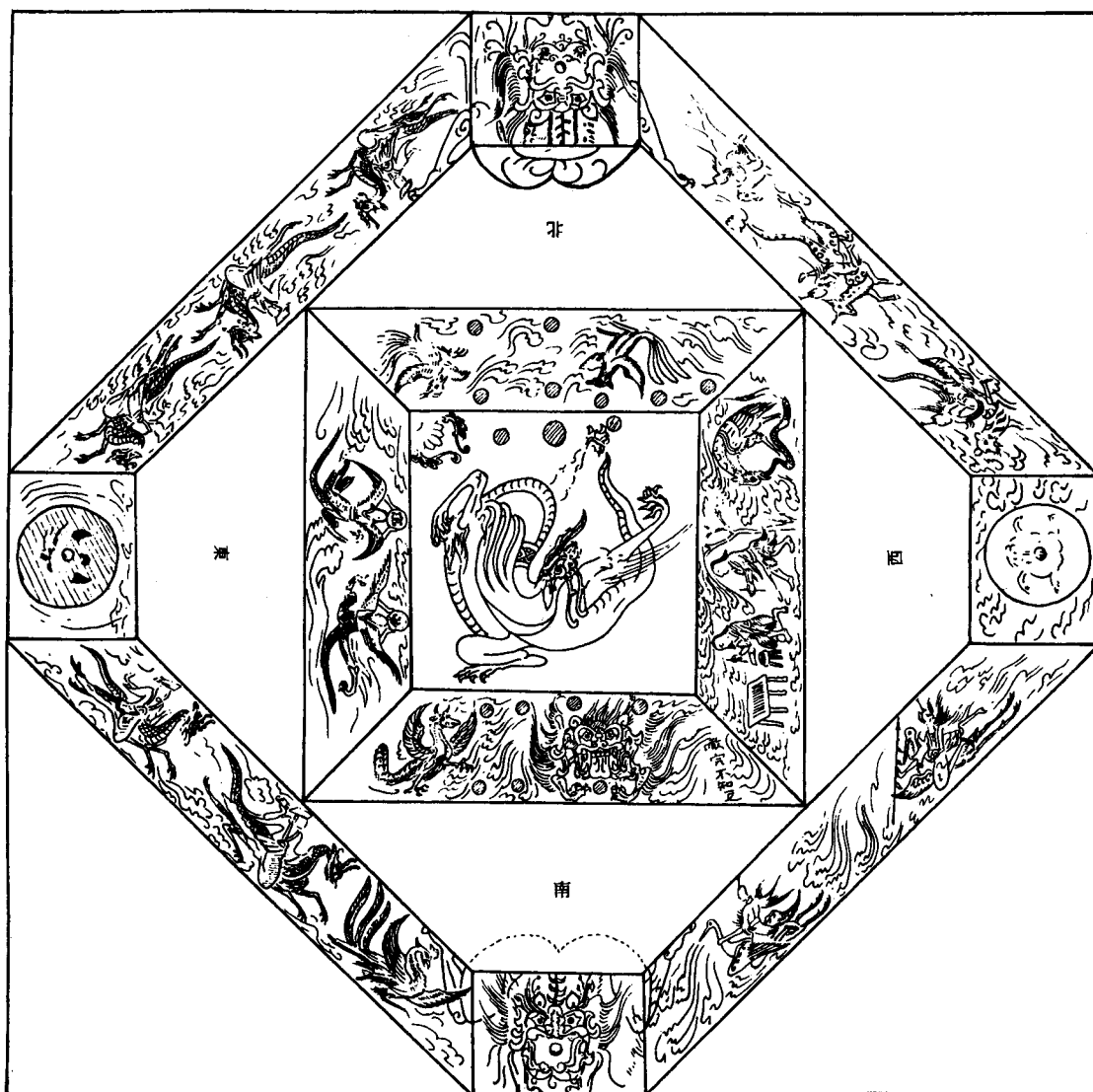


図2 通溝四神塚・天井壁画

角石の中央部に四角の石を配置する構造である。持送天井第2段には、東面に三足鳥を中に配した日象、西面に蟾蜍・月象、南北の各面に鬼神（鬼面）を描く。抹角石の各側面には、冕冠を被り龍に乗る天人、胡帽を被り鶴や鹿に乗る天人や鳳凰が描かれ、空間には飛雲文でうめつくされている。第3段の天井石側面の北面に人頭鳥身と獣頭鳥身像（「千秋」と「萬歳」像）と北斗七星、東面には日象・月象をかざす2人の人首龍身像（日神義和・月神常義像、伏羲・女媧像）、西面に筆を持つ人物・書をかく人物、蛇を呑む怪鳥、南面には瑞鳥と畏獣（舌出し鬼面像）と榜題が描かれている。天井四隅にアカンサス文を配し、中央部に龍が全面に表現される。このアカンサス文は五蓋墳4・5号墳の網文と関連する。羨道の両側壁に半身裸形の畏獣像がある。右手に槍を持ち、左手に博山炉を持ち、疾走する姿が描かれている。千秋と萬歳像は、徳興里古墳の「千秋之象」・「萬歳之象」榜題の図像と類似する。

八清里古墳 [朝鮮科学院 1963] 後室・前室からなる双室墓で、墓主図像・雑技舞楽・家居・行

列・城郭などが描かれている。後室東壁の柱の梁の下に青龍の頭部が遺存するが、他の3壁の図像は不明である。四神図が表現されはじめられる段階の壁画墳である。

江西大墓 [関野他 1915, 関野 1941] 平行2段・三角2段持送り式天井の石室である。玄室の四壁に四神図像が描かれる。花崗岩を研磨した無地の表面に直接、青龍・白虎が描かれる。玄武・朱雀の下に山岳文が配されている。持送り式天井の第1段目に波状唐草文、第2段に飛天、神仙・山岳文(崑崙山)・乗駕仙人(鳳凰)、3～4段に飛天、麒麟・天馬・鳳凰・蓮華唐草文、天井頂部に龍文・蓮華文を描く。

江西中墓 平行2段持送り式天井である。玄室四壁に四神図を描く。花崗岩を研磨した無地の表面に直接、青龍・白虎・朱雀が描かれる。大墓とはことなり、北壁の玄武のみ、山岳文上に表現されている。持送り天井の2段にわたって、波状唐草文と扇形花波状唐草文で飾る。天井頂部は、十二弁蓮華文を中心に、日象・月象・鳳凰1対を描く。

②……………高句麗壁画の変容

(1) 神怪図像の変容

高句麗壁画に表現された神怪図像は、畏獣像(鬼神・鬼面)・力士像・門衛像・胡人像がある。

中国古代の畏獣像のなかで、蕭宏墓碑・馮邕妻元墓などの「両足で立つ擬人形の「鬼神」は「A獣」とよばれる[長広敏男 1969]。そのA獣のうち、非鬼面文で虎よりの図像・怪獣を畏獣Bとよぶことにする(梁・蕭宏墓碑図像)。それらの畏獣は、北魏において「正光初年(520ごろ)よりA獣タイプの鬼神図が流行」しはじめ、画像石・石窟などに表現され、「南朝から粉本が輸入され、北魏の工人はそれを彼らの流儀で模写した」のであろうという[長広 1969]。高句麗壁画の畏獣Aは、北魏由来の畏獣である。

その畏獣(A獣)が高句麗壁画で出現するのは通溝四神塚である。五蓋墳4・5号墳にも表現されている。

鬼神像 鬼面像を鬼面(鬼神A)、虎文獅子(獣首や舌出し獣面)を獣面(鬼神B)として区別する。鬼面は、安岳3号墳・天王地神塚・八清里古墳・大安里1号墳・通溝四神塚、獣面は安岳3号墳にみられる。安岳3号墳では両者が共存する。その鬼神(鬼面)像は、安岳3号墳から通溝四神塚という系統関係がみられ、四神塚を境に表現されなくなる。

力士像A・力士像B 梁・柱などを支える姿態を通常とする。半裸身像のものを力士像Aとする(長川1号墳・大安里1号墳)。長川1号墳では持送り式天井の隅に三段にわたって配置されているが、大安里1号墳では後室四壁の四隅に表現されるようになっている。衣服を身につけたものを力士像Bとする(三室塚)。三室塚では後室の壁面で、梁枋を支える姿態である。舞踊する姿態のもので、武器を持つもの(安岳3号墳、舞踊塚、長川1号墳)を力士像Cとする。壁面のなかで、柱は梁(天上・天界)を支える象徴であり、力士像Aはまさにその柱である。その図像の構成は五蓋墳4・5号墳に継承される。

門衛(力士)A 半裸身像で、武器を持つ(三室塚、通溝四神塚、順興壁画墳)。

門衛(武官・文官)B 玄門ないしは甬道部に表現される(長川2号墳、長川1号墳、新羅・於

宿述知述干墓)。

門衛 (武人) C 武器を持った門衛である (安岳 2 号墳, 五蓋墳 5 号墳, 真坡里 1 号墳)。

門衛 (神将) D 力士像で, 武器を持つものもある (天王地神塚, 通溝四神塚)。

神怪図像の性格 鬼面像 (鬼面・獣面) は, 357 年築造の安岳 3 号墳で出現する。柱・斗拱に鬼面と獣面がえがかれる。鬼面は, 天王地神塚 (5 世紀後半) や八清里古墳 (5 世紀末から 6 世紀初) では斗拱, 通溝四神塚では, 持送り式天井の側面 (第 2 段) に描かれる。舌出し獣面 (虎・獅子)・鬼面は, 通溝四神塚の天井最上段の側壁に描かれる。つまり四神塚では, 鬼面・獣面が描き分けられている。鬼面文は, 建物入口の柱に, 入口側からみて正面に表現される。墓室空間に対して, 辟邪的な意味をもつのであろう。鬼面像は, 天空を支える柱から, 天空の世界といえる天井空間に表現されるようになる。

安岳 3 号墳や徳興里古墳では, 舞踏・格闘するさまの力士である。安岳 3 号墳のばあい, 格闘にさいしての儀礼的しぐさ (舞踏をふくむ) であろうか。

薬水里古墳 (5 世紀前半) では, 刀剣を持ち舞踏する。長川 1 号墳では持送り天井部の四隅に天井を支える姿態, 大安里 1 号墳では玄室の四隅に柱を象徴するように描かれる。半裸像ないしは領巾をまとう力士像で, 梁 (天上の世界) を支える図像としての意味をもつようになる。

五蓋墳 4・5 号墳において, 力士像のモチーフが変容し, 北朝的な畏獣が登場する。玄室の四隅に龍と一体となって柱を表象するのである。梁蕭景墓神道柱でも龍文と組み合わせられている。五蓋墳 5 号墳と通溝四神塚では畏獣 B がみられる。

いずれも畏獣として包括しえるが, 図像じたいの差異は, 性格のちがいによるものであろう。たとえば安岳 3 号墳では, 鬼面文と力士像, 五蓋墳 5 号墳では, 畏獣 A と B が共存する。梁の蕭宏墓でも同様であった。婁叡墓では, 虎と畏獣 (方相氏) が同一画面に描かれる。

これらの図像は, それぞれの意味をもつ。次に三室塚, 通溝四神塚, 五蓋墳 4・5 号墳の壁画構成・表現空間をあらためて検討する。

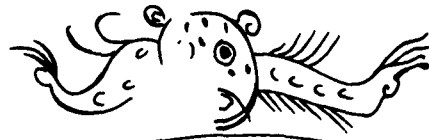
三室塚壁画 門衛像と力士像は明瞭に区別されている。梁を支え, 四壁に描かれるのが力士像で

表 1 神怪図像の変遷

神怪図像	400					500								
	安岳 3 号墳	長川 2 号墳	徳興里古墳	角抵塚	天王地神塚	長川 1 号墳	三室塚	大安里 1 号墳	八清里 号墳	安岳 2 号墳	真坡里 1 号墳	通溝四 塚	五蓋墳 4 号墳	五蓋墳 5 号墳
鬼神・鬼面像	●				●			●	●		●	●		
力士像 A	●		●		●	●	●	●						
力士像 B							●							●
畏獣 A												●	●	●
畏獣 B												●		●
門衛 (力士) A												●		
門衛 (武官・文官) B		●				●	●							
門衛 (武人) C										●				
門衛 (神将) D												●		●
胡人像				●		●	●							



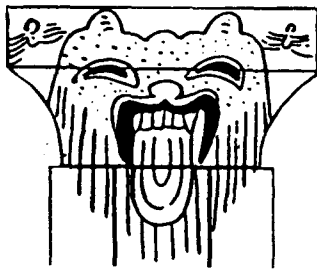
管城子2号墓 (漢魏)



管城子2号墳



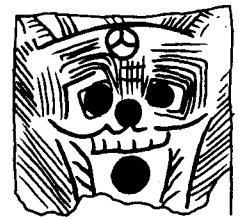
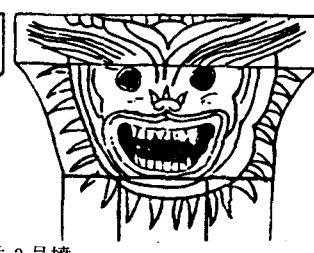
袁台子壁画墓 (東晋)



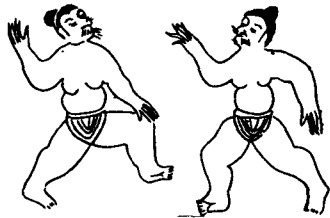
安岳3号墳



安岳3号墳



八清里古墳



長川1号墳



大安里1号墳



三室塚



三室塚



袁台子墓



安岳3号墳



長川2号墳



長川1号墳



安岳2号墳

図3 神怪圖像の変遷



元氏墓 (522)



蕭宏墓 (梁526)



茹茹公主墓 (北齊550)



通溝四神塚



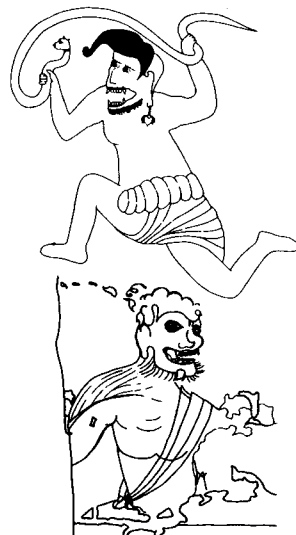
五盞墳 4 号墳



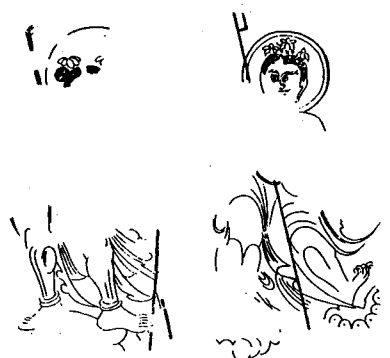
通溝四神塚



通溝四神塚



順興壁画墳 (新羅575)



真城里 1 号墳

あり、入口や通路にえがかれるのが門衛である。第1室は、西壁に門衛（文人）像（袖石壁面）、南壁に狩獵図（下段）、墓主図像・行列図（上段）、天井部に流雲文（右壁）、玄武（奥壁）、朱雀と菩提樹（左壁）が描かれる。第1室から第2室の甬道の門衛像は胡人の風貌である。第2室の北壁と東壁の力士像の背後に双蛇が配置されている。力士と蛇が組みあわさるが、結合していない。南壁の力士像に流雲文化した領巾を身につける。天井部には、東（後）壁に玄武、北（右）壁に白虎、西（前）壁に朱雀、頂部に日象・月象図、星宿図を描く。そのほか流雲文・有角奇獣・麒麟・瑞鳥がみられる。第2室から第3室への入口（第2室西壁）に門衛（武人）像が配置される。第3室の東壁に、右衽の衣服を身につけた男子像（力士像）で、首に蛇が絡みつく。南壁の力士像の両脚に蛇が絡まり、両側に鎌首をもたげる。右脚側には、べつに「二蛇交尾」が単独で描かれている。北壁の力士像の両脚部に蛇が絡みつくが、頭部は剥落し、不明である。袍の袖口に蓮華文が装飾されている。北壁の力士像は右衽の短衣（襦）を着て、流雲文化した領巾をまとう。袴の裾文様は蛇ではないが、明らかに蛇の文様が形式化したものである。襦の袖口に蓮華文が表現されている。第3室では、東壁に玄武1対、西壁に朱雀1対、北壁に白虎、北壁に青龍が表現されている。第2室の力士像には双蛇が組みあわさるが、絡まっていない。第3室の東壁の力士像には頸に、南壁力士像には両脚に蛇が絡まる。そのいっぽうで定型化した玄武の図像が併存する。第2・3室では、8体の力士像が天界と地界の境を象徴する梁を支えている。第2室の力士像には蛇がともなうが、別個に表現されている。第3室の力士像は、蛇と合体するように絡みつく。北にあたる壁面に玄武とともに、蛇が絡まる力士像1体がある。壁面に力士と蛇、その天井部に玄武が存在する。その力士と蛇の合体は、玄武の生まれる過程を表現したものであろう。漢代の馬王堆1号墓帛画には、玄武の祖形と推定される、力士と蛇が天上の世界を支える構図がある。その「力士風の男」の足の間を縫っている蛇の図像は玄武であり、「力士風の男」の原形が亀であり、蛇とともに玄武の一つの祖形と推測する〔曾布川1981〕。その亀の祖形は「鼈」であり、三室塚の人格化された、梁を支える力士も同様な性格をもつ。力士像に蛇がからむ図像は、三室塚にあるが、新羅の順興壁画墳では蛇を持ち上げ、肩にかけるような力士像がある。蛇を銜え、食べる怪鳥と共通する。

通溝四神塚・五盃墳4・5号墳壁画 3基とも、墓室四壁に四神図像、四隅に畏獣が配され、天井壁画には、乗龍天人・技楽人（角笛、横笛、胡角、腰鼓）、乗鹿天人、乗虎天人、乗鶴天人、乗飛簾（鹿か麒麟）天人、乗龍天女（弹琴）、乗鳳凰天人（技楽人）、人首蛇尾（龍身）像の日神羲和・月神常羲像が共通してえがかれる。

四神塚天井西面に描かれた、蛇を食べる（呑む）怪鳥図像について、前漢馬王堆1号墓漆棺、東晋鎮江降安2（394）年墓の帛画〔鎮江市博物館1973、姚遷・古兵1981〕などにみられる。鎮江墓では、「獸首噬蛇」（巴国黒人）」とよばれる図像である。

4・5号墳の牛首人身像は神農であろう。また4号墳では車輪をつくる人物、砥石をかける人物、5号墳では、鉄鎚・鉄鉗をもつ鍛冶神という鍛冶にかかわる神像が描かれている。

五盃墳4・5号墳に特有の輪つなぎ唐草文は、北魏（石棺）の文様にみられるように、外来的な意匠で、4・5号墳のみの特色である。唐草文は四神塚で盛行する。集安の亀甲塚、天王地神塚のような亀甲繋ぎ文とパルメット文との関係もあろう。

羨道両壁の力士像の関係からみると、五盃墳4号墳は、五盃墳5号墳の神将図を下図として、異

質の門衛（力士）像を描いた可能性がある。その逆ではありえない。とすれば5号墳が先行する。

3基の時期的関係について、四神塚と、五蓋墳5・4号墳の前後関係はみとめられるが、4号墳と5号墳の関係が明確でない[東 1988・97]。石室構造はきわめて類似するが、玄室高さ／天井高さの指数は、四神塚が54、4・5号墳が46である。後者が扁平化し、時期的に後出する傾向がある。絶対年代は、520年を上限とする北魏の畏獣[長広 1969]から、その時期を大きくさかのぼらない。

（2）高句麗壁画の榜題

壁画に榜題を記すのは、漢代の壁画にみられる。望都1号墓（後漢）では「辟車伍百八人」・「白兔」などの銘文がみられる。

遼東城塚 城郭図のなかに、「遼東城」という榜題がある。

徳興里古墳 双室墳で、前室側壁に墨書銘、後室の天井部に榜題を書いた図像が描かれる。天井南壁に「富貴之（之）象」・「吉利之象」・「仙人持蓮」・「□□之象」・「牽牛之象」・「猩猩之象」、天井西壁に「千秋之象」・「萬歳之象」・「玉女持幡」・「玉女持幢」・「玉女持（槩）」、天井北壁に「天馬之象」・「地軸一身両頭」・「(爰)雀之象」・「博位□□頭生四耳□有□自明在於石」・「賀鳥之象學道不成背負藥□」・「喙遠之象」・「壁毒之象」・「零陽之象學道不成頭生七□」、天井東壁に「飛魚□象」・「陽（光）之鳥履火而行」・「青陽之鳥一身両頭」の榜題が墨書されている[南 1995]。徳興里壁画では、四神図像が表現されていないが、天界の図像・星宿図は方位を示している。

通溝四神塚 後室天井の持送り式天井の最上段の南面に鳳凰（朱雀）・畏獣・星宿（南斗七星）が描かれ、畏獣（舌出し鬼面像）の左横に「噉穴不知□」という銘文がある。「知」のあとには「足？」と釈読されている[池内・梅原 1940]。その鬼神像は、「目を見張り舌をだす張目吐舌」で、悪霊を退散させる[大形 1997c]。同一天井側面に蛇を食らう怪鳥図像が描かれているが、鬼神も、穴（肉）・蛇など悪霊を食べる獣で、その蛇を口に銜える像の本質は、「死者の体内に侵入する蛇を追い払う辟邪」である[大形 1997c]。蛇を銜える鎮墓獣も、「外部から侵入してくる蛇形の悪霊を牽制し、墓主の尸體を守る」という。銘文は、明らかに畏獣（鬼神像）の榜題として書かれており、その性格の一端を知ることができる。鎮江東晋墓の「虎頭載人首蛇怪獸」や、梁の蕭宏墓(526)の碑石にみえる畏獣と同じ性格のものであろう。なお『後漢書』南蛮伝によると、「其西有噉人国、生首子輒解而食之」と、南方に噉人国があったという（『大漢和辞典』）。四神塚では、畏獣は南側面に描かれ、中国南朝由来の説話、辟邪思想と関連するかもしれない。

高山里1号墳 墓室東壁の青龍の右上に、「幅三三糎、現存の長亦同一なる黄色の色紙形を描き、縦罫を以て五行に分界し、最初の二行に太く濃き遒勁なる文字を墨書しあることなり。但し現在は其の上方を缺失するのみならず、剝蝕甚しく五字以外は全く扁旁を明にすること能はず」。また西壁の白虎図像の左方に「色紙形の區劃ありて幅二九・五糎、現存長一糎、今ま上方を缺如す」。「本區劃内の文字は元来最初の二行にのみありしものにして、白、神の中間に當たる罫外に奇古なる字體を以て虎の一字を添書せり。十字中疑なく讀み得るもの四字に過ぎずして、その意味を解し得ざるは遺憾とする處なり」[小場恒吉 1937]。白神が虎であることが明記されている。東壁の□神は青神（青龍）であろう。玄武や朱雀に対する榜題は遺存していないが、青龍・白虎が特別視されているかもしれない。

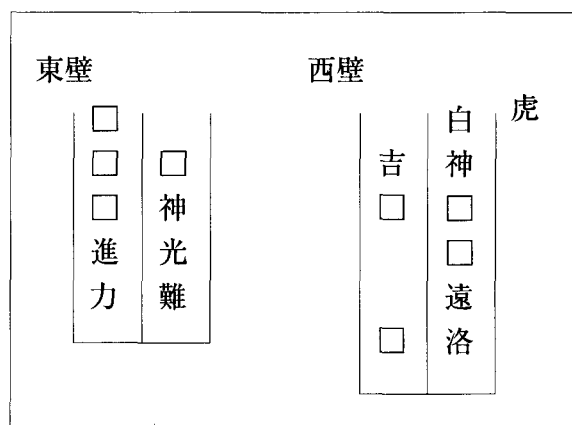


図4 高山里1号墳標題

梅山里四神塚 北壁の玄武の左側に建物があり、墓主と3人の婦人像が描かれるが、その墓主右後方の頭上に「仙寛」という榜題が書かれる。人物像は領巾をなびかせ、他界した天上での姿が表現されている。「仙寛」は、昇仙した仙人の意であろう。建物の外には牽馬図が描かれている。

天王地神塚 天井北西面の乗駕鳳凰人物像の直上に「天王」の榜題がある。その人物は左手に旗をもつ。北面に蛇身で兩人頭で、四本の亀肢の図像があり、その楕円状の蛇身のなかに「地神」と書かれる。身体は亀蛇が合体した玄武像といえる。地神は玄武、地界の神であるが、天王は鳳凰、天上の神であろうか。南面には朱雀のような鳳凰がみられる。東面の日象・星宿図の下に人（獣）頭鳥身像があり、「千秋」と書かれる。千秋像にはほかならない。西面に獣頭鳥身像がみえるが、萬歳像で、もともと「萬歳」の墨書があったのであろう。

鎧馬塚 玄室左壁の第1段持送り天井側面に、冠飾をつけた墓主像・従者と、御者・飾馬の像があるが、そのあいだに「冢主着鎧馬之像」という榜題がある。「冢」を「原」と釈読する見解〔関野貞 1941〕もあるが、「塚」であろう。その主（墓主）は、鎧馬に乗っていないが、その鎧馬の導かれて昇仙するさまが描かれているのであろう〔東 1992〕。

於宿知述干墓（新羅） 玄門石扉の「乙卯年於宿知述干」という線刻いがいに、玄室北壁に1行5字、2行の「画寓□□□」「北第五列□」と記されている。後者は石室構築にかかわる銘文である。前者は、石扉に描かれた壁画にかかわるものである。

高句麗壁画墳において、表現された図像に榜題が記されたものとしては、徳興里古墳がもっとも古い。南秀雄〔1995〕は、徳興里古墳・天王地神塚・舞踊塚・安岳1号墳などの天井壁画の図像と榜題との関係について分析し、それらは、①方位に関して全体の構成の柱となるようなもの、②瑞獣や吉祥的な意味を帯びたもの、③仙人（玉女）、④（医薬的な）効能があると考えられているものの4種に分かれるという。

高山里1号墳や通溝四神塚では、鬼神・辟邪にかかわる榜題である。高山里1号墳では、四神図像のなかで、青龍・白虎像が重視されているようである。また梅山里四神塚や鎧馬塚では、昇仙思想にかかわる。

(3) 高句麗四神図像の変容

四神図像は、漢鏡の図像として表現されている。四神の意味するところは、「天上の夫夫所定の位置にあつて青龍、白虎、朱雀、玄武は天の四方を掌り、陰陽の働きを順調ならしめる」。「方格四神鏡の圖柄は方形の大地の四方の果に立つた梁と柱によつて蓋状の天が支へられ、この天の四方に敗された星座の精に瑞獣が現れるといふ一種の祥瑞圖」と解釈されている〔林巳奈夫 1989〕。四神の思想は、時代・地域によってことなるのであろう。

高句麗壁画においては、麻線溝 1 号墳がもっともさかのほる。安岳 3 号墳では、四神図は表現されていない。東晋代の朝陽袁台子壁画墳では、東西壁に青龍・白虎、南壁に朱雀、北壁の玄武が表現されている。四神は、晋代になって、昇天思想との関係はさほどなく、驅邪厭勝（まじないで屈服する）し、死者の安全を守護する守護神のような性格をもつ〔劉中澄 1987〕。

朱栄憲〔1972〕は、人物風俗図と四神図が同一古墳で表現されているものとして、遼東城塚など 13 基の古墳をあげる。そして人物風俗・四神図類型の壁画墳を、四神図のしめる比重によって、つぎのように分類する。

1. 四神図が天井にあり、人物風俗の比重の方が大きい古墳……三室塚、舞踊塚（青龍と白虎のみ）
2. 四神図と人物風俗図が同じ比重をしめ、四神図が四壁にある古墳……遼東城塚、薬水里壁画古墳、高山里 9 号墳、天王地神塚、大安里 1 号墳、八清里壁画古墳、星塚、双楹塚
3. 四神図と人物風俗図はともに四壁にあり、四神図の比重の方が大きい古墳……狩獵塚、高山里 1 号墳
4. 四神図が中心的位置をしめる四神図墓で、門守がいて、持送り石を支える怪獣があり、天井に人物風俗画があるか、または四神図の周囲を各種の装飾文で飾られた古墳……鎧馬塚、通溝四神塚、五蓋墳 4 号墳、五蓋墳 5 号墳、真坡里 1 号墳
5. 四神図が中心的位置をしめる四神図墓で、四神図しかなく、人物風俗図的要素がない古墳……江西中墓、江西大墓、内里 1 号墳

朱栄憲〔1972〕のいう人物風俗図は、星宿・建築・墓主の室内生活・行列・狩獵・すもう・男女人物・戦闘図・門守などの実生活の描写の場面、帳房・城郭・車庫・牛車などの各種建築物などである。それは「高句麗貴族の生活風習」をしめし、「死後の生活は生存当時の生活の延長という彼らの素朴な信仰を反映したもの」としてとらえられている。

ところが、梅山里四神塚などの墓主図像は、「仙覓」の榜題や墓主図像の蛇化した領巾から、昇天した像の表現と解釈しえる。舞踊塚・長川 1 号墳などの狩獵などの情景も人物風俗画とみなしがたい。高句麗壁画は、基本的に現世ではなく、来世、天界のさまを表現したとかんがえられる。

神仙思想、四神思想の出現する段階は、同時に墓主図像が衰退する段階といえる〔東 1993〕。

四神図像の出現 高句麗壁画のなかで、四神図像の描かれた古墳として、遼東城塚がもっともはやく、4 世紀末葉である。その墓室の構造は、遼陽の壁画墳の影響をうけている。「遼東城」の榜題のある城郭図も遼東郡の遼東城（遼陽）の描写とみられる。遼東・遼西地域では、4 世紀代の遼寧省朝陽・袁台子壁画墓で四神図像があらわれる。安岳 3 号墳（357 年）の石室構造・壁画も遼東地域の影響をうけているが、四神は表現されていない。またその系統上にある徳興里壁画墳において

も壁画が描かれていない。

集安の舞踊塚では青龍・白虎・双鶏が表現されているが、玄武はみられない。長川1号墳では、青龍・白虎・朱雀（1対）に、玄武がくわわり、四神で構成されている。ただ玄武図像は剝落し、明瞭でないが、対向する玄武が存在したと推定されている [陳相偉・方起東 1982]。環文塚では、天井部右壁に青龍の身部、左壁に白虎の脚の痕跡をとどめる。つまり集安地域において、完結した四神図が出現するのは、長川1号墳の段階といえる。

長川1号墳の前室四壁の壁画は、舞踊塚と角抵塚の壁画図像を融合している。後室は蓮華文で装飾され、長川2号墳や散蓮花塚を想起させる。長川1号墳の四神図は、具体的に舞踊塚の系統上にあり、朱雀図像は、舞踊塚の双鶏にあいつうじる。玄武図は、そのころ平壤地域で出現していた薬水里古墳などの影響関係もみられる。その四神図像は、三室塚に継承されてゆく。いずれも天井空間に表現されていることが特徴である。長川1号墳では、前室の天井壁画には、四神図像の上段に仏像、墓主の礼拝図、蓮華化生など仏教的要素のつよい図像が描かれる。仏教思想にもとづく世界観の表現とされている。道教（神仙）思想と仏教思想の融合といえる。

通溝四神塚では、四壁に四神、四壁の四隅に天界を支える畏獣像、天井部に鬼神像、千秋・萬歳像、日神羲和像、月神常羲像、星宿図が配置されている。鬼神・畏獣像は、北朝壁画の影響をうけているが、6世紀後半代の高句麗人の思想が表現されている。

図像およびその構成上の系統関係があり、画師集団や造墓集団が存在したのであろう。三室塚と通溝四神塚の間に、壁画の表現に画期がみられる。5世紀前半代の造墓において、集安（鴨緑江流域）と平壤（大同江流域）に共通した要素もあり、国内城を核として、分業が発達し、造墓集団が形成されていたのであろう。

高句麗における四神図像は、江西大墓・中墓をもって終焉する。江西大墓は平原王（在位559-590）、江西中墓は嬰陽王（590-618）に比定される。7世紀前半の壁画墳である。墓室壁画は、四神図である。

6世紀末から7世紀にかけて、四神図壁画の数からわかるように、きわめてかぎられる。つまり内里1号墳、真坡里1・4号墳、江西中墓、江西大墓に限定されるのである。6世紀以来の四神図像が発達する。その図像的特徴は、天井頂部の壁画にあらわれる。

江西中墓は、持送り式天井に波状唐草文・飛天・神仙・山岳文（崑崙山）・乗駕仙人（鳳凰）・麒麟・天馬・鳳凰・蓮華唐草文、天井頂部に龍文・蓮華文を描く。中墓は、持送り天井に波状唐草文・扇形花波状唐草文、頂部は十二弁蓮華文を中心に日象・月象・鳳凰1対を描く。龍・蓮華文か

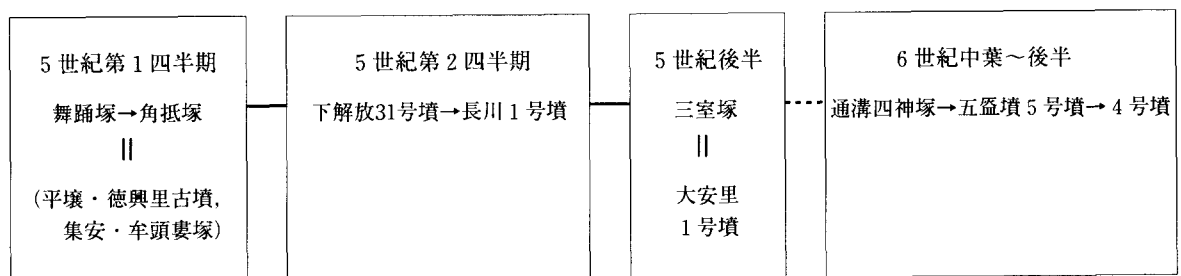


図5 画師集団の系統

ら鳳凰文に変化する。龍文から蓮華文へ、さらに鳳凰文へ変化する。

高句麗壁画の四神図像の表現空間は、前室（側室・耳室）、後室、側壁（四壁）、天井壁面かによって、その性格や意義がことなる。

- I. 前（側）室に、四神図が描かれる。遼東城塚では、朱雀がなく、青龍・白虎・玄武からなる。4世紀後半。
- II. 後室に、青龍・白虎が表現され、玄武が表現されない段階のもの（舞踊塚）。5世紀後半。
- III. 後室天井部に四神図が表現されるもの（長川1号墳、三室塚）。薬水里古墳では後室側壁と天井下端部で墓主図像と玄武が組みあわさる。5世紀代。
- IV. 後室側壁に四神図が表現されるもの（八清里古墳、星塚）。後壁で墓主図像と玄武が組みあわさるもの（大安里1号墳、双楹塚、梅山里四神塚、鎧馬塚）。5世紀後半～6世紀前半。
- V. 後室側壁に四神図像がえがかれるが、墓主図像でなく、装飾文様（輪つなぎ唐草文など）と組み合わせられて表現されるもの（五蓋墳4号墳、五蓋墳5号墳）。流雲文・雲気文・蓮華文・唐草文と組みあわさるもの（真坡里1号墳、通溝四神塚）。6世紀後半。
- VI. 後室側壁に四神図のみが表現されるもの（湖南里四神塚、江西大墓、江西中墓、高山里1号墳、高山里9号墳、内里1号墳）。6世紀後半～7世紀前半。

天井頂部の図像—龍文から蓮華文へ— 四神壁画において、天井頂部の文様が龍（青龍白虎）から蓮華文へと変移する。蓮華文は、天帝を象徴する図像である。

- 天井頂部 青龍・白虎……通溝四神塚、五蓋墳5号墳
- ♪ 黄龍……五蓋墳4号墳、江西大墓
- ♪ 蓮華文……安岳3号墳・双楹塚・徳花里1号墳（4～6世紀前半）、真坡里1号墳・江西中墓（6世紀後半～7世紀）

四神塚・五蓋墳4号墳・五蓋墳5号墳の図像構成は、畏獣によって龍が支えられ、さらに天井頂部に蓮華文・唐草文と龍文が描かれる。龍が主体であった。江西大墓では、黄龍が天帝として陰陽五行にもとづき表現される。江西中墓において、龍から蓮にかわり、それは「天上の存在」[林巳奈夫 1989]として表現されている。

四神壁画と王陵 高句麗において、壁画墳は4世紀代に載寧江・大同江流域（安岳3号墳）、集安（山城下332号墳、麻線溝1号墳など）で出現する。王陵は、5世紀初めの広開土王陵まで積石塚で、次代の長寿王からは石室封土墳となる。平壤遷都（427年）と軌をいつにして、墓制が大きく変容する。高句麗の王陵は、図6のように比定しえる。

陽原王の陵は、湖南里四神塚で、王陵に壁画がとりいれられた最初といえる。その湖南里四神塚は、四神図像を中心とする壁画で、墳墓は風水思想にもとづき築造されている。王陵の墓室に四神がえがかれ、四神の地にかなう、風水思想にもとづく立地条件である。

平原王は、平壤城の西の三墓里の平野に墓域を定め、四神壁画墳を築造した。平原王の諡の「平崗上好王」の、その名のと通りの立地条件である。

湖南里四神塚と江西大墓では、立地条件が変化する。つまり前者は、丘陵の緩傾斜地に築き、背後に後山（玄武）、東西の丘陵（青龍・白虎）がのびたその中央に陵が築かれる。南には川（大同江）が流れる。まさに「座北朝南」の立地条件である。陽原王の諡である「陽崗上好王」の地理的

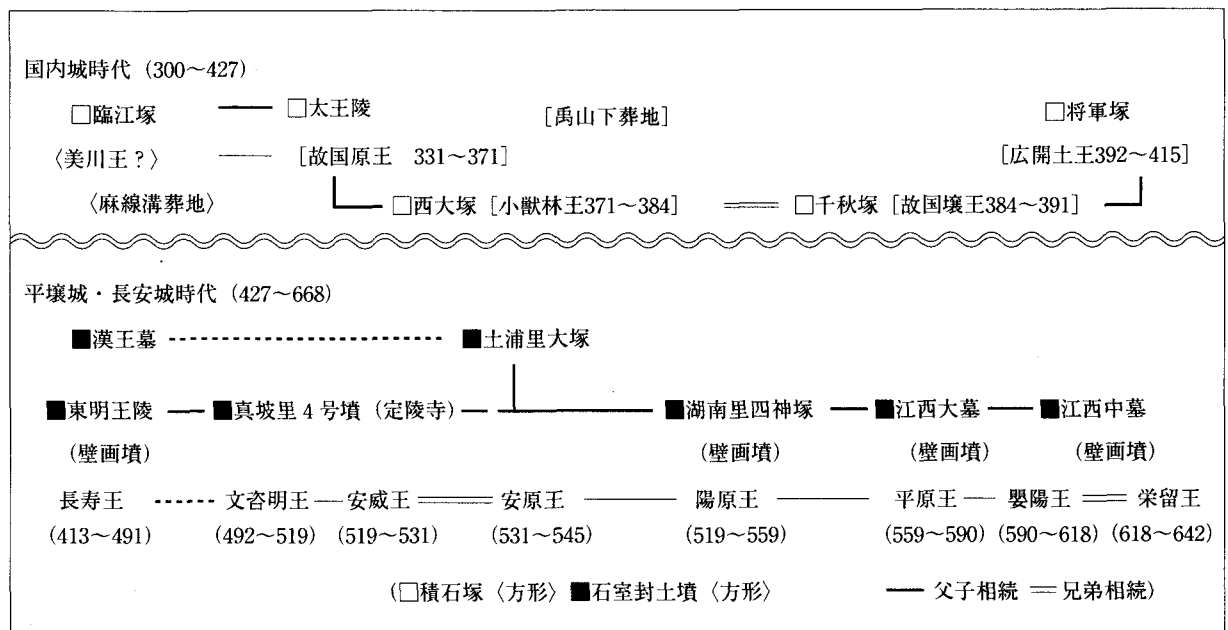


図6 高句麗王陵と壁画墳

条件にある。それにたいし江西三墓は、周囲を山・丘陵でとりかこまれた小平野の中央の微高地に立地する。いずれも風水の地といえるが、湖南里四神塚は南朝、江西三墓は北朝・隋唐の帝陵の立地条件に類似する。

陽原王（在位516～559）は、平壤城の東方の巨大山南麓の「陽崗」の地に陵を定めた。その巨大山麓は、安原王陵と推定される土浦里大塚と王族・陪塚群が築かれていた。土浦里大塚の墳丘・石室構造を継承し、新たに四神壁画をとり入れたのである。

平壤型石室と王畿の形成 6世紀後半には、大同江を中心とした地域に、定型化した石室墳が分布する。平行・三角持送り式天井式で、玄室・甬道・羨道からなる単室墓である。官人層などの支配階層の墳墓である。この平壤型石室の分布地域は、平壤城（長安城）を中心とした王畿（畿内）といえる地域である。その王畿内に諸大城・諸城・諸小城・城が配置されたが、その勢力地には古墳群が形成された。そうした墓群のなかに、五蓋墳4・5号墳、通溝四神塚のような四神壁画墳も築造される。平壤城時代における有力な官人層（族長）の墳墓であろう。

四神壁画の分布圏 四神図像の表現された古墳をあげると、今日確認されている90余基の壁画墳のなかで21基である。そのなかで6世紀後半～7世紀代の四神壁画墳はきわめて少ない。

集安地域；①三室塚，②舞踊塚，③通溝四神塚，④五蓋墳4号墳，⑤五蓋墳5号墳

平壤地域；①遼東城塚，②薬水里壁画古墳，③高山里9号墳，④天王地神塚，⑤大安里1号墳，⑥鎧馬塚，⑦八清里壁画墳，⑧狩獵塚，⑨星塚，⑩双楹塚，⑪高山里1号墳，⑫湖南里四神塚，⑬内里1号墳，⑭真城里1号墳，⑮江西中墓，⑯江西大墓

四神思想と王権 陽原王は、552年長安城への遷都を開始するが、その造営工事は平原王（在位559～590）の566年に始まり、586年に遷都する。長安城では、外城に坊里制が施行され、国家機構も整備され、王畿も形成される。また7世紀には、安鶴宮も造営された。

表2 山城と四神壁画墳

北	山城子山城	集安	鴨緑江流域	通溝古墳群（通溝四神塚，五盃墳4・5号墳）
王都	大城山城	平壤	大同江流域	湖南里古墳群（四神塚），高山里古墳群（1・9号墳），内里古墳群（1号墳），江西三墓（大墓・中墓），真坡里古墳群（1・9号墳）
北	安州城	平安南道安州市	清川江流域	龍湖洞古墳群
東	乾骨山城	成川郡		
南	長寿山城	黄海南道新院郡	載寧江流域	安岳古墳群
	白川山城・太白山城		礼成江流域	
西	黄龍山城	平安南道龍崗		梅山里四神塚

陽原王から平原王の時代に長安城へ遷都するが、その都城の造営と、四神壁画の採用、王陵の立地条件の変化などが不可分の関係にある。

四神思想が、天（帝）を至上の最高の神とする、国家体制の統治思想となる。四神思想と天文・星宿図は一体のものである。高句麗では、徳興里古墳をはじめ、5世紀代には星宿図が壁画に描かれ、天帝（天王）の思想が生まれている。6・7世紀にも天文図は発達する。なお奈良県のキトラ古墳の天文図によって、天象列次分野之図が、伝承のとおり7世紀末の高句麗までさかのぼることがあきらかとなった。

そうした歴史の展開過程のなかに、高句麗王権力の変質、統治思想、国家体制が確立し、国家諸権力が強大となり、領域も拡大した。6世紀末（598年）にはやがて隋との国際戦争がはじまり、戦争の世紀となる。

③……………三燕・北朝の壁画墳

墓室の構造、壁画の構成、壁画配置（表現空間）、四神図像・畏獣図像などの表現空間などを主として記述する。石棺・墓誌の線刻文などの資料もふくめる。

（1）晋墓

遼東の壁画墓の壁画主題は墓主坐像で、昇仙思想が表現されている。墓主図像はいずれも右（西）壁に描かれる。そのほか行列・厨房・建築（楼閣・倉庫）・牛車・馬車・舞楽、門卒・門犬などが描かれる。この門卒は、のちに力士像などにかかわる。後漢代の旧城東門里壁画墓〔遼寧省博物館 1985〕では、帷幔の上縁に唐草文帯があり、そのなかに「羊首人身畏獣」が描かれている。

三道壕西晋墓〔遼陽博物館 1990〕 壁面に「太康七年八月」・「太康九年春三」・「太康十年十月」の銘が、武人像・射鹿図・飛鳥（鳳凰）図などとともに同一壁面上に線刻されている。他に「□孫度支□□大好」「李」「嬢平」「將軍」？という文字がある。太康年間（280～289年）から元康年間（291～299年）の西晋の墓葬である。

棒台子壁画墓 [李文信 1955] 壁画の内容は、門卒・飲食供宴・出行・宅第・厨房などである。門卒二人は墓門中央の立柱の外面に描かれ、2頭の犬をともなう。犬の胴部には羽状の表現がみられ、後に発達する鎮墓獣とかかわるものであろう。

三道壕窯業第四場墓（車騎墓）[李文信 1955] では、門卒は墓門右方壁、前廊天井に日月雲気文、槨室中央壁の石枋頭に獣面が描かれる。その獣面は漢代のものでなく、高句麗の獣面瓦当文に近似する。

南雪梅1号墳 壁画は、房舎、雲水文、主人公夫婦・従者、左右各3人の人物像が表現されている。後室から出土した陶盤には、剣を持つ羽人と龍を中心として、その周囲に人首鳥身・射騎図・騎馬人物像・鹿2頭が描かれる。壁画の題材と共通する。

北園6号墳 [駒井和愛 1944, 遼陽市文物管理所 1980] 壁画は、墓門の柱石・楣石に「雲気」文、「雲中君、雷公とおぼしき怪物」が描かれる。騎馬人物、男女2人が乗る馬車と節をもつ騎馬人物像、武人像が描かれる。

北園2号墳 [遼陽市文物管理所 1980] 墓門の内壁に左手に弓、右手に矢を持ち右に進む門卒、右側に、左を向く門犬が描かれる。前廊耳室に瓦葺建物、白鶴、物像、壁上部に日象・金色の三足鳥、月象・玉兔が描かれる。

北園3号墳 墓室の前廊東壁に墓主宴居図があり、儀衛2人、前廊前壁に進賢冠をかぶり、手に長簡を捧げもつ属吏7名、前廊北壁の西段に簡を捧げる属吏5名が描かれるという [湯池 1989]。

上王家村墓 [李慶発 1959] 墓主は冠をかぶり、右手に塵尾をもつ。主人公に向かって笏を捧げる従者があり、頭部に「書佐」という墨書がみえる。車騎出行図のなかで、先導する2列8人の騎史は長袍を着用し、手に笏を捧げ持つ。黄牛が牽引する黒輪車に主人公が乗る。陶器の「徐」銘楷書や青磁虎子などから西晋末に推定されている。

袁台子壁画墓 [李慶発 1984, 劉中澄 1987] 遼寧省朝陽に位置する。龕室4と側（耳）室1の平天井単室石槨墓である。玄武（高さ38cm、幅54cmの図像）は北壁龕の上部に描かれる。西壁前部の下段に白虎と「羊首鳳」、その上部には奉食図が描かれる。東壁前部の下段に青龍と鳳凰（鳳鳥）、その上部には狩獵図がみえる。狩獵図の上部に金鳥（三足鳥）のいる日象図、その東側に三日月を中心にその左に玉兔、右に「金蟾」が表現されている。蟾蜍は人首で、舌を出し、両手で天井を支え、両足は蹲踞の姿勢をとる。墓主図像は西南側の龕室右（西）壁に描かれる。門吏像は門の内側に東西相對するように配されている。門吏は黒幘をかぶり、角張った眼、齒をむき出し、方領長衣をまとい、履をはく。左手に長矛を持ち、右手は矛の柄を支え持つ。四神図のうち、南壁の朱雀は脱落している。青龍の上に鳳鳥、白虎の上に「羊首鳳」が描かれる。青龍は長さ110cm、高さ65cmで、壁面の長さ400cm、高さ約200cmに比べて大きいといえよう。四神が辟邪で、死者の安全を守る「守護神」であり、門吏の形相と通ずる [劉中澄 1987]。墓主図像を主題とする壁画であるが、東西の両壁に青龍・白虎、南壁に朱雀が比較的大きく描かれている。青龍と白虎に鳳凰がともなうが、これは梁代の画像磚にみられる意匠である。

墓室の構造は、北燕馮素弗墓の前段階にあたる。遼東地域の墳墓における四神図像の初出例である。袁台子壁画墓の年代は、東晋の4世紀初から4世紀中葉 [李慶発 1984]、4世紀前葉 [東 1987] と推定される。

太平房村壁画墓 [徐基・孫小平 1985] 遼寧省朝陽市太平房村。市の西南30km, 老虎山河と大凌河との合流地点の左岸に位置する。耳室のある単室石槨墓。主室(200×70~78×210cm)と耳室(58×45cm)の壁面に漆喰が塗られ、壁画が描かれる。後壁(北壁)に墓主夫婦の坐像, 東壁に侍女・厨房・「備牛図」が遺存する。壁画はいずれも墨で輪郭を描き、彩色されている。耳室では壺などの明器が多数出土している。墓主は進賢冠をかぶるが、馮素弗墓のものと同一であり、魏晋の統治階級の冠とみる。牛犠は鮮卑の風習ととらえられている。

北廟村1号墓 [徐基・孫小平 1985] 朝陽市の西40kmに所在。石室は刀形(片袖式)で、扁平な石を積築する。天井石は1枚の板石(約167×66×26cm)である。石室四壁に白灰が塗られ、南壁をのぞき、黒・赤の2色で描かれる。絵画の手法は大平房壁画墓と同じである。北壁に墓主夫婦座像, 西壁に牛耕図, 西北隅に山林図がみられる。四つの山に、三枝にわかれた樹木が表現されている。墓主が生前に占有した田庄と山林であるとの解釈もある。東壁に墓主の家居・人物像, 黒色の「狗」2匹が遺存するが、東壁には3・4匹の狗が表現されたと推定されている。狗の飼育は鮮卑の習俗であり、壁画題材との関係を指摘する。このほか剥落した壁画片に、婦女汲水図, 男女の人物像, 厨房食物架図がのこる。狗の表現が西官營子2号墓と、同一の画師の手とみられるほどに類似するという。

新城12号墓 [嘉峪関市文物管理所 1982] 嘉峪関市。穹窿天井式の塼室墳。墓門上に異形の獣頭, 各斗拱に瑞羊図, 閣門, 朱雀, 神鹿, 羚羊, 狩獵図, 騎射図, 閣門上の正方形塼に「托墓力士」, 冠をかぶる頭像, 青龍・白虎が描かれる。画像塼は、主として前室四壁と後室後壁にみられる。各種の文様が表現されているが、前室に「龍鱗虎斑文独角猛獸」がみられる。門には四神・力士像がみられるが、墓室の画像は生産労働・日常生活の情景にかかわるものである。

新城13号墓 [嘉峪関市文物管理所 1982] 嘉峪関市。穹窿天井式の塼室墳。梁檐頭上に獣頭, 斗拱に雲気文が描かれる。瑞羊, 閣門の左右に正方形の塼が縦積みされ、倒立した托墓力士像, 閣門の上に青龍・白虎の画像塼がはめられている。後室に二棺があり、男棺に東王公・西王母・雲気文, 女棺に伏羲・女媧・雲気文が描かれている。

酒泉丁家閘5号墳 [吳福驥 1979・1989, 張明川 1979] 甘肅省酒泉。前室と後室からなる塼室墳である。前室の四壁前面に壁画が描かれる。壁画が3段で構成されている。上段の西壁に、山岳(崑崙山)に安座する西王母と九尾狐・三足鳥, 天馬, 月象図, 上段の東壁に東王公, 日象図, 南壁に麒麟(白鹿), 北壁に天馬が表現されている。前室西壁中段に墓主図像, 北壁に墓主の牛車, 下段に行列図, 食肉倉庫, 農園, 扶桑樹が描かれる。壁画全体は昇仙図像である。

酒泉西溝村2号墓 [甘肅省文物考古研究所 1996] 甘肅省酒泉西溝村。双室塼室墳。前室で人面蛙身力士塼, 墓道で狐首力士像の塼2個が出土している。

酒泉西溝村5号墓 [甘肅省文物考古研究所 1996] 甘肅省酒泉西溝村。双室塼室墳。墓門の各層に力士像, 牛首人身像, 鶏首人身像, 白虎, 飛虎の画像塼が彫刻されている。前室北壁に白虎の画像塼がある。魏晋時代。力士の図像が未報告であきらかでないが、畏獣像にかかわるものであろう。

霍承嗣墓 [文物 1963-1] 雲南省昭通県。北壁に墓主図像(坐像)が強調して描かれる。天井部は、北壁に玄武と騎馬人物像, 東壁に白虎, 西壁に人物像と青龍, 鳳凰, 建物の図像が描かれる。龍の背に接して「右青龍」の文字がみえる。人物像の右に銘文がある。4世紀末(386~396)の東

晋墓。

鎮江降安2 (394) 年墓 [鎮江市博物館 1973, 姚遷・古兵 1981] 塋面に「獸首噬蛇」(巴国黑人)」、四神(青龍, 白虎, 朱雀, 玄武), 獸首鳥身怪獸(萬歳像), 人首鳥身怪獸(千秋像), 獸首人身怪獸(方相氏), 両手に弓と環頭大刀をもつ獸首人身怪獸(方相氏), 虎頭載人首蛇怪獸(鬼神像, 窮奇)の10種の図像が表現されている。

(2) 三燕墓

西官管子1号墓(馮素弗墓) [黎瑤渤 1973] 遼寧省北票県。平面は長台形を呈する石槨墓である。壁画は、槨蓋と四壁に描く。槨頂部に日・月・星・銀河からなる星象図に、鳥文が配される。壁面に黒狗図が遺存し、剝落した漆喰片に人物の頭部の描かれたものがある。

西官管子2号墓 [黎瑤渤 1973] 平面長台形の石槨墓で、壁画は槨の天井部と四壁に描かれている。剝落し、20%ほどが遺存するという。天井部に星象図、四壁に人物・出行・家居・建築図などが描かれる。北壁では、女侍などが遺存することから、墓主図像は描かれていたとみられる。四神図像は未確認である。

朝陽北塔礎石彫刻 [董高 1991, 郎成剛 1996] 朝陽市。三燕の思燕仏図基址と推定される遺跡の礎石に龍・双虎, 双鳳, 双雀, 唐草文などが彫刻されている。三燕時代の図像資料である。

また朝陽の三燕時代の墳墓出土の鞍金具・杏葉・帯金具などにも龍文など各種の文様がみられる。

(3) 北魏墓

洛陽北魏上厝石棺 [洛陽博物館 1980] 河南省洛陽市郊区瀋河公社上厝大隊村の煉瓦工場で見つされた。墓室は不明で、洞穴土壙墓で、墓道は南面し、深さ約6.4mという。石棺は東西方向につくられている。西約5 kmに景陵の葬地・兆域が存在する。家形の石棺の蓋石上面以外の外壁面のすべてに彫刻されている。前壁外面の門扉は朱彩色され、舗首がつく。その両側に門吏(侍臣像)が陽刻される。門の上方の中央に「莫尼宝珠」、その左右に朱雀と「団花」がある。後壁は3幅画からなり、中央の樹木山林のなかに、老人を担架(平橋)で運ぶ2人の青年が描かれる。「孝孫原穀図」である [王樹村 1988]。その右側には樹木山林・柳・2人の人物像がみえる。両側面には昇仙図が彫刻されている。左右の壁面に方士, 龍に乗る墓主夫婦像, 龍に乗る鼓吹楽技像, 鳳凰の乗る天蓋を持つ侍女, 畏獣, 鳳凰にのる鳥獸文, 山岳文などが表現されている。畏獣は龍の後ろに配置される。棺底の前壁外面に畏獣を中心に青龍と白虎と向き合う図, 後壁外面に蓮華文を中央にして青龍・白虎が向き合う図がみられる。棺底の左右壁面に各12, あわせて24体の禽獸文を彫刻する。馮邕妻元氏墓誌にみえる攫天・発走などの怪獸に比定されているが, 10体の畏獣(鬼神)像と青龍・白虎各2体, 他は鳳凰類10体に大別される。なお玄武は表現されていない。

洛陽海資村北魏石棺(河南省開封市博物館蔵) 1928年に洛陽邙山の麓で出土したという。石棺は全長231cm, 前部の高さ84cm, 後部高66cmである。左壁外面に青龍に乗る人物, 右壁に白虎に乗る人物, 前壁に朱雀, 後壁に玄武が線刻される。人物像は, 道冠をかぶり, 方士が「亡魂(即棺中主人)」を導く昇仙の状況を表現する [王樹村 1988]。

洛陽石棺(河南省博物館蔵) 洛陽出土。石棺の両側面に青龍・白虎と「守護神」・星宿図を線刻

する [王樹村 1988]。

元讜石棺 (不明) [黄明蘭 1987] 洛陽出土。拓本のみが遺存。孝子故事、畏獸・怪獸・龍・虎・鳳凰など図像が表現されている。

洛陽金村石棺 [黄明蘭1987] 石棺の蓋に亀・怪獸 (守護神)・飛仙, 前・後額に獸面 (方相氏), 側面に太陽・月・銀河・人首蛇身の伏羲女媧・星座などが線刻されている。

洛陽出土墓誌 (陝西省博物館蔵) [王樹村 1988] 墓誌の縁辺に「墳墓を守護する方相神」が線画されている。

王温墓 [洛陽市文物工作隊 1995] 河南省孟津県北陳村。単室土洞墓。東壁に建物 (帷帳) に座る墓主夫婦を中心に, 侍女・童子・園林 (山岳・樹木) が描かれている。他の3壁は壁画の痕跡のみとどめる。墓主図像が後壁でなく, 東壁に表現されている。四神図については不明である。太昌元年 (532) に埋葬された使持節撫軍將軍瀛州刺史王温の墓である。

侯剛墓 (陝西省博物館西安碑林) 北魏孝昌2年 (526) 墓誌に, 畏獸・蓮華文・唐草文などが裝飾されている。

元父墓 [洛陽博物館 1974] 北魏孝昌2年 (526) 没の江陽元父墓で, 塼築墳。墓室四壁に漆喰を塗り, 壁画が描かれる。四神図がわずかに痕跡をとどめるという。穹隆状天井部には天象図が遺存する。また甬道の壁面・天井にも壁画があるという。墓誌蓋には, 蓮華文を中心に龍文が配され, 唐草文で充填されている。蓮華文と龍文が組みあわさる。

司馬金龍墓 [山西省大同市博物館 1972] 山西省大同市石家娟。棺床と石柱台座に文様がある。棺床には力士・龍・虎・鳳凰・金翅鳥・人頭鳥身・技楽人・舞踏人が彫刻される。力士像は石床を支える姿態である。台座側面の輪つなぎ唐草文のなかに力士像が彫刻される。「技楽童子」と解釈されているが, 力士であろう。太和8年 (484) に薨じている。

固原北魏墓 [固原県文物工作站 1984] 寧夏回族自治区固原県。斜坡墓道の単室墓である。木棺 (108×105cm) 蓋外面に漆画が描かれている。忍冬唐草文で縁取られ, 中央に天の川を象徴する螺旋形水波文・渦文のS字形文があり, その間に白鶴・鴨・魚などが描かれる。S字文をはさんで対照的に家屋図, 日象・月象図が配される。一方の人物像の屋外に「東王父」の文字がみえる。網目状の唐草文 (纏枝卷草図) とそのなかに奇鳥異獸・人首鳥身図像が描かれる。この図像は, 集安の五蓋墳4・5号墳のモチーフと関連する。このほか孝子故事が表現されている。伴出したベルシャ銀貨はササン朝ペーローズ (459~484) 期の銀貨である。

(4) 西魏墓

侯義墓 [咸陽市文管会 1987] 陝西省咸陽市。横穴墓 (単室土洞墓) で, 羨道・玄室・甬道からなる。墓室の四壁と天井部は石灰が塗られ, 壁画が描かれる。剝落がいちじるしく, 天井頂部に星象図の一部がこのころのみである。鎮墓獸2 鎮墓武士俑などの陶俑が出土している。侯義は西魏大統10 (544) 年に没している。

(5) 東魏墓

堯氏趙郡墓 [磁県文化館 1977] 河北省磁県。塼築墳で, 玄室・羨道・墓道 (斜坡) からなる。

玄室の四壁に描かれていたが、東壁にわずかに痕跡をとどめる。墓誌の蓋には、各種の文様が彫刻されている。銘文の四面に四神をめぐらす。玄武の両側に鳳凰文、朱雀の両側に人頭鳥身の像、四隅に忍冬唐草文を配する。人頭鳥身像は、「千歳之鳥」「萬歳之禽」(『抱朴子』)であり、「辟邪、千秋萬歳の意味を持ったもの」[林巳奈夫 1989]である。四神と一体となって表現されている。堯趙氏は、武定3(545)年に卒し、武定5(547)年に埋葬された。

茹茹公主墓 [磁県文化館 1984, 湯池 1984] 河北省磁県。塋築墳で、墓道・羨道・玄室からなる。墓道は斜坡墓道で、路面の両側は連続草花文で装飾されている。墓道の南端、入口部分の東西両壁に青龍・白虎が描かれる。龍虎のまわりは蓮華文・流雲文で飾られる。儀衛の行列図、廊屋状の兵欄(戟架)が羨門側に描かれる。南壁には鬼神像1体と羽人1人、鳳凰が表現される。鬼神は甬道門牆上に2体あり、「方相氏」と想定されている[湯池 1984]。羽人は右手に蓮花と蓮蓬を持ち、右肩の上ののせ、左手を曲げ、尖った履をはく。門牆に、大鳥(朱雀)を中心に左右に鬼神像(方相氏)、上下に蓮華文・唐草文で飾る。墓室四壁の画像は2段構成となっており、上段に四神図、下段に人物群像が描かれる。北壁に墓主の公主像と天蓋・羽葆・团扇・杯などを持つ侍従からなる。墓主の茹茹公主と特定しうる図像が表現されている。

封思温墓 [張平一 1956] 河北省吳橋県小馬廠村。円形単室の塋室墓。壁面に石灰を塗布しているが、壁画は剝落のため不明。封思温は、東魏の武定2年(544)に没し、武定4年に埋葬された。

高長命墓 [何直剛 1979] 河北省景県の西南約15kmの野林庄と北屯公社一帯に、北魏の高氏墓群が形成されている。天平4(537)年の高雅夫婦子女合葬墓や、隋開皇3(582)年の高潭夫婦墓の3基が発掘されている。長命墓は前室・甬道・後室・羨道からなる二室墓である。墓門の門楼に石灰が塗られ、紅色の欄額・柱とともに、甲冑で装備し、武器を持つ門卒1人、さらにその上部に人身獸首・鳥足像2体が描かれる。西側のものは、腰帯をしぼり、両足を前後に広げてふんばり、両手を左右に伸ばし、頭を上向きかげんにする。右手に藤状のものを持つ。東側のものは、胴部と足の部分がのこるだけである。『山海経』にみえる「神荼」「郁儻」と解釈されている[何直剛 1979]。高長命は武定5(548)年に埋葬された。

(6) 北齊墓

高潤墓 [磁県文化館 1979, 湯池 1979] 磁県の西約4kmの東槐樹公社に所在する。塋築墳(単室墓)。玄室・羨道・墓道からなり、南北全長約63mである。玄室・羨道・墓道からなる。玄室の四壁に石灰が塗られ、紅・藍・黄・黒などで彩色される。北壁の保存状態は良好である。東端と西端のそれぞれに、華蓋・羽旌などを持つ侍従6人、中央に帷帳のなかに座る墓主図像が描かれる。北壁の上部に流雲文がのこる。東壁の上部に羽旌2、華蓋1、車1・侍者1の図像が遺存する。西壁北端の上部に侍従2人がみえるが、他は不明である。南壁壁画も不明。羨道の両壁・天井部に石灰と彩絵の痕跡がある。墓道両壁にも石灰が塗布され、彩絵の痕跡をわずかにとどめる。1964年に墓室の頂部が削平されたさい、天象図(金烏)の一部が発見されたという。高潤は皇帝高歡の第十四子にあたり、武平6(575)に卒し、翌年の武平7(576)年に埋葬されている。

堯峻墓 [朱全昇 1984] 磁県城の南、東魏村の西北に「四美塚」とよばれる堯氏の葬地がある。南塚は堯趙氏墓(堯峻の母)、北塚は堯峻夫婦墓(一夫二妻)であり、東塚と西塚は長子堯雄と次

子堯奮墓と推定されている。堯峻は天統2（566）年に卒し、翌年の天統3（567）年に埋葬された。堯峻の妻吐谷渾は天統元（565）年に卒し、天統3（567）年に堯峻と合葬されている。また独孤氏は武平2（571）年に卒し、追葬された。堯峻墓は塼築墳で、玄室・羨道・墓道（斜坡）からなる。壁画は、門牆の部分に描かれる。石灰を塗布し、紅・黄・緑・黒で彩色される。鳳凰（朱雀）を中心として、「羽人」が対照的に描かれる。周囲は雲文と蓮華文で飾られる。羽人は、東魏の茹茹公主墓などでは鬼神（方相氏）像にあたる。

庫狄迴洛墓 [王克林 1979] 山西省寿陽県賈家庄。塼築墳で、斜坡墓道・羨道・玄室からなる。壁画は、墓室西壁の灰白色の十字文様、四壁に赭紅色の泥土を塗る以外、門楣両面・両扇板門・甬道両壁の六幅に描かれる。門楣の正面に朱雀、門楣の背面には泥土上に忍冬文をほどこす。扇板門上の右側に白虎、左側に青龍を描く。羨道両壁には人物群像が配置されている。東壁の左第一人は、上半身が裸体で、短袴を身につけた舞踏雑技人物像である。その他の人物像は侍従で、各種の持ち物をもつ。壁画構成をみると、玄武像が不明であるが、門楣部分に青龍・白虎・朱雀を表現し、羨道に儀仗図を配する。白虎図像は、山東省濟南道賈墓に類似する [韓明祥・趙鎮平・倉小義 1985]。北齊末期の同時代の壁画であり、その壁画内容は隋代の壁画に継承される。庫狄迴洛は、大寧2年（562）に薨じ、同年の河清元年に斛律夫人与妾尉氏とともに合葬された。

襄叡墓 [山西省・太原市 1983] 山西省太原市。墓室・羨道・墓道からなる。壁画は、墓室・墓道の壁面全面にえがかれている。71幅分が遺存する。画題は、報告によると、生前宦途生涯（鞍馬遊騎・軍樂儀仗・門衛儀仗・出行儀仗）、祥瑞・天象図（獬廌・青龍・白虎・朱雀・玄武・十二辰・天象）からなる。墓門に、鍵をはさんで青龍・白虎の対照図、楣の上部に鬼神を中心として朱雀（鳳凰）が対置する図像である。墓室中欄の東壁面に青龍と雷公図、他の壁面に白虎・玄武の痕跡がのこる。天象図は日象（三足鳥）・月象（蟾蜍）・星宿からなり、元父墓のものに類似するという。行列図に2人の胡人が表現されている。墓道西壁の駱駝を引く人物像と、墓室の牛車に従って膳を持ってあるく人物像である。昇仙の途につく墓主像と関連し、たんなる従者の像ではないとおもわれる。辟邪とかかわるのであろうか。

崔芬墓 [湯池 1989] 山東省臨朐県。穹窿天井（覆斗形墓頂）式の「弧方形」の墓室で、後壁・右壁下辺に龕がある。崔芬は、清河東武城の人で、北魏望族崔氏の出身である。東魏末に南討大行台都軍長史に任ぜられ、天保元年に卒し、2年（551）に臨朐海浮山に埋葬されたという。壁面に石灰が塗られ、彩画される。第1道の石門扉に各1名の甲冑・盾で武装した門吏が描かれる。墓室は3段に区分され、上段の天井部に星象が描かれる。中段は、左壁に仙人乗龍、龍は首を南に向け、その前に日象があり、羽人を導き、その後の方相氏を描く。右壁に虎を御する仙人、虎の前方に月象、後方に宝相氏。北壁中段中央に亀蛇がからまる玄武、亀の上に剣をもつ神人、その両側に方相氏と山巒樹木を表現する。南壁の門洞の西側に朱雀を描く。西壁の龕額上に墓主夫婦の出行あるいは昇天の場面を描き、婢僕を従える。下段は8幅の屏風で構成される。後壁の両側、左右壁に人物樹石屏風が描かれ、なかに「主人公」が方形のしとねに座るもの、筆を握り書をしたためるもの、杯を持ち酒を飲むもの、「斜倚蒲団」の姿が描かれる。

顔玉光墓 [安陽県文教局 1973] 河南省安陽県。高洋（文宣帝）妃墓である。洞室墓で、斜坡墓道・甬道・墓室からなる。墓門南壁に一男侍、右側の一女侍が描かれる。墓室北壁に騎馬武人像と

鷹，西壁に嬰兒を抱く婦女像と騎馬武人像が遺存する。塋墓誌と常平五銖錢2枚などが出土している。武平7年(576)に鄴城で薨じている。

道實墓 [済南市博物館 1985] 山東省済南旧城の東南約1.5kmに位置する。磚築墳。扁平な青頁岩を積築した単室墓で、玄室は梯形である。羨道南口の門牆に、三趾の爪の怪獸(虎)が描かれる。墓主の靈魂の昇天を衛護するものという。玄室の四壁には、人物の群像が描かれる。北壁に、九格の屏風を背にして墓主坐像、その両側に奏事人がみえる。東壁には、儀仗衛2人、手に鞭を持ち、鞍馬をひく御者1人、折り畳んだ天蓋と鞭をもつ従者がいる。その人物は深目で、高い鼻の西域人の風貌である。西壁には車輿1両、墓主夫人らしい婦人像と2人の侍女が描かれる。南壁の両袖部に各々門衛1人が配されている。天井部は、北壁に北斗七星と流雲文、西南に北斗六星、東壁に月象図があり、蟾蜍・桂樹・玉兔搗葯図、西壁に日象と金烏が描かれるが、日月の位置関係が反対に表現されている。墓誌には、武平2(571)年に「葬歴城之南三里」とみえるが、墓地の発見位置はまさに歴城旧址から東南3里ばかりである。

范粹墓 [河南省博物館 1972] 河南省安陽県洪河屯村。墓室の北壁と東壁に石灰と黒色の線の痕跡があり、壁画が存在する。北齊の武平6年(575)に薨じている。

講武城1号墓 [敖承隆 1959] 河北省磁県。講武城の北城壁外で、漢墓49基、北朝墓2基、唐墓2基、宋墓3基が発掘された。講武城1号墓は、玄室・羨道・墓道(斜坡式)からなる。墓門は磚積みで、人字形につくる。墓壁に石灰が塗られ、紅色の痕跡があることから、壁画が存在したことが推定されている。墓誌に「齊故司馬氏太夫人比丘尼垣墓誌之銘」とあり、埋葬年代は北齊の太寧2(562)年である。

講武城56号墓 [敖承隆 1959] 河北省磁県。斜坡墓道の磚築墳。玄室の壁面に石灰を塗布し、人物・車両・橋梁・樹木・蓮華文などが、紅・黄・黒・粉紅色で描かれる。各幅は紅色で廊線が描かれ、壁の隅に斗拱が表現されている。墓誌などはないが、北齊時代に推定される。

東八窪壁画墓 [山東省文考 1989] 山東省済南市。北壁に3足8扇(格狭間装飾)の屏風に区画され、4扇に人物像が描かれる。これらの人物像は、南朝壁画にみられる竹林七賢と榮啓図の影響を受けている [邱玉鼎・佟佩華 1989]。

灣漳墓 [考古研究所 1990] 河北省磁県。斜坡墓道の単室墓。墓道の東西壁に53人の儀仗出行図。東壁の儀仗隊の前に朱雀、神獸、青龍(長さ4.5m)など、西壁に白虎(長さ4.5m)を描く。儀仗隊列の上方、天空の位置に各種の神獸など35体、流雲文・蓮華文で飾る。甬道上の門牆正面に大朱雀(高さ5m)、その左右に神獸・羽兔・蓮華文、墓室天井に星宿図・蓮華文・流雲文を描く。四壁は3分割される。上段は9区画され、各区に動物図像、中段に神獸・朱雀、下段に人物図像が表現されている。北齊の高洋(武寧陵、560年)に推定されている [馬忠理 1988・1994, 蘇哲 1992]。そのいっぽう灣漳墓は、高洋墓の可能性も高いが、高演の文靜陵、高湛の永平陵に推定しえらう [江達煌 1995]。

太原南郊北齊墓 [山西省考古研究所 1990] 山西省太原市南郊区金勝村第1熱電廠。墓室・羨道(甬道)・墓道の単室磚室墓。墓室壁画は天井頂部と天井壁面、四側壁からなる。北壁は屏風画で、墓主(女)坐像、東壁の北側に大きく描かれた3人の男侍の立像がみえる。その南側には牛車(御夫)と天蓋と翳を持つ男侍と騎馬人物で構成される図像がある。墓主の乗物であろう。天井部には、

東壁に青龍に乗る金冠をかぶった黄衣の仙人，その南前方に向かう獣足の黄衣の羽人が青龍を引導する。青色の鹿形動物などの3怪獣，雲文と蓮華文・宝相華文で飾られる。西壁には，白虎に乗る黄衣仙人，角のある鹿形動物，蓮華文・宝相華文が表現される。北壁の人物坐像は墓主で，「神龕を供養する意味での家居生活」で，その年代は北齊後期と推定されている。

(7) 北周墓

李賢墓 [寧夏回族博 1985] 寧夏回族自治区。斜坡墓道の単室墓。墓道・過洞・天井・羨道・玄室からなるが，壁面全体に描かれている。第1過洞と羨道（羨門）外側上方に2層門楼，第2・3過洞に1層の門楼，過洞・天井東西壁，墓道，天井などに武士像がある。墓室四壁に侍従技楽図が配されている。

田弘墓 [谷一尚 1997] 寧夏回族自治区固原県。全長56mの斜坡墓道単室墓。東耳室がつく。出土した墓誌から，建徳4（575）年没の田弘とその妻の合葬墓である。

底張湾墓 [常書鴻 1954] 陝西省咸陽。北周建徳元年墓。女子人物像の写真1枚が報告されている。同地では，唐景雲元年の壁画墓で男女の人物像が描かれている。

咸陽石棺墓（陝西省博物館蔵）[王子雲 1957] 左右外壁に青龍・白虎図が彫刻されている。

①……………三燕・北朝墓の構造と壁画

(1) 遼西地域の墳墓の構造と変遷

近年，遼寧省遼河以西の，遼西地域で三燕（前燕・後燕・北燕）・北魏・隋唐の墳墓が発掘されている。

- 西晋・東晋 北票県房身村墓，北票県下喇嘛洞墓，朝陽県十二台郷2・2・4号墓，朝陽県単家点郷1・3・4号，朝陽田草溝墓，朝陽王字墳山墓，朝陽県溝門子壁画墓，朝陽袁台子墓
- 前燕 北票県喇嘛洞村墓，朝陽市菠榛溝村奉車都尉墓，朝陽姚金溝1号墓，北票市倉粮窖墓朝陽県十二台郷磚廠88M1，朝陽三合成墓
- 後燕 朝陽県崔遙墓
- 北燕 北票県西官管子馮素弗墓（415年），北票県章吉管子公社西溝村墓，朝陽県十二台郷袁台子墓，朝陽市八宝村1号墓，朝陽市太平房村壁画墓，朝陽市北廟村1号壁画墓・2号墓
- 北魏 朝陽市西上台1・2号墓，張略墓（468年），朝陽凌河機械廠北魏墓，錦州義県劉龍溝郷M1・M2
- 隋 朝陽市新荒地村1号墓
- 唐 朝陽市朝陽鎮・韓貞墓，朝陽大街1～5号墓，朝陽紡績廠1号墓，朝陽南馬場1号墓，飼養廠1号墓，朝陽双塔区墓

墓室構造の分類 魏晋南北朝時代の墓葬とくに，墓室構造については，宿白 [1974]・張小舟 [1987]・蘇哲 [1992]・東 [1993] などの研究がある。

宿白 [1974] は，中原地域の墓葬の時期分類と類型化をおこない，4期に区分する。第1期は

紀元3世紀頃、第2期は3世紀末から4世紀初、第3期は4世紀から5世紀末、第4期は5世紀末から6世紀中葉である。各期を、墓室構造とその規模、副葬品の種類（罐・樽・多子盆・竈・男俑・女俑・武士俑・鎮墓獸）とその数量から、つぎの4型に分類する。副葬品は、第1組（壺・罐・碗・甕）、第2組（案・耳杯などの生活用品）、第3組（厨房明器）、第4組（陶俑）にわけられる。第I・II・III型の大部分は塋室墳で、墓室の規模に差がみられる。

I型墓は7m以上で、皇室貴族の墓葬。

II型墓は4～5m以上で、墓主の官爵に幅があり、一般王侯から二千石前後の刺史の墓葬。

III型墓は4～5m以下で、墓主に中郎・県令があり、千石以下の墓葬。IV型は官品記録の副葬品はないが、おおよそ一般地主と民衆の墓葬である。

IV型墓は土洞墓ないしは竪穴墓であり、わずかに塋室・塋敷・塋棺がみられる。

張小舟〔1987〕は、魏晉十六国時代の墓葬を、中原・西北・東北地区にわけて型式分類する。東北地区の類型とその特徴をつぎにかかげる。

I型 石板磚築多室墓。

II型 石板あるいは磚築多室墓。

1式 前後に廊のある石室墓（三道壕M）。

2式 後廊がなく、前廊・前室・左右耳室・槨室〈袁台子墓〉。

3式 凸字形ないしは日字形の石室墓・磚室墓〈伯官屯M1〉。

III型 長方形単室石槨墓（槨室4m以上）〈馮素弗墓〉。

IV型 長方形単室石槨墓（槨室4m以下）〈崔適墓〉。

V型 小型長方形石槨墓ないしは磚室墓〈三道壕M7〉。

蘇哲〔1992B〕は、東魏・北齊壁画墓の墓葬等級制度を問題とし、墓室を、方形単室墓・方形前後室墓・円形単室墓・半円形単室墓に分類する。

第一等級 帝陵（北齊文宣帝高洋武寧陵）。

第二等級 親王、公主墓（高潤墓・茹茹公主墓・婁叡墓）。

第三等級 正一品官僚墓（庫狄迴洛墓）。

第四等級 従一品～三品の官僚墓（趙胡仁墓・堯峻墓）。

第五等級 中・低級官僚、富豪墓（崔芬墓・道貴墓・東八里窪墓）。

第六等級 被葬者の身分が複雑な古墳（顔玉光墓・范粹墓・金勝村墓）。

さらに東魏北齊壁画墓は、鄴地区（河北省磁県、河南省安陽）、晋陽を中心とした併州地区（山西省太原市、寿陽県付近）、青齊二州地区（山東省中部の済南市、臨朐県周辺）、幽瀛定冀四州地区（河北省中・北部）の4地区で、地域的發展をとげるといふ。

北朝（非壁画）墓の構造 墓制の変遷過程を問題とするにあたって、非壁画墓の構造をみる。

河南省洛陽景陵〔中国社会科学院 1994〕 1990年に発掘された北魏宣武帝の墓である。径105～110m、高さ約24mの円形の墳丘に、斜坡墓道（全長40.6m）のつく単室墓（全長17.5m）である。墓の北10mで、石刻武人像1体が出土している。原位置とすれば、石像物がめぐらされていたのであろうか。玄室に石棺床（3.9×2.2×0.2m）は遺存する。石棺床には線刻はないが、消失した

石棺身・蓋に装飾が施されたにちがいない。壁画はない。この景陵の墓室構造は、大同の永固陵を継承している。したがって前代の孝文帝の長陵の墓室構造の推定が可能である。

陝西省長安韋曲鎮1号墓 [陝西考研 1990] 後室・前室・羨道・墓道からなる。墓道入口部は3層に階段掘り（「三層台」）される。墓道に四阿式家屋模型、南壁には多層の樓閣式建築模型がつくられている。2号墓の構造は1号墳と同一である。墓道入口は7層の階段掘りで、斜坡構造となり、羨道頂部の家屋模型は略されている。前室には耳室がつく。墓誌磚が出土し、「偉威妻苟夫人之」と篆書されている。

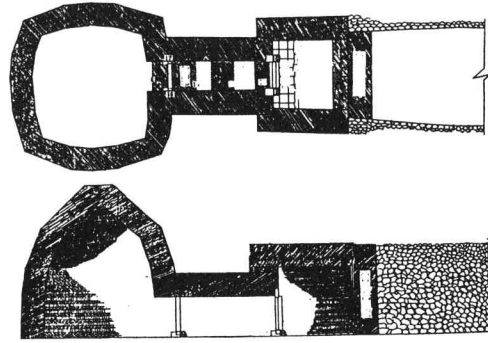
河北省冀皇県李希宗墓 [石家庄発掘組 1977] 南刑郭村で発掘された李希宗とその妻崔氏の合葬墓である。5基の封土(高さ5~12m)が遺存し、M2~M5が東西に並び、M2の北約15mにM1が位置する。そのM1は父の李憲、M2が李希宗、M3・M4が弟の李仁と李騫、M5が末弟の希礼と推定されている。族葬の配列規律によるという。李希宗墓は塋室墳で、斜坡墓道・羨道・前室・甬道・後室からなる。前・後室は穹窿式天井構造である。後室に李希宗夫婦の木棺が遺存する。李希宗は東魏の興和2年(540)に薨じている。後室の盗掘坑から石人像頭部が発見されたが、墓上や墓前に立っていたものと推定する。

北京西城区王府倉 [馬希桂 1977] 王府倉三八中の建設中に発見された。塋室墓で、東西長3m、北幅2.7mの半円形の墓室に羨道がつく。常平五銖1枚などが出土。常平五銖は天保4年(553)年に鑄造され、墓の上限年代がしられる。

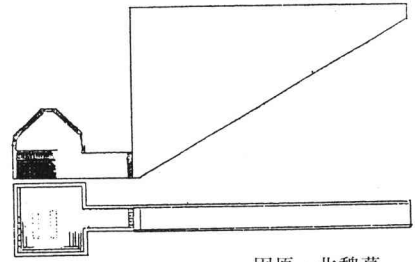
表3 墓室の形態

墓室構造		平天井	穹窿天井(折天井)		穹窿式天井(穹窿形)	
			水平墓道	斜坡墓道	水平墓道	斜坡墓道
石 槨 墓	長台(梯)形単室墓	西官管子2号墓, 八宝村墓, 北廟村墓, 太平房墓, 南大溝墓				
	弧方形単室墓			北齊東八里窪		
	耳室単室墓	415馮素弗墓, 山屯村M1・M2				
塋 室 墓	方形単室墓			西上台M1・M2, 固原北魏墓, 李賢墓, 西安任家口, 528元邵墓, 571道貴墓	468張略墓	544侯義墓, 547趙胡仁墓, 566堯峻墓, 北齊金勝村墓
	弧方形単室墓					550茹茹公主墓, 560高洋墓, 562庫狄迴洛墓, 576高潤墓
	有耳室方形単室墓					537高雅夫婦墓
	円形単室墓					547趙胡仁墓, 525崔鴻墓
	弧方形双室墓			484永固陵	548高長命墓	515景陵, 540李希宗
	方形双室墓					
	方形多室墓				474司馬金龍墓	高雅墓?
土 洞 墓	方形単室墓					576顔玉光墓, 576茫粹墓
	弧方形単室墓					

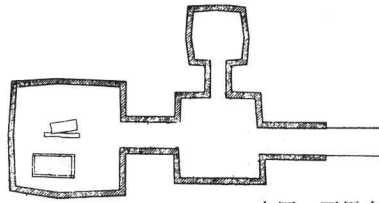
北魏



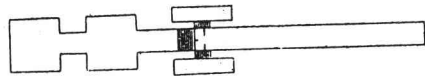
大同・永固陵 (484)



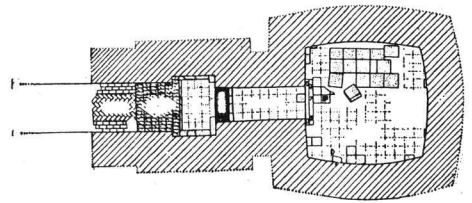
固原・北魏墓



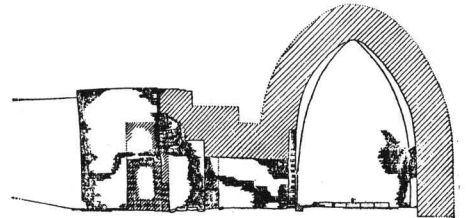
大同・司馬金龍墓 (474)



西安・草廠坡



洛陽・景陵 (515)

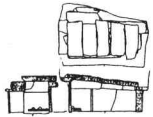


北燕

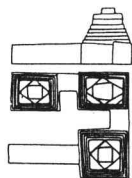
朝陽・北廟村1号墳



朝陽・西上台1号墳

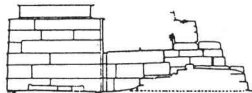


北票・馮素弗墓

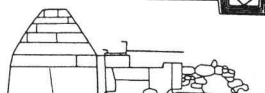


集安・三室塚

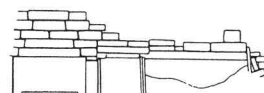
高句麗



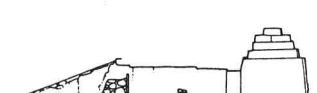
集安・將軍塚



平壤・伝東明王陵



平城・漢王墓



平壤・土浦里大塚

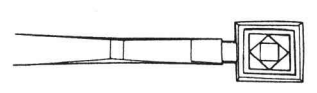
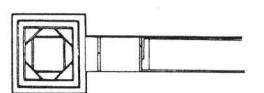
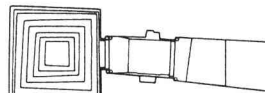
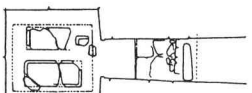
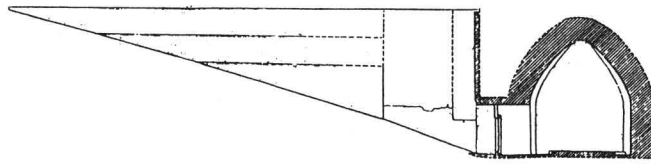
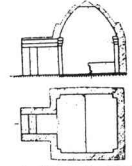


図7 北朝・高句麗墓の変遷

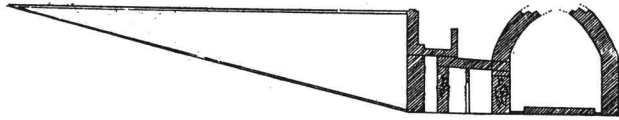
北齊



太原·婁叡墓 (562)



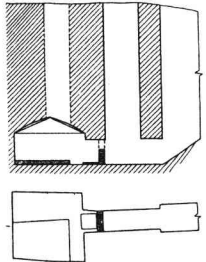
太原·金勝村北齊墓



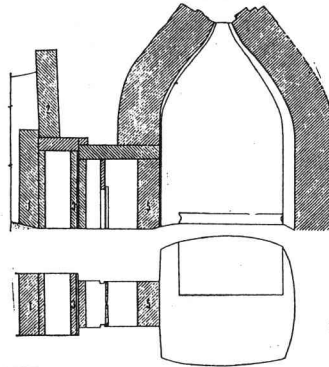
磁県·茹茹公主墓 (550)



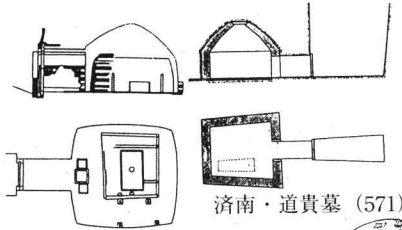
磁県·高潤墓 (576)



磁県·元邵墓 (528)

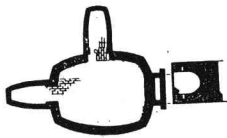


磁県·武陵墓 (560)

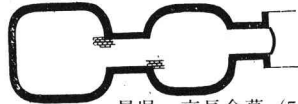


壽陽·庫狄迴洛墓 (562)

濟南·道貴墓 (571)



景県·高雅墓 (537)



景県·高長命墓 (548)

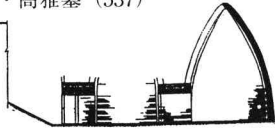


磁県·堯峻墓 (566)



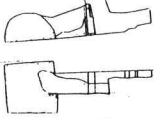
濟南·東八里窪墓

東魏



磁県·趙胡仁墓

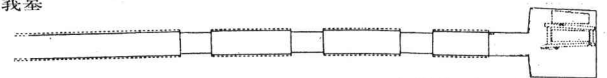
西魏



咸陽·侯義墓

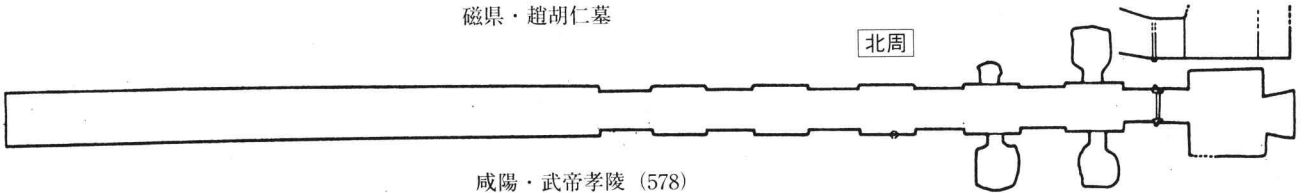


安陽·范粹墓 (575)



固原·李賢墓 (569)

北周



咸陽·武帝孝陵 (578)



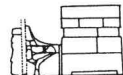
平壤·湖南里四神塚



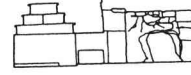
平壤·内里2号墳



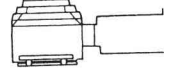
集安·通溝四神塚



集安·五盔墳5号墳



五盔墳4号墳



平壤·江西大墓

(2) 北朝墳墓の構造と変遷

三燕・北朝墓は、その構造上、表3のように分類しえる。墓室の年代については、基本的に各墓室で出土した墓誌などの年号にもとづく。

I 石槨墓 A. 長台(梯)形単室墓, B. 弧方形単室墓, C. 耳室単室墓

II 塼槨墓 A. 方形単室墓, B. 弧方形単室墓, C. 有耳室方形単室墓, D. 円形単室墓, E. 弧方形双室墓 [弧方形後室・甬道・前室・羨道], F. 方形双室墓 [方形後室・甬道・前室・羨道], G. 方形多室墓

III 土洞墓 A. 方形単室墓, B. 弧方形単室墓

天井構造は、a. 平天井, b. 穹窿天井(折天井), c. 穹窿式天井(穹窿形)にわけられる。つぎに北朝墓制の変遷上の特色をあげてみよう。

- 北魏の時代に単室墓が発達する。その出現時期は、468年埋葬の張略墓のように、5世紀中葉ごろといえる。西安任家口墓も北魏の塼築単室墓である。
- 景陵(515年)の墓室は、永固陵(484年)を発展させたもので、構造上の系統関係が明瞭である。孝文帝の長陵も同一の構造と推定される。
- 永固陵と武寧陵(北齊560年)の甬道・羨道構造は類似する。帝陵の系統の可能性はある。羨道部幅が甬道にくらべて拡大する。羨道と墓道幅が同じものがある(茹茹公主墓)。墓道が幅広くなるものもある(婁叡墓)。
- 婁叡墓では、羨門の構造が簡略化する。羨道・羨門の高さが水平となる(段差をもたない。墓室の新しい要素)。高潤墓(北齊576年)や金勝村墓などに継承されている。
- 525年の臨淄崔鴻墓は円形墓室である。遼寧省の師範2号墓などの隋唐墓も円形単室墓である。
- 斜坡墓道に壁画が表現されるのは、茹茹公主墓(550)が初現。しかも青龍・白虎, 方相氏(鬼神像)。
- 北魏元邵墓からトンネル(隧道)式に天井部をつくる工法が始まり、斜坡墓道に発展する。

(3) 北朝壁画の変容

四神図と畏獣の表現空間、玄室壁画の内容に焦点をあわせて、その変遷過程をとらえる。

茹茹公主墓(550年)では、墓道入口の両壁に青龍・白虎, 門牆南壁に朱雀と畏獣(方相氏), 墓道北端の東壁に朱雀, 蓮華と蓬を持つ羽人, 畏獣(方相氏)が配される。西壁の図像は不明であるが、門牆を中央にして、墓道の東西両壁に対照的に描かれていたのであろう。墓室の下段に墓主図像と侍従群像, 上段に玄武・青龍・白虎を配する。墓室にも四神図が表現されており、墓道の龍虎と性格を異にする。

崔芬墓(551年)では、仙人乗龍, 虎を御する仙人, 乗駕玄武神仙像, 朱雀, 方相氏, 墓主夫婦の昇天の場面が描かれる。四壁八幅の屏風で構成される。

太原南郊金勝村北齊墓では、東西壁に乗龍神仙・騎虎神仙像がみえるが、北壁の玄武は不明である。北壁の5区画屏風画(五屏風式)に墓主図像が表現されている。金勝村337号唐墓では、墓室の各壁面が2分割, つまり8区画に分割して、樹下老翁・侍女図などが描かれるようになる。金勝村7号唐墓[王仁波1989]の墓室の天井部に四神・星宿図像が遺存する。

婁叡墓(570年)では、羨門部に青龍・白虎と畏獣、墓室の四壁上段に四神図を描く。

道貴墓(571年)では、墓室の北壁は9区画の屏風画(九屏風式)に墓主坐像が表現される。北斗七星・南斗六星、日象・月象図は表現されているが、四神図はみられない。羨門門壁に怪獣(虎)が描かれる。畏獣が表現されなくなり、怪獣に変質する。同じ山東省済南市所在の東八里窪北齊墓では、八屏風式の壁面に、竹林七賢と榮啓の図像(4人物のみ表現)が描かれている。

四神と乘駕青龍・乘駕白虎神仙像の出現 漢魏いらい墓室に表現されるが、東魏の茹茹公主墓では墓道に表現されるようになり、しかも青龍と白虎が主体となる。四神図像の変質といえる。永泰公主墓(706年)など、唐代にかけて継続する。やがて墓室から四神図像が消えてゆく。北齊末から隋唐にかけての墓室壁画の主題は、昇仙思想から継世思想(現世と来世観)に回帰する。この青龍・白虎は、墓主の昇天(昇仙)を衛護するもの[湯池 1984]で、辟邪の性格をあわせもつ。

図像の構成のうえで、青龍・白虎と蓮華唐草文(散華)の組みあわせは、丹陽胡橋墓(修安陵)など南朝壁画に類似する。墓室に描かれた青龍・白虎、仙人(羽人)像は昇仙思想の表現そのものである。いっぽうそのモチーフは、高句麗の真坡里1号墳壁画の四神・蓮華文の図像とも関連する。

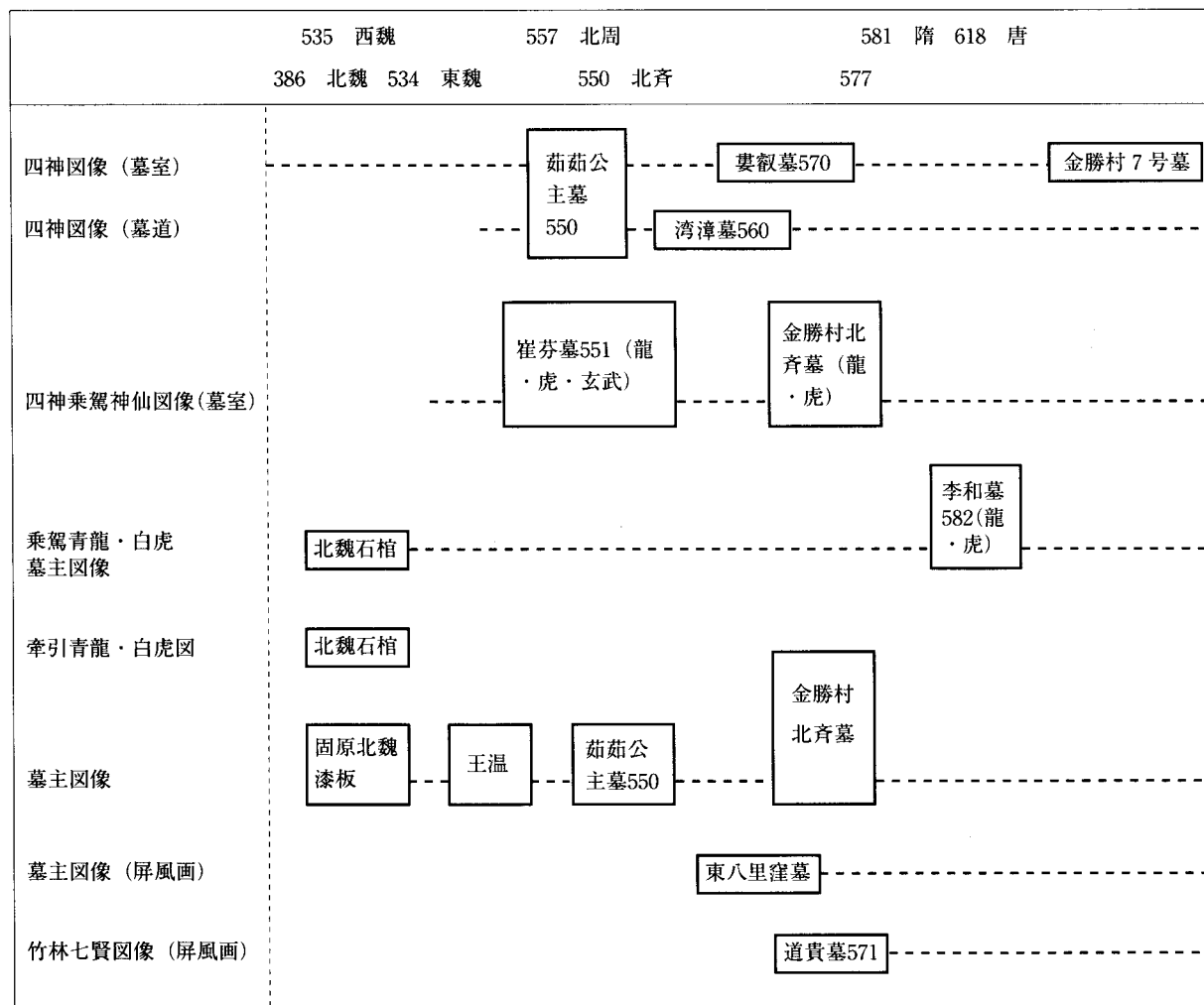


図8 四神・墓主図像・竹林七賢図像

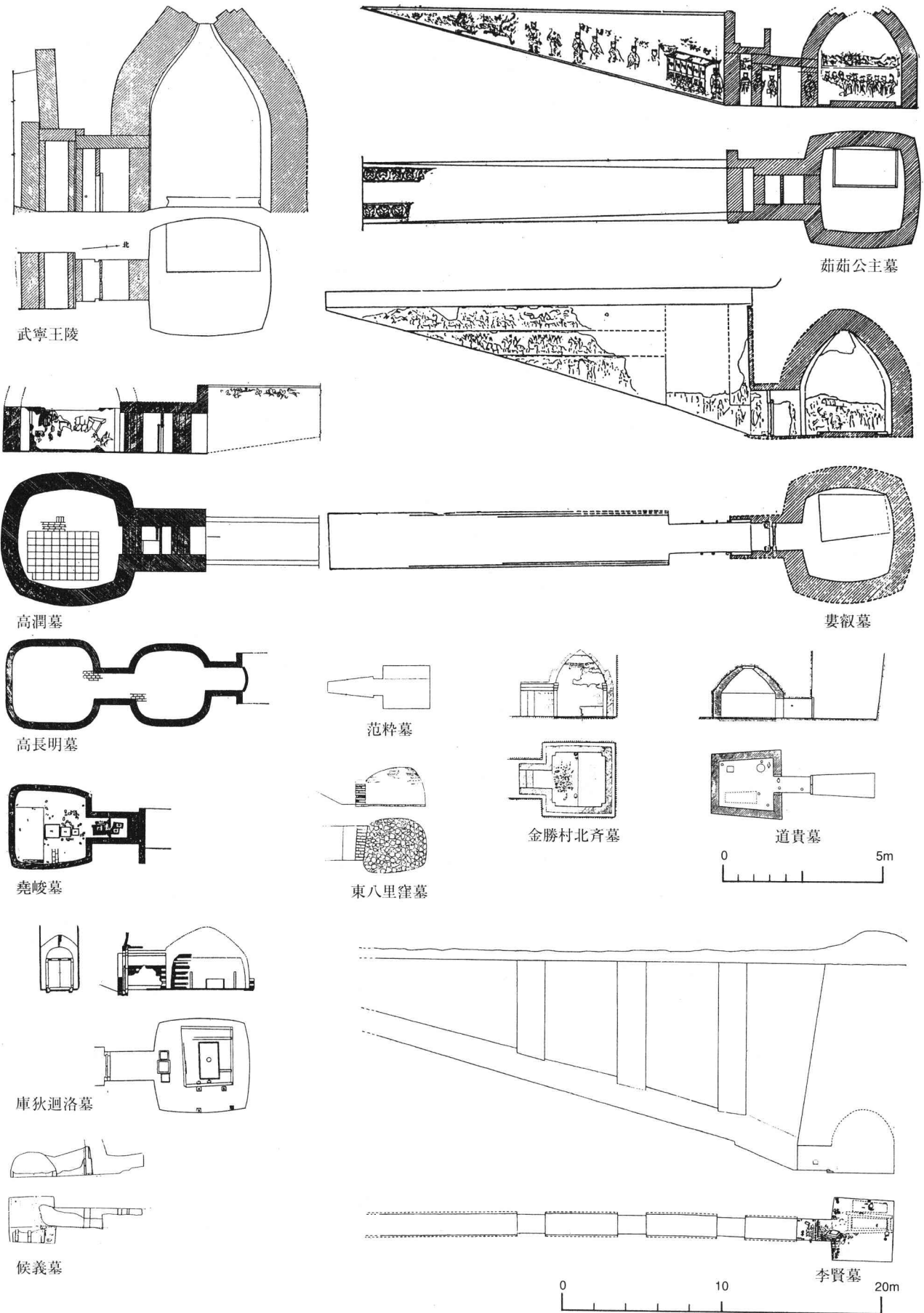
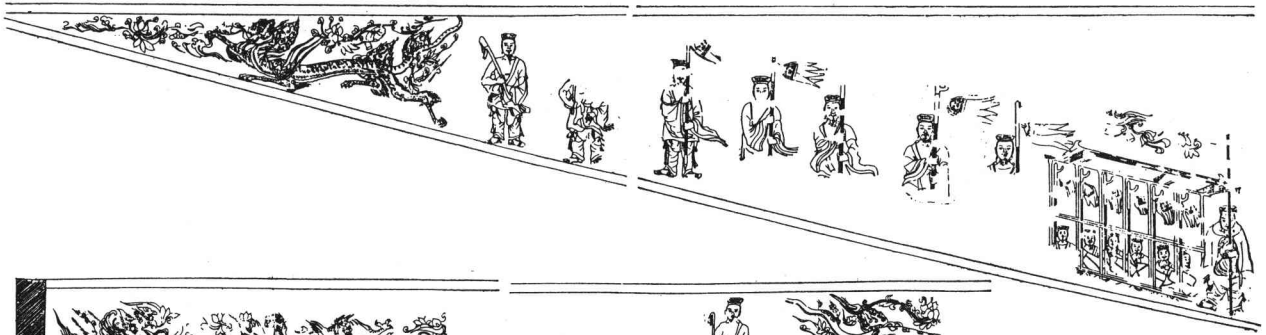
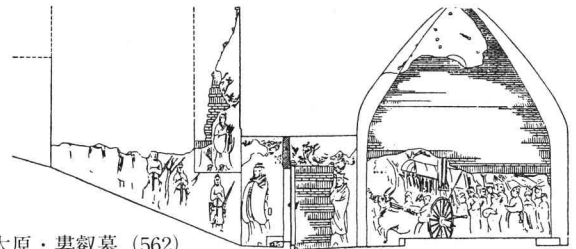
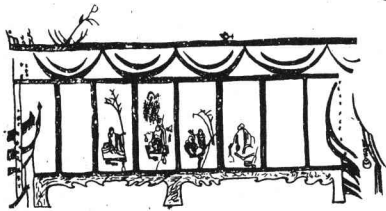
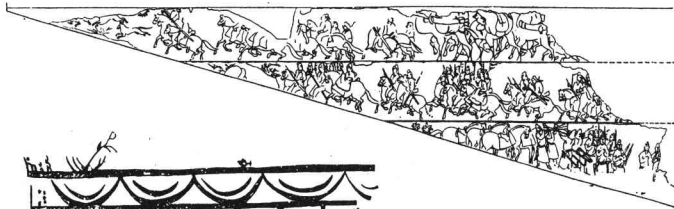
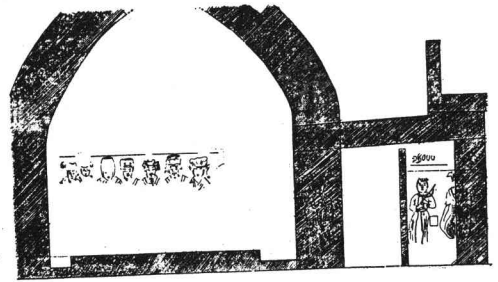
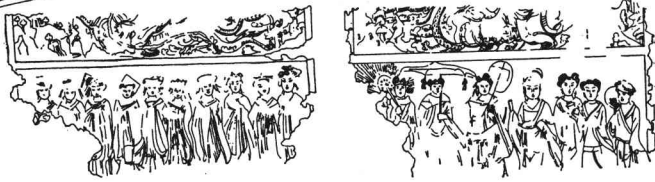
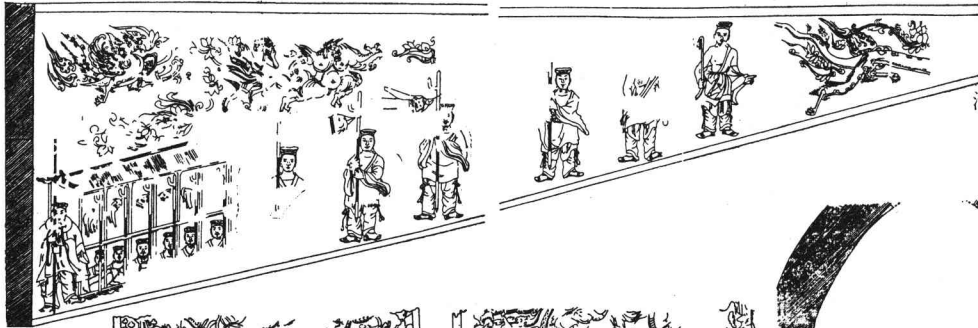


図9 北朝墓の変遷



河北省磁県・茹茹公主墓 (550)

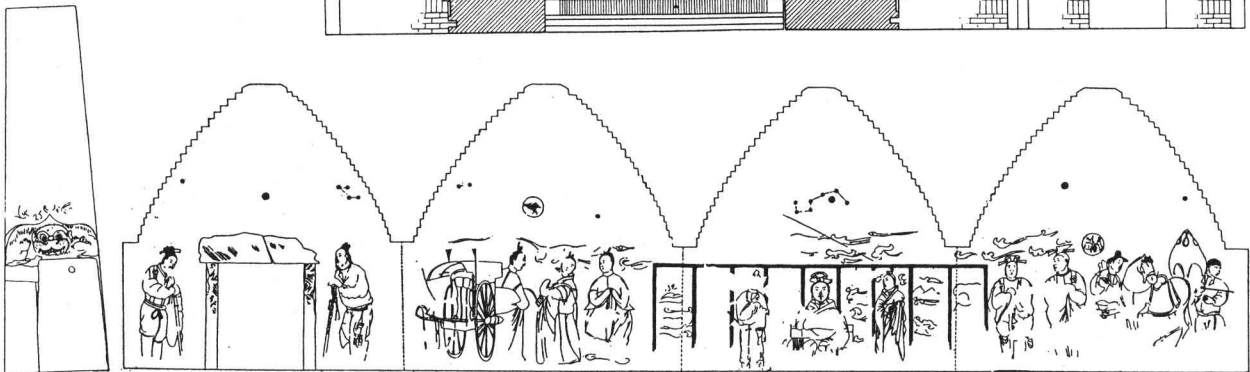
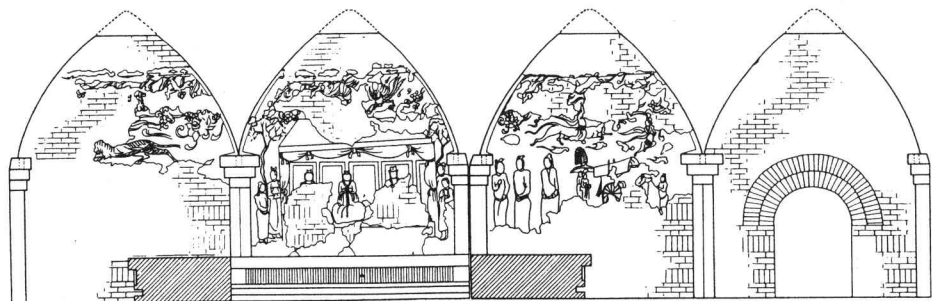


山西省太原・婁叡墓 (562)

濟南・東八里窪墓



陝西省咸陽・候義墓



山東省濟南・張道貴墓

6世紀代の南北朝・高句麗における共通するモチーフをここにみることができる。

北齊の崔芬墓(551)や金勝村墓では、青龍・白虎・玄武に乗駕する神仙の図像が出現する。畏獣が組みあわさる。乗駕図像は、北魏の洛陽画像石棺にもみられる。

墓主図像の変化と屏風画の出現 北魏末の固原墓の棺板漆画には、墓主図像を中心に描かれる。魏晉以来の伝統を継承する。東八里窪墓で屏風画に墓主図像が描かれる。道貴墓では、墓主図像が消失し、竹林七賢・榮啓図が表現されている。崔芬墓で屏風状の画面に描く屏風画が出現する。金勝村北齊墓・道貴墓・東八里窪墓では北壁のみが区画される。その後、隋唐壁画で屏風画が主流となる。山東半島の地域は、5世紀の中葉以前、南朝の領土であり、南朝文化の伝統が根づよく、「屏風絵」が盛行し、竹林七賢と榮啓期の像が描かれるようになった〔蘇哲 1992〕が、6世紀段階での南朝壁画のあらたなる伝播によるものであろう。

北朝の帝陵と壁画 北魏永固陵、北魏孝文帝長陵、北魏宣武帝景陵(径105~110m、高さ約24m)、北魏静陵、東魏孝静帝元善見西陵(551年没、径120m、高さ約21m)、北齊神武帝高歡義平陵(547年没、径71×77m、高さ約24m)、北齊文襄帝高澄峻成陵(549年没、高さ22m)、北齊文宣帝高洋武寧陵(559年没、径150m、高さ30m)が帝陵として比定されている。このなかで景陵と湾漳墓(推定武寧陵)が発掘されている。帝陵の特徴は、陵園が造営され、版築の墻垣が構築されたもの(西陵)がある。塼築墳で、長大な斜坡墓道をもつ単室墓である。円墳で、神道がつくられ、石闕(義平陵・峻成陵)・石人像(景陵・武寧陵)が配列されている。湾漳墓(推定武寧陵)は、北朝の帝陵として唯一確認された壁画墓である。北魏の景陵では、壁画がみられないが、洛陽近辺で出土した石棺などから、壁面のかわりに石棺に彫刻されたのであろう。さらに墓室内に鎮墓獸・陶俑などの明器が副葬されている。

東魏・北齊墓では、第二等級の親王・公主墓から第六等級まで壁画墓である〔蘇哲1992〕。南朝でも帝陵に竹林七賢図・青龍・白虎図が描かれる。

⑤……………北朝と高句麗壁画

高句麗壁画にみる国際環境 4世紀から5世紀初の高句麗壁画の成立過程において、安岳3号墳(冬壽墓)、徳興里古墳(鎮墓)のような魏晉壁画の影響とともに、三燕文化の影響をうけて王字文・蓮華文壁画が出現している。高句麗独特の壁画が形成される。墓主図像を中心として壁画構成である。大同江流域においては、徳興里古墳から梅山里四神塚へ、鴨緑江流域では、舞踊塚・角抵塚の出現である。

5世紀後半になると、集安において、三室塚のような神仙的な壁画がうまれる。その前段階の長川1号墳のような、仏教的要素が払拭され、神仙的要素がつよくなる。畏獣・力士像と四神図像が強調されるようになる。墓主図像から四神図像への変移する。6世紀には、四神図像・星宿図像が発達し、四神壁画に変容する。

畏獣A像・B像は、北魏の馮邕妻元墓(522)東魏の茹茹公主墓(550)・梁の蕭宏墓(526)などにあるが、高句麗の通溝四神塚・五蓋墳4・5号墳は、その影響なくしては表現しがたい面をもつ。北魏末期に受容した辟邪思想で、その図像化されたものが畏獣である。北朝では、茹茹公主墓

のように、墓道に青龍・白虎像とともに表現される。墓室から墓道へと、水平的空間における関係にあるが、高句麗壁画では墓室内部において、垂直的な空間に表現される。墓室構造の差異ともいえる。北朝から隋唐にかけて墓道が長大化するが、高句麗では墓道・羨道の短い単室墓化する。

こうした高句麗壁画にみられる外来的要素は、当時の高句麗と北朝との平和的な国際関係の影響、文化交流をものがたる。それは、集安の壁画にみられる現象である。

王都の平壤地域では、大安寺1号墳壁画の力士像は、集安三室塚と共通する。八清里古墳や天王地神塚には、安岳3号墳壁画の鬼神（鬼面）像が描かれている。

集安の壁画において、畏獣など北朝壁画の影響がみとめられたが、集安の長川1号墳・環文塚の墓道に描かれた怪獣（獅子）も、北朝鎮墓獣の影響であろう。

崔芬墓（551）の玄武像の表現法は、通溝四神塚や江西大墓と類似する。

6世紀中葉には、四神壁画の陽原王陵が成立している。畏獣や鬼神は表現されていない。集安の通溝四神塚や五蓋墳4・5号墳と同時期と推定されるが、壁画の構成・内容のうえで、ちがいがみられる。新都と旧都では、壁画の様相がことなっている。

いっぽう真坡里1号墳の四神と蓮華化生図像は、南朝壁画の影響であろう。湖南里四神塚の立地条件は、南朝帝陵の風水思想の影響とみられる。このほかにも南朝的要素がある。北朝とともに、南朝との国際交流関係にあったことは、413年の征東將軍、562年の寧東將軍の称号をうけていることからわかる。

高句麗壁画において、5世紀初の徳興里古墳・舞踊塚・角抵塚で星宿図が表現されているが、北燕の馮素弗壁画墓（415年）においても星宿図がみられる。

6世紀から7世紀末の滅亡まで、高句麗の壁画が四神図像を中心に展開する。北朝では末期に青龍・白虎像は四神から乖離し、屏風画の出現で象徴されるように、人物群像・宮廷儀礼のさま、とくに身分制度が壁画に表現されるようになる。個人墓であるがゆえに、墓誌が埋納される。隋・唐壁画も同じ傾向であった。

壁画にみえる胡人 4～8世紀の高句麗・北朝・隋・唐壁画において、異人、西域・胡人像の姿が描かれている。東アジア世界と西・中央アジアとの国際的な交流関係をものがたると同時に、西方に対する思想の表現にほかならない。そのひとつが、辟邪思想との関係である。

高句麗：角抵塚（相撲をする人物）、三室塚（門衛像）、通溝四神塚（胡帽をかぶる天人）

北朝：東魏婁叡墓（墓道の畏獣、出行図の従者）、北朝俑、山東省益都北齊石室墓線刻（「商談図」・「車御図」）

唐：懿德太子墓（ペルシャ犬）、万泉県主墓（ペルシャ犬）、蘇思勗墓（墓室東壁舞楽図の「深目高鼻満臉胡髭（須）胡人」）

新羅：順興壁画墳（門衛の力士像）、慶州味鄒王陵C地区4号墳（人物象嵌）、鷄林路14号墳（黄金装短剣）、隍城洞石室墳（陶俑）、興徳王陵（石人像）、掛陵（石人像）

異人像・胡人観は、脅威・恐れ・辟邪の象徴としてとらえられる。民族・種族問題もあるが、シルクロードをへた国際交流関係をしめす。このほかペルシャ貨幣（李希墓）も出土しており、西域との関係がわかる。胡人が牽く鷹犬（ペルシャ犬）の図像も意味をもつ〔宿白 1982〕。

畏獣の基本的性格が辟邪であり、西方の彼方の異人が特別視され、畏獣として表現されている。

胡人は、長安城の西市に住んでいたという [礪波護 1997]。

⑥……………隋唐壁画の四神図像

(1) 隋壁画の四神図像

隋代の壁画墓は5基が知られている。そのなかで四神図像のみられるのは3基である。

李和墓 (582) [陝西省文管委 1966] 陝西省三原県城双盛村。斜坡墓道の単室墓。墓室・墓道にえがかれる。墓道では過洞の入口外側に男侍・女侍像、墓室の下半部に樹木・山を描いた屏風画がある。石門に衛士や忍冬唐草文を彫刻する。石棺の蓋に、人首鳥身の伏犠・女媧像、飛天像、周縁の珠文帯のなかに怪獣をあらわす。石棺両側面に乗駕青龍天(神)人像、乗駕白虎神人像、まわりに畏獣を配し、卷草花文を装飾する。前面に武人像と1対の朱雀、下辺に鬼神(畏獣)像がある。後面に鳳凰と麒麟(鹿)の図像のあいだに玄武が表現されている。

徐敏行墓 (英山1号墓) (584) 山東省。墓室東西壁の「出行(出遊)」図の上方に青龍・白虎が描かれる。下段に牛車、女侍、犬、扇蓋、鞍馬(控者)、後壁に墓主人夫妻の座帳内飲宴、楽舞がみえる。墓室内に四神図像が表現される段階である。

史射勿墓 (609) [寧夏博物館 1996] 寧夏ウイグル回族自治区。斜坡墓道、過洞に両龕室のつく単室墓。墓道両壁に環頭大刀を持つ武人像、過洞天井に建築、花卉、執刀武士像、執笏侍従像、墓室西壁に5人の侍女群像が描かれている。

李静訓墓 (608) [唐金裕 1959] 西安玉祥門外。斜坡墓道をもつ墓室内から石槨と石棺が出土。石棺外壁に青龍・朱雀・花草文が彫刻されている。棺内の四壁には、花卉・侍女・房屋・人・鳥・樹木が描かれる。大業4(608)年に9歳で卒した年少者の墓である。

洛陽隋石棺 [黄明蘭 1987, 洪桔明 1988] 河南省洛陽。外面に四神が彫刻されている。青龍の頭部に「画文帯」が描かれ、「環」がつく。大腿部に「C字形巴形」がみられる [渡辺 1984]。青龍は、同じ石棺の白虎の図を粉本、あるいは反転して描いた可能性がある。体軀が細部で一致していること、青龍の頸に本来不要の線がみられる。

隋壁画において、青龍・白虎の墓道壁画は確認されていない。

(2) 唐壁画の四神図像

唐代では60余基の壁画墓が確認されている。四神図像の表現空間に焦点をあわせて、記述する。

趙澄墓 (696) 陝西省太原市董茹庄。単室塼室墓。壁画は、斗栱などの建築、笏を持つ門衛、Y字形杖をもつ侍女、樹下老人像が描かれている。武后万歳登封元年の「大周趙君墓誌」が出土し、周趙澄墓であることが判明した ([文物参考資料] 1954-11, 12)。

金勝村4号墓 [山西省文管 1959] 陝西省太原市南郊区金勝村。単室塼墓。墓室内に柱・斗栱が描かれる。南壁に、弘子やY字形杖を持つ侍女、笏を持つ男侍、他の3壁に樹下老人図を描く。墓頂部に四神の痕跡があるという。

金勝村5号墓 [山西省文管 1959] 太原市南郊区金勝村。斜坡墓道の単室塼墓。墓室北壁に樹下人物像、西壁に牛車と御者を描く。東壁に馬夫と馬・駱駝の痕跡がみられる。

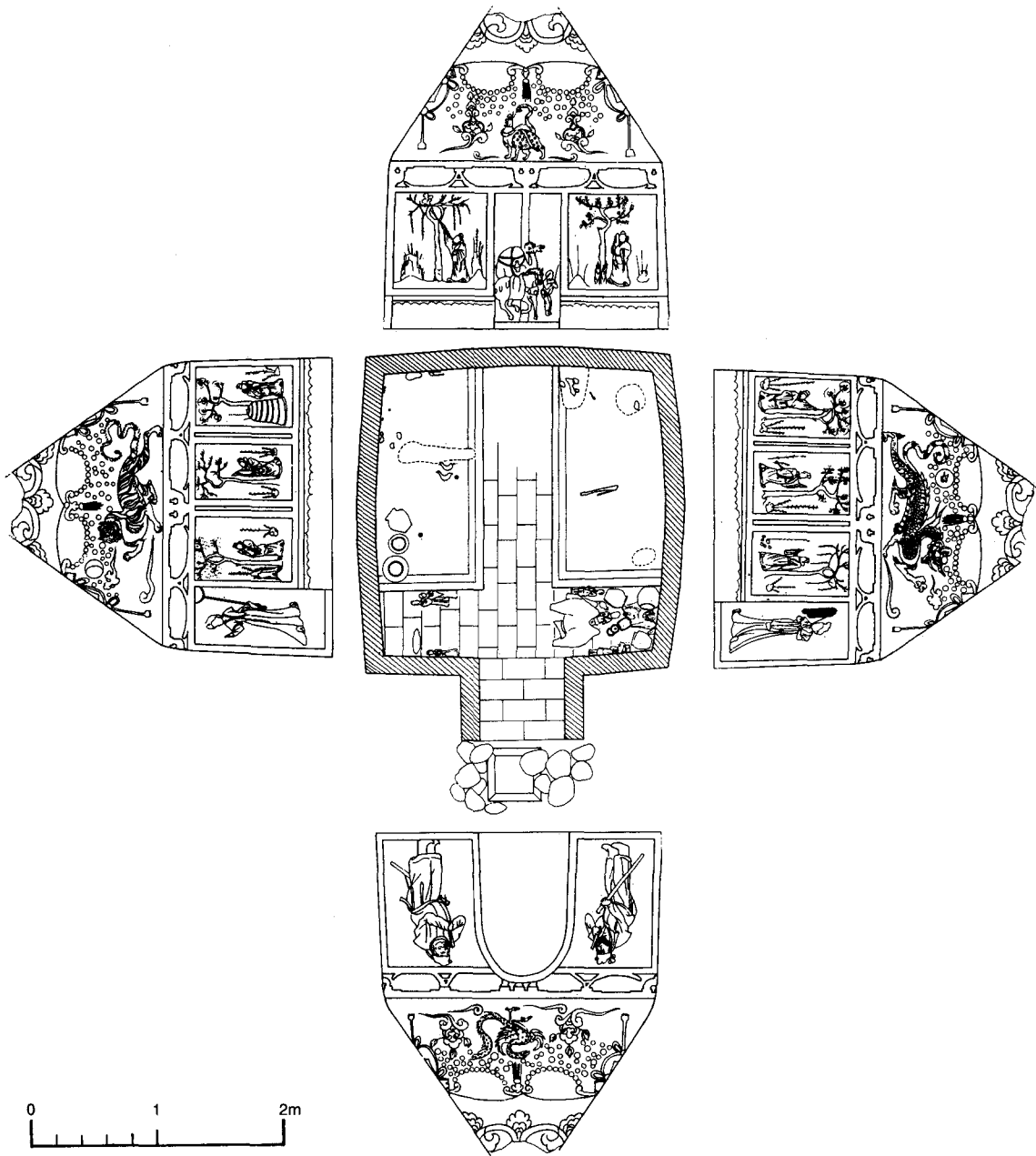


图10 太原南郊唐墓 [山西省考古研究所 1988]

太原金勝村6号墓 [山西省文管 1959] 太原市南郊区金勝村。単室墓。墓室頂部に四神・蓮華文・流雲文、東西両壁の頂部に日象・月象・星宿を描く。南壁の左右壁に劍・笏を持つ侍衛、三壁に8幅の樹下老人像などが描かれる。樹木の上方の天空に雁の群れを描く。太原董茹庄の武后万歳登封元年(696)墓に類似するという。

金勝村337号墓 [山西省考古研究所 1990] 太原市南郊区金勝村。墓道・甬道・墓室からなる塼室墓。壁画は墓室壁面と天井頂部に描かれる。天井頂部には日・月・星象と青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を描くが、その内容は、太原南郊唐墓に類似するという。壁面には柱・斗拱を描き、南壁の門衛、他の三壁に2幅の人物像を配する。東西壁に各1幅、北壁に2幅の樹下老翁像、東壁の侍女は花やT字形杖をもち、東壁の侍女は扠子をもつ。唐高宗(649-683)の時期と推定されている。

金勝村7号墓 (太原南郊唐墓) [山西省考古研究所 1988] 太原市南郊区(太原化工焦化廠区内)。墓道・甬道・墓室からなる単室塼墓。壁画は天井頂部と壁面にみられる。天井部は日象・月象、花鬘、連続珠文で飾られ、その下に四神が描かれる。玄武・朱雀の両側に唐草宝相華が配されている。青龍・白虎の尾は斑点・縞状に表現され、立ちあがっている。墓壁は、南壁に笏・劍を持つ侍衛、東西両壁の南端に扠子やT字形杖を持つ侍女が描かれる。北壁の中央に駱駝・馬の牽引図、他の壁面には8幅の樹下老人図を描く。駱駝と馬がともに表現されている点は、太原地域の特徴といえる。他界する墓主の乗物である。時期は、四神図像が墓室に表現される段階のもので、7世紀中葉のころの壁画墓と推定される。樹下老人像は四神図像とともに、道教と関連することが指摘されている[寧立新・馬升 1988]。四神図像は、同じ太原南郊の北齊墓の系譜をひくものである。

李寿墓 (630年) [陝西省博物館 1974] 陝西省三原県。墓室内の石門に2対の朱雀(鳳凰)、石槨外壁に四神・武衛、文武侍従、騎龍駕鳳仙人、樂舞・侍女・内侍、男女侍従、十二支像が彫刻されている。斜坡墓道入口の東西壁に飛天の痕跡があるが、青龍・白虎は表現されていない。石槨外壁は、中央上方に玄武像、下方に1対の鬼神像と朱雀、その両側に戟・幢を持つ門衛、さらに騎龍駕鳳仙人と笏・劍を持つ男侍が浮き彫りされている。この石槨は墓主の生前の寝殿をあらわすという[孫機 1996]。第4天井東西壁に各七列戟図が描かれている[宿白 1982]。

長楽公主墓 (643) [昭陵博物館 1988] 陝西省礼泉県。全長48.18m。墓道・天井・過洞・龕・甬道・墓室からなる単室塼墓。墓道両壁に青龍・白虎がのこる。墓道の西壁は、北から南に5人の旗を持つ騎兵と隊長(領隊)、1人の領隊と七人の衛士、車馬、青龍の順に描かれる。中央の領隊箭壺、5人の衛士は紅色の旒旗を持つ。青龍・白虎に続いて、両壁に車馬が描かれる。西壁の車馬の轅端に龍頭が彫刻され、車上に華蓋がある。車輪側に「虎頭魚身怪獸」があり、鱗尾をもち、龍身や蛇身ではないらしい。東壁の車馬具にも怪獸がともなう。

司馬睿墓 (649) [貞安志・王学里 1985] 西安市灤橋区洪慶郷。墓道・甬道・墓室に白灰が塗られる。壁画は甬道から墓道にかけて、建築が描かれている。その他は不明である。

段間壁墓 (651) [昭陵博物館 1989] 陝西省冷泉県。全長(水平)46.2mで、墓道・過洞・天井・龕室(過洞)・墓室からなる単室墓。過洞・天井の東西壁に、17幅の壁画が遺存する。第1天井の西壁に六列戟図が描かれ、東壁にも痕跡がある。第2過洞の東西両壁に男侍、天井東西壁に女侍がえがかれる。墓門も楣石に1対の朱雀、門額に舌をのばす怪獸の頭、獸面・蔓草文が線刻される。また門扇は蔓草文で3段にわけられ、東扇は上に朱雀、中に青龍、下に怪獸、西扇は上に朱雀、中

に白虎，下に怪獣（噬蛇）が彫刻される。棺床に4体の怪獣を刻む。

冉仁才墓（654）[四川省博物館 1980] 四川省万県聰馬大隊。甬道に2室・墓室に4室の耳室がつく塼室墓。墓室全面に漆喰が塗られているが，壁画は剝落している。甬道両壁の青龍・白虎・星宿図が遺存する。

張士貴墓（657）[陝西省文管会 1978] 陝西省冷泉県。唐太宗の昭陵の陪葬。墓室に壁画は存在したが，すべて剝落しているという。石門の彫刻はのこる。変形唐草文（宝相華文）で縁どられた門扉に男侍・女侍が彫刻されている。

新城長公主墓（663年） 墓道入口の東西両壁に青龍・白虎が表現されている。脚の一部が遺存するだけであるが，東西両壁に出行の情景とともに描かれる。

鄭仁泰墓（664）[陝西省博物館 1972] 陝西省礼泉県烟霞公社馬寨村。昭陵の陪塚。有龕墓道・甬道・墓室からなる。墓道の東壁に馬・駱駝牽引・儀仗図，男侍，西壁に牛車・儀仗・男侍・女侍図がある。墓道入口部の青龍・白虎図像は不明である。墓室内の壁画も剝落している。鎮墓獸・儀仗俑などの陶俑が出土している。

史索岩墓（664～）[寧夏博物館 1996] 寧夏ウイグル回族自治区固原羊坊村。墓道・墓室の壁面は白灰が塗られ，全面に壁画が存在したようである。唯一第5過洞の天井に朱雀が遺存する。石門や墓誌に線刻画がある。門扉の3辺は唐草文で縁取られ，山岳文を背景として蓮華座の朱雀（鳳凰），青龍，怪獣が線刻され，周囲は唐草文で飾られる。身体は唐草文で装飾され，青龍の背に鱗状の装飾がみられる。怪獣は白虎の変形かもしれない。墓誌蓋の側面には，山岳文を背景に四神図が彫刻されている。

蘇定方墓（667）[科学院考研 1963] 陝西省咸陽。「蘇君之墓誌」の蓋のみが出土し，蘇君墓として報告，壁画に十列戟が表現されていることから，三品以上の官僚と推定されていた[王世和・韓偉・賈瑞原 1963]。その後，列戟の数や天王俑の年代，埋葬地などから，左驍騎大將軍邢国王の蘇定方に比定された[宿白 1982]。墓道両壁に出行図（牽引馬，儀仗）と青龍・白虎を配置する。青龍は，脚・爪の一部が遺存するだけである。周囲に卷雲文がめぐらされている。西壁の白虎はほぼ完存する。身長5.2mである。「全身は黒色の卷毛」でおおわれ，「尾は巻曲し，足で彩雲を踏み，疾走するようである」。まわりに卷雲文が配され，身部にも卷雲文装飾がほどこされている。尾は斑状の文様で，股部から左脚側にのびる構図は特徴的である。第5天井下の東西壁にそれぞれ五戟列架が表現されている。墓室の壁画は剝落しているが，前後室の天井には星宿図がのこる。

李爽墓（668）[陝西省文管 1959] 墓室四壁・甬道壁面には屏風絵で，男女の人物像が描かれ，四神図像は表現されていない。墓誌の四周に十二支像が彫刻されている。墓道・甬道に，烏皮靴をはいた人物像・武人像・宮殿の図像の痕跡をとどめる。墓道に青龍・白虎図が存在した可能性がある。女侍の服装は隋代の系統上にある。

大長公主墓（673）[安崢地 1990] 陝西省富平県。全長57.8mで，墓道・過洞・天井・龕室・甬道・墓室（前室・後室）からなる。壁画は剝落しているが，遺存する人物画27幅のすべてが侍女図像である。天井・甬道・前室・後室壁面に侍女および女扮男装人物を描く。墓誌は唐草文帯が線刻されている。

安元寿夫婦墓（683）[昭陵博物館 1988] 墓道・甬道に団扇や包裹を持つ侍女，T字形杖を持つ

男侍、童侍・花文を描く。羨門の扉石に各侍女、石門に朱雀や唐草文が線刻されている。夫人の翟氏墓誌蓋側面に四神、身側面に十二支・雲文が刻まれている。墓道における青龍・白虎図は不明である。墓室内の、墓誌に四神図が表現されている。

阿史那忠墓 (675) [陝西省文管委 1977] 陝西省礼泉県烟霞公社西周村。昭陵陪葬の1墓。有龕墓道・甬道・墓室からなる塋室墓。墓道東壁は、入口部に青龍、つづいて馬・駱駝の牽引図、儀仗隊(11人)、西壁は白虎、牛車が描かれる。過洞の東西壁に男侍、建築(樓閣)、扠子・団扇を持つ女侍像がある。第1天井の両壁に六列戟があり、なかに虎頭の円形幡を飾るものがある。壁画の儀仗隊の図像(人物の衣冠、神态、兵器およびその配置など)が鄭仁泰墓と酷似することから、同じ画師が描いた可能性が強い[王玉清・苟若愚 1977]。また儀仗隊の数に2人の差があるが、それは官位によること、十二戟は『唐六典』の規定である、「上柱国、柱国帶職事二品以上、中都督府、上州、上都護門」が十二列戟であり、阿史那忠が「鎮東大將軍・荊州大都督・上柱国」であることと符合することを指摘する。

梁元珍墓 (699) [寧夏博物館 1996] 寧夏ウイグル回族自治区固原羊坊村。斜坡墓道の単室墓。墓道両壁天井部に牽馬図、甬道両壁に牽馬図・団扇を持つ侍女を描く。墓室北壁・西壁に各5幅の樹下老人屏風画、東壁に樹木と侍女・男侍、南壁に牽犬男侍像が描かれる。天井に日・月、銀河・星宿図が表現されている。

懿德太子墓 (706) [陝西省博物館 1972] 西安市。長さ26.3mの斜坡墓道の入口の両壁に武装した儀仗に続いて、青龍・白虎、山景と城牆・闕樓が描かれる。後室頂部に星宿、東面に金烏、西面に蟾蜍が描かれる。

永泰公主墓 (706) [陝西省文管委 1964] 西安市。墓道入口の東壁に、南端から一組の武士群像、青龍、樓閣、5組の儀仗隊、戟架、牽馬がえがかれる。青龍は頭部や脊は剝落し、右前脚と左右の後脚と尾の部分が遺存する。青龍の周囲は花文で飾られている。西壁の壁画は剝落がいちじるしいが、東壁と同じ構成であるという。白虎像は一脚と尾がのこる。東壁の鞍の下に虎皮と花毯が敷かれている。

章懷太子墓 (706) [陝西省博物館 1972] 西安市。墓道の東壁に狩獵出行・客使・儀仗と青龍、西壁に馬毬・客使・儀仗と白虎を描く。墓室の門楣石に朱雀・飛鳥・蔓草文、石槨の門楣に朱雀・蓮華文を彫刻する。また雍王墓誌蓋の周囲に十二支像と蔓草文が彫刻されている。青龍・白虎は、全長6m余で、東西両壁の儀衛の上方に表現されている[陝西省博物館 1972]。青龍・白虎が墓道入口部から羨道側に、しかも墓道上方に描かれる。表現空間は永泰公主墓と異なる。列戟は過洞東西壁に表現されている。

韋洞墓 (706) [陝西省文管委 1959] 陝西省長安県南里王村。有龕羨道・双室墓。壁画は墓道・甬道・墓室に描かれる。墓道内には、柱・斗拱の建築、東壁北段に青龍、南段に朱雀、西壁北段に白虎、南段に朱雀、墓門の上部に樓閣を描く。前室には、上部に花卉飛禽を描いた長方形格子文、下部に花草樹木がのこる。後室甬道の壁面は剝落、天井部に雲鶴がみえる。後室には柱・斗拱、雲鶴、壁面に男侍・女侍の人物像が描かれる。石槨に笏を持つ男侍、花や壺や鳥を持つ女侍、花鳥文が線刻されている。

李仁墓 (710) [中国科学院 1966] 陝西省西安。西安郊区305号墓。双室塋墓。壁画はないが、

石門に線刻されている。門楣に双鳳文と卷草花文、門扉石に冠をかぶり、笏をもつ文人像、剣を持つ武士像、そのほかは流雲文や花文で装飾されている。

薛氏墓 (710) 陕西省咸陽。過洞天井に五列戟・属史、甬道に女侍、牽犬駕鷹の男侍が描かれる [宿白1982]。

薛莫墓 (728) [何修願 1956] 陕西省西安市東郊。単室塋墓。墓道・墓室全面に白灰が塗られ、甬道をのぞき、壁画が描かれている。墓室壁面に柱・斗拱の建物と人物像、天井頂部に星宿がみえる。墓道両壁に青龍・白虎と盤や蓮花を持つ男侍・女侍が配されている。

張九齡墓 (740) [広東省文管 1961] 両耳室付きの塋墓で、墓室から羨道にかけて漆喰が塗られ、壁画が描かれる。剝落しているが、甬道の左壁に侍女像、墓室右壁に侍女と左壁に青龍の図像が遺存するという。四神図としては、盛唐期のなかで、おそい時期のものである。陕西省以外での確認された壁画墓で、8世紀中葉(741年)段階で墓室内に四神が表現されている例である。つまり都の長安を中心とした地域では、被葬者の階層も関係するが、青龍・白虎は墓室内ではなく、墓道に表現されるようになっていく。

韋君夫人墓 (742) [王育龍 1989] 陕西省長安県。墓道・過洞・甬道・墓室からなる。墓道の東壁に青龍、牽馬、牽駱駝、男侍4人、奔馬2、男侍・女侍、西壁に白虎、牽馬2、牛車1、男侍2、奔馬2、男侍、甬道の西壁に男侍3を描く。墓室は剝落のため不明である。墓道の西壁の牛(輶)車に対して、東壁には牽駱駝像である。その牛車は、被葬者が女性であることとかわるのであろう。墓道西壁の白虎像は一部が遺存する。

蘇思勳墓 (745) [陝西考古所 1960] 墓道・甬道の東西壁面に男女立像と櫃を運ぶ人物(担架)、墓室東壁に舞楽図、西壁に各幅一人一樹の六幅の人物図、墓室南壁に朱雀(長さ・幅約2m)、北壁に玄武像と一男一女の人物図像、頂部に日象・月象・星宿図を描く。西壁に上方に樹木、下方に人物を配した6幅の屏風画であるが、白虎を描く空間がない。青龍・白虎図像は有無は不明である。墓室は一辺4.1mの正方形で、幅2mの玄武・朱雀は相対的にも大きい。

張去奢墓 (747) 陕西省咸陽底張湾33号墓。墓室・甬道壁画は剝落しているが、墓道両壁に長さ7mの青龍・白虎が遺存する [賀梓城1959]。過洞天井に五列戟・男侍・木石がみえる [宿白 1982]。

張去逸墓 (748) [福岡市博物館 1992] 陕西省咸陽底張湾。墓道に青龍・白虎、甬道と墓室に侍女・楽隊図がのこる。

高元珪墓 (756) 墓道に青龍・白虎、過洞天井に騎衛、甬道に女侍、墓室には舞女・花卉、北壁には墓主像のようであるという。また棺床の北側に玄武、南に朱雀を線刻する [宿白 1982]。

唐安公主墓 (784) [陳安利・馬咏鐘 1991] 西安王家墳。単室塋墓。墓室の頂部に流雲文と星宿、月象、北壁西側に玄武と花文、東側に男侍・女侍、南壁に朱雀と花文、東壁は女性像、山石、花草、奏楽図、西壁に花鳥・樹木、飛鳥(鴨)を描く。石門楣石に双龍文が彫刻される。盛唐から中晩唐に流行する花鳥壁画の紀年の明確な初期の資料である [陳安利・馬咏鐘 1991]。玄武と朱雀が存在するので、青龍・白虎も表現されていたのであろう。玄武像は、蛇が楕円状にからむ。晩唐期の貴重な四神図像といえる。朱雀もまわりを雲気文で飾られている。

臧国大長公主墓 (787) 墓道に青龍・白虎、過洞に男侍、過洞天井に鞍馬(牽馬)・女侍、墓室の南壁に朱雀、左壁に伎楽が描かれる [宿白 1982]。北壁の壁画については不明である。

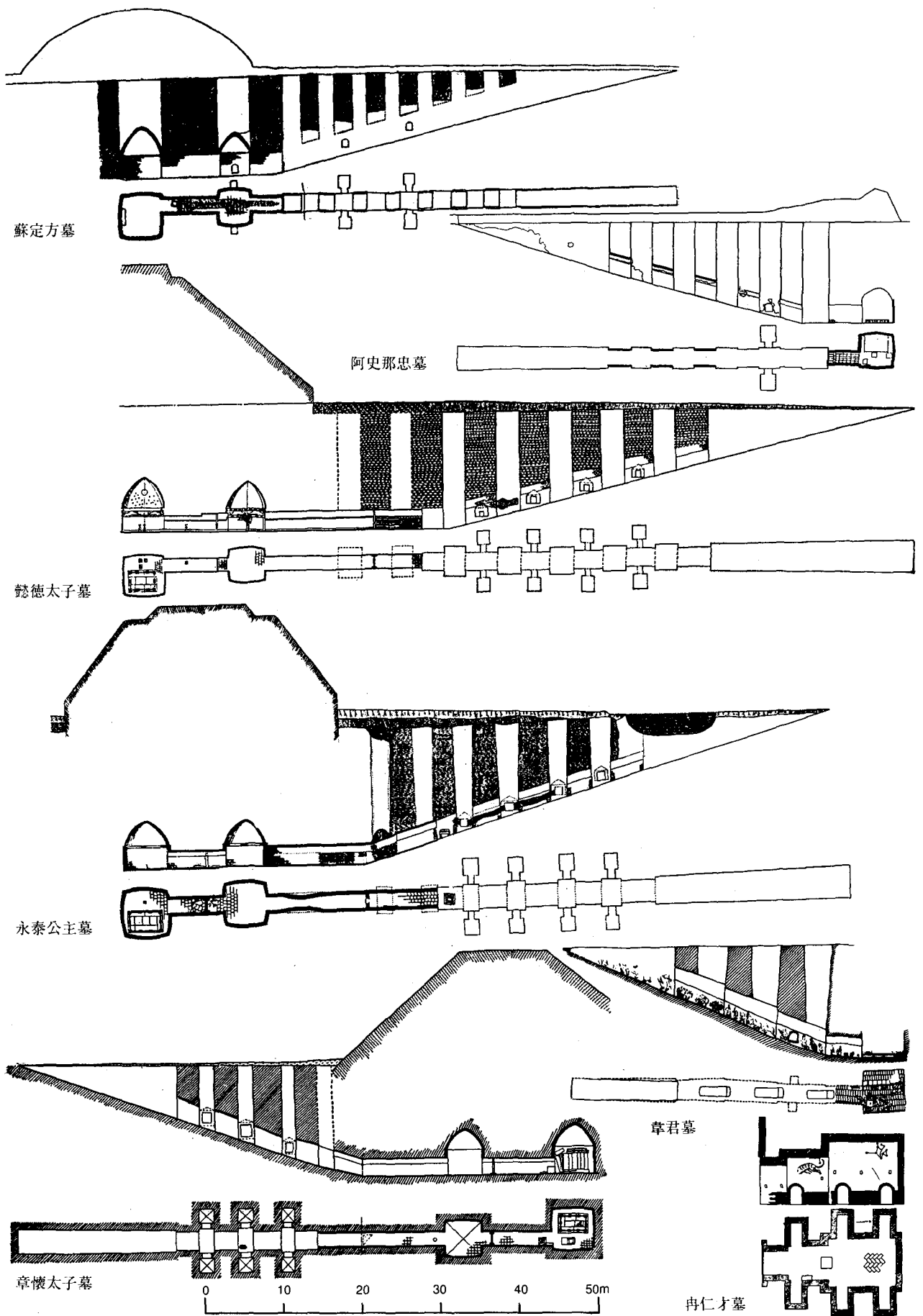
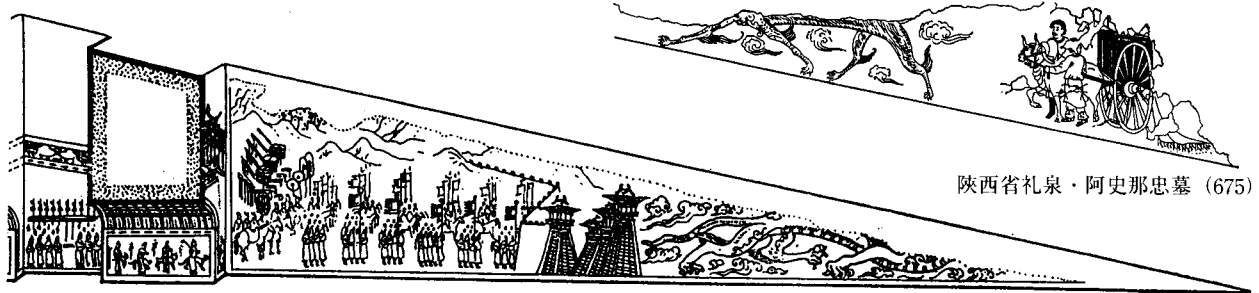


図11 唐壁画墓の変遷

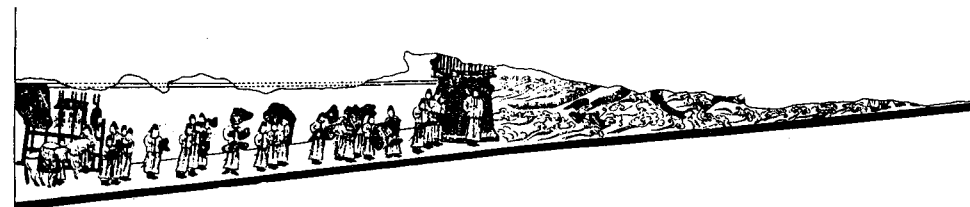


陕西省咸陽·蘇定方墓 (667)

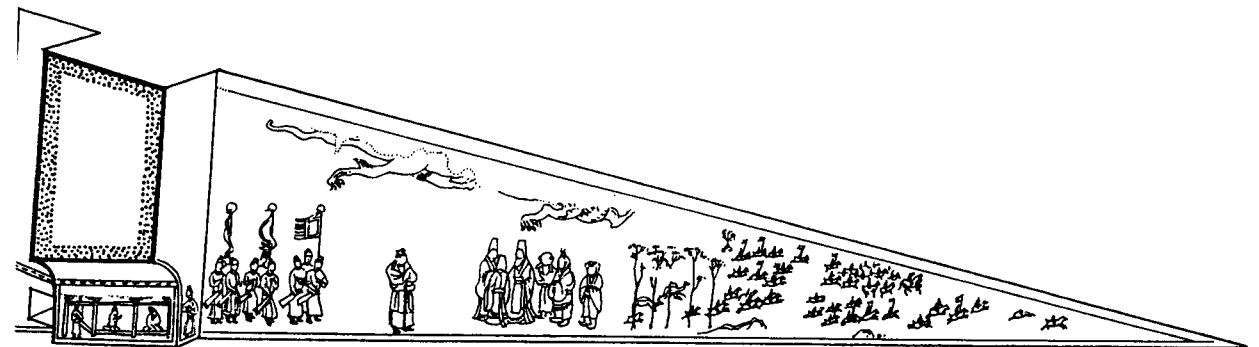


陕西省礼泉·阿史那忠墓 (675)

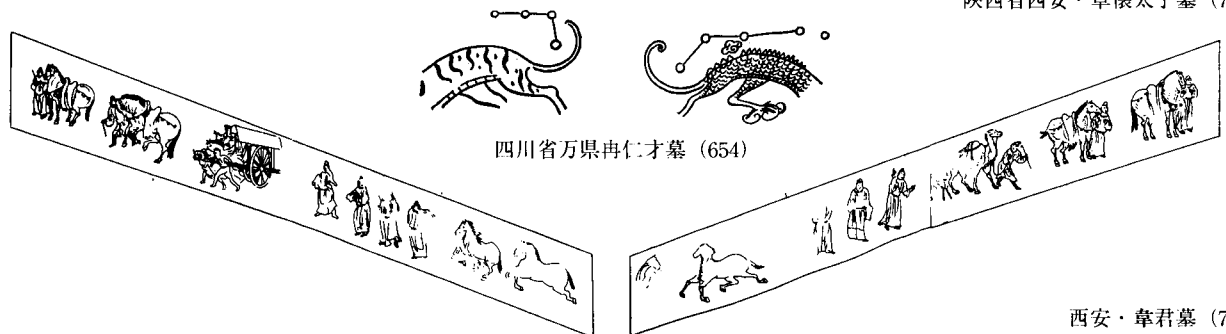
西安·懿德太子墓 (706)



西安·永泰公主墓 (706)



陕西省西安·章懷太子墓 (706)



四川省万县冉仁才墓 (654)

西安·韋君墓 (742)

姚存古墓 (835) 墓道の東・西壁に青龍・白虎が確認されている。[王仁波他 1984]

梁元翰墓 (844) 陝西省西安市。墓室の南壁に朱雀、右壁に六扇の雲鶴屏風画が描かれる [宿白 1982]。

楊玄略墓 (864) 墓室の右壁に六扇の雲鶴屏風画がある [宿白 1982]。

乾陵石刻 昇龍図は長さ412cm, 幅119cmで, 碑の東西側面に彫刻されている [楊正興 1983]。龍の尾が後足にからまる構図である。龍身に背鱗, 周縁に花文が装飾される。行龍図は, 長さ218cm, 幅51cmで, 翼にある石馬(天馬)の石座に彫刻されているものであるが, 龍尾は垂れ下がった構図である。

⑦……………隋唐四神図像の変遷

(1) 四神図像の変容

東魏の茹茹公主墓 (550年) では, 墓室の上段に四神図, 墓道入口の東西両壁に青龍・白虎, 墓道南壁に畏獣とともに朱雀が描かれる。墓道の羨門側の東西両壁に朱雀と畏獣, また墓道の北壁にあたる甬道門牆上にも畏獣と鳳凰を配する。墓室内と墓道のいずれにも四神を配置することが特徴である。北齊の湾漳墓では, 墓道の開口部両壁に龍と虎を配するが, 大きく表現された青龍・白虎(長さ4.5m)が4列の儀仗出行隊列を引導する構図である [宿白 1996]。

青龍図像 東魏の茹茹公主墓(550)の龍身の背や脚部縁端にC字形唐草文が表現されている。その龍身の輪郭が唐草文化するとともに, 背鱗が鋸歯文様化(鋸歯文装飾)されるのが, 初唐の固原思索岩墓(664)や太原金勝村7号墓でみられる。7世紀後半段階である。西安・咸陽地域では, 阿史那忠墓(675)に唐草文様化がみられる。蘇定方墓では, 龍身が装飾化(唐草文装飾)するとともに, 尾が垂れ下がり, 後足にからませたり, もぐるような構図となる。玄武の図像の影響もかんがえられる。高元珪墓(756)は中・晩唐期で, 青龍の背から尾にかけて連続して, 鋸歯文状のひれが描かれ, 角も退化している。周囲を花文で飾る。

高松塚古墳の青龍も鋸歯文化し, 青龍の輪郭は縞状文によってなされている。青龍・白虎の胴部(腹部)に縞状文で輪郭をとる手法は, 初唐の太原南郊壁画墓あたりから顕著になるようである。

冉仁才墓(654)の青龍の脚部は花文化し, 腹部に縞状文の輪郭がある。

玄武図像 亀身が四つ足で立つ姿態とこのような姿態のものがある。亀頭回首頸龜蛇対向図(「亀昂首回視, 與蛇首相對」)。北齊の崔芬墓は, 龜蛇対向図で, 蛇身は亀身に3重に絡む。茹茹公主墓の蛇身は横長であるが, 上半部の構図は不明である。隋の洛陽石棺玄武像は, 蛇身が「8(S)」字(だるま)状で, 亀身に2重に絡みつく。初唐の太原金勝村7号墓においても, S字状蛇身である。盛唐期の金勝村6号墓ではすでに円形化している。したがって7世紀末から8世紀初頭のころ, 蛇身は円形・楕円形化する。そして高元珪墓・唐安公主墓・韋氏墓の図像に継承される。高元珪墓・韋氏墓の玄武は対向式で, 蛇は3重に絡まる。

亀首直視の対向図の玄武像は, 三室塚や江西中墓にみられる。江西大墓から江西中墓へは, 四神図像じたいが一変するが, その変化要素のひとつである。

白虎図像 茹茹公主墓では花文・雲気文などとともに引導する姿態である。背に唐草文装飾がみ

表 4 隋唐の四神壁画

北朝 550	隋 550 600 618	初唐 650	盛唐 700	晩唐 750
〈墓室内四神〉				
〈太原〉 金勝北齊墓	金勝村337号墓	金勝村7号墓	740張九齡墓	
〈西安〉			745蘇思勗墓（従三）	784唐安公主墓
〈墓道内四神〉				
〈磁県〉 茹茹公主墓550 湾漳墓560 〈礼泉〉 〈西安・咸陽〉	643長樂公主墓	667蘇定方墓（従一）	706章懐太子墓 永泰公主墓 懿徳太子墓 708韋洞墓（従一） 728薛莫墓（従二） 747張去奢墓（従三） 748張去逸墓（正二）	韋氏墓 756高元珪墓（従四） 787郟国大長公主墓（正一） 835姚存古墓
〈固原〉		664～史索岩墓（四）		
〈甬道内四神〉				
〈礼泉〉 〈新疆吐番〉		663新城長公主墓 675阿史那忠墓（従一）	阿斯塔那38号墓	
〈四川万泉〉		654冉仁才墓		
〈奈良〉	〈墓室内四神〉	キトラ古墳 薬師如来像台座	705？高松塚古墳	

られる。金勝村7号墓の尾に斑点が表現される。青龍も同様の表現である。構図は類似するが、個々に描かれている。隋の洛陽石棺に線刻された白虎は、その青龍と同じ型紙や原形にもとづいている可能性がある。体軀の頸から尾にかけての下縁辺部を刻み目文で表現される。そのため白虎では一般にみられない背鰭状の文様もある。斑状の尾は蘇定方墓の白虎にもみられ、その尾は左足に絡まる。またその白虎の体軀に花文が装飾されている点は特徴的である。周囲の花文がからまるような表現がなされている。尾が後足にからまる構図は、乾陵の石刻の昇龍図につながる。

高句麗壁画ではみられない。キトラ古墳や高松塚古墳では、青龍・白虎に共通するが、粉本が共通していることからそうした構図じたいは、初唐の図像と関連するであろう。青龍と白虎の表現上の大きな差といえる。

朱雀図像 正視形朱雀とは、朱雀の正面から表現したものである。横や斜方向からの側視形朱雀が基本であった。正視形朱雀は、北齊の茹茹公主墓（550）・堯峻墓（571）・湾漳墓でみられ、長樂公主墓（643）など初唐期に継承される。さらに盛唐にかけての思索岩墓（664）、蘇思昂・高元珪墓のような図像に変化する。羽や頭部のかたちが装飾化・唐草紋化する。思索岩墓のような朱雀は墓主人の靈魂を引導する。また門楣上の朱雀像には齊一性がある。正視形朱雀は盛唐以後にあまりみられなくなる〔寧夏固原博物館 1996〕。蓮華座に乗る朱雀という意匠も初唐期から顕著になる。

北朝から唐にかけて、青龍・白虎の表現が墓道に移行するが、李寿墓（630）のように、朱雀像が南方にあたる門（扉・楣石など）の文様として表現されることがある。玄武は護神としては表現されなくなる。

四神図像の表現空間

- I. 墓室天井部（太原金勝村4号墓，太原金勝村6号墓，太原金勝村7号墓〈青龍・玄武〉）
- II. 墓室壁面（蘇思昂墓〈北壁に玄武，南壁に朱雀〉，唐安公主墓〈北壁に玄武，南壁に朱雀〉，張九齡墓〈東壁に青龍があり，玄武・朱雀・白虎も存在か〉）
- III. 墓道（蘇定方墓，新城長公主墓）
- IV. 石棺四神図像（李和墓，李請訓墓，李寿墓）

宿白〔1982〕は、唐代壁画の変化を5段階にわけ、四神図についてはつぎのようにのべる。第1段階（653～675）の壁画の特徴として、北魏元冑墓や太原南郊北齊墓、隋の徐敏行墓のように墓室内に四神、高潤墓や徐敏行墓のように墓室左壁に牛車、徐敏行墓・太原南郊北齊墓のように右壁に鞍馬、墓室後壁に墓主人の室内生活を描いていること、唐の李寿墓では墓室壁面に四神を描かず、墓室内の石槨外面に四神を彫刻することなどをあげる。第2段階（653～675）では、前段階と墓道壁画上に大きな差異が生じるようになる。つまり墓室内の四神図、青龍・白虎が墓道両壁の前方に、飛天にかわって表現されるようになる。青龍・白虎の後方に鞍馬・牛車・歩衛・属史などが描かれる。第3段階（706～729）では、墓道壁画が簡略化し、墓道両壁の主要な内容が青龍・白虎となり、青龍・白虎の前方に朱雀を加えるものもある。青龍・白虎の後に器物を捧げ持つ男女侍を描くものもある。韋洞墓のように、甬道頂部に雲鶴文が出現する。

北朝の2基の壁画墳から、北朝の6世紀中葉をさかいに、青龍・白虎と儀仗出行図が墓内から墓道に移行し、青龍・白虎が出行隊列の前面に描かれるようになる。北齊東安王の婁叡墓（570）に表現されていないことから、それらの図像はより高級な墓葬特有のものにとらえる〔宿白 1996〕。

墓道両壁の青龍・白虎の壁画墓が、身分的に限定される。つまり長安・淮陽郡王韋洞墓（708）のような郡王墓、西安・雁門県公薛莫墓（728）などの県公墓、西安・高元珪墓（756）の明威將軍（四品）など四品以上にかざられる。また唐壁画では、被葬者の身分が、担子・門列啓戟制度によって規定され、人物群像は、宮官（六尚・六司・六典）制度にもとづいて表現されている〔李求是1972〕。

新城長公主墓（663）は、隋唐の壁画で、墓道に青龍・白虎が表現された壁画の初現である。比較的小形の青龍・白虎像である。その後、墓道における青龍・白虎像は、永泰公主墓などでみられるように大きく表現されるようになる。

墓道における青龍・白虎図像の意味について、「天覧七（508）年春正月…戊戌作神龍仁虎闕于端門，大司門外」（『梁書』武帝紀），「太平元（556）年…冬十一月乙卯，起雲龍神虎門」（『梁書』敬帝紀）の記事から「皇室」にかかわるといふ。南朝の建康城では、晋・齊・梁・陳代に台城の第2重宮牆の東面に雲龍門，西面に神虎門，北に玄武門が設けられている（『金陵古蹟図考』）。南朝帝陵の塼壁画の青龍・白虎も同様の思想にもとづくのであろう。

唐墓の構造と壁画 宿白〔1995〕は、魏晋南北朝墓制の分析をふまえ、西安地域の唐墓の等級制度を考察する。墓葬構造（塼室と土洞）、平面・墓室の規模、石槨・棺床の差異の要素から4類型に分ける。後室、後甬道、前室、前甬道、過道、斜坡墓道とよばれている。

I型 双室弧方形塼室墓（一品以上の皇室と重臣）

II型 単室弧方形或方形的塼室墓（一品〈一～三品〉から五品〈四・五品〉）

III型 単室方形土洞墓（五品以下）

IV型 単室長方形土洞墓（庶人）

北朝の墓制における形態分類と類似し、I・II型の塼室墓は基本的に、北朝から隋唐代に継承されたことがわかる。齊東方〔1990〕は、西安地区発見の2000余基の唐墓のなかで、双室塼室は、658年埋葬の尉達敬德墓から710年の李仁墓までの10基で、唐の等級制度が確立した高宗・中宗・睿宗時期に限定され、その官職は三品以上であることを指摘する。そのなかで、乾陵に陪葬された李謹行墓（682年）の壁画の有無は不明であるが、それいがい壁画墓である。

賀梓城〔1959〕では、1950年代に西安およびその周辺地域の開発にともなって発見・発掘された唐壁画8基の紹介と分析がなされている。未だ報告されていない墓が多いが、咸陽底張湾・張去奢墓の墓道にえがかれた長さ7～8mの青龍・白虎像などが報告された。

岡崎敬〔1987〕には、「唐，張九齡の墳墓とその墓誌銘」と「唐代壁画墓からみた高松塚古墳」がおさめられている。1962年段階での唐代壁画の集成がなされ、被葬者や副葬品の研究がなされた〔岡崎1962〕。また高松塚古墳をめぐるシンポジウムで、唐壁画について概観され、再集成もなされている〔岡崎1972〕。

町田章〔1987〕は、唐代壁画墓の墓室は「死者の生活するあの世」で、「地上に接する墓道口の守りは固く、青龍と白虎を先頭に、多くの武官を配置」したと解釈する。宿白〔1982〕の第2段階からはじまる「唐代らしい壁画墓の特色は神獸仙禽が極端に退けられて、ロマンに満ちた現実謳歌の図柄が増加し、官能的な女性像が増加している点にある。そして、墓主の官職や身分を誇示する文武官の儀仗や内廷における侍女あるいは侍従とともに生活を享樂する画面はあっても、個人の勲

功や生活を支える生産の場面は大きく脱落している」とかんがえる。なお高松塚古墳の四神は「南北朝や高句麗の作風によるものでなく、唐の作風を忠実に反映していること」を指摘する。

王仁波他 [1984] は、1984年段階で、陝西省内の唐墓24基の地名表が報告された。壁画題材や芸術風格の変化から、第1期唐高祖武徳から唐中宗景龍年間（618～709年）、第2期唐睿宗景雲～唐玄宗天寶年間（710～756年）、第3期至徳～唐末（756～907年）の画期にわけられる。墓道に描かれた青龍・白虎壁画墓は、675年から864年まで14基がある。

王仁波 [1989] は、さきの論攷をふまえ、隋唐壁画の題材を分類して考察する。

1. 儀仗（歩行儀仗隊、騎馬儀仗隊、車、馬、傘、馬と馬夫、駱駝と駱夫、戟架等）
2. 社会生活（唐代鴻臚寺官員、外国と国内少数民族賓客、男侍、女侍、楽舞、庭院行楽、馬毯、墓主人像、六鶴屏風等）
3. 狩獵（獵騎、架鷹、架鶴、馴豹等）
4. 生産（農耕、農牧）
5. 建築（闕、城牆、樓閣、仏寺、道觀と斗栱、柱、枋、平棊図案）
6. 星象（金烏、蟾蜍、銀河、星斗等）
7. 四神（青龍、白虎、朱雀、玄武）

唐中宗景龍年間（589～709）の壁画は、墓主人の生前の儀仗出行と狩獵活動を中心に表現し、宮廷生活と日常家居生活の各場面を描く。皇室成員の墓葬は、墓道両壁に青龍・白虎のほか、狩獵出行、儀仗出行、太子大朝儀仗（闕樓・城牆を背景とする）などの場面、文武官吏の墓葬は、青龍・白虎のほか、出遊・備騎出行と牛車、馬駱駝の儀仗隊などを描く。唐睿宗景雲～唐玄宗天寶年間（710～756）には、墓主人の生前の日常家居生活が中心となり、狩獵出行・儀仗出行などの場面は減少するととらえる。

今尾文昭 [1992] は、高松塚古墳の四神図像は静的で、高句麗古墳のばあいは「疾駆する動的な状態」ととらえ、唐壁画の四神図像と比較する。高松塚古墳の造営時期に、「都城の南に王陵・王族墓を営む思想と有力支配者層の理念の形成上に四神思想」が反映し、高松塚古墳のように、「四神思想を墓室（石槨）内に持ち込むという発案」は高句麗からの渡来人によるとかんがえる。

西嶋定生 [1993] は、「中国の古墓壁画は、死者が埋葬されている墓室が、現世の宇宙空間とは異なる別個の宇宙空間」であり、「死後の世界は生前の世界と同質であるという中国の死生観」が表現されているととらえる。唐代壁画の「墓道の入口の両側には、その東壁に青龍、西壁に白虎が画かれ、玄室の北壁には玄武、その南面にあたる羨道上壁に朱雀が画かれている。この四神図の配置は、外域から墓室に侵入するものを防ぐもの、すなわち辟邪の意を示すもの」である。「死者はその生前の世界と同じように侍者にかしづかれ、生前の身分や死後の贈位などによる死後の身分に応じて儀仗を飾り、車騎を飭えて出行し、歌舞・宴飲を楽しみ、狩獵・遊戯に興じるものと想定されていた」。高松塚壁画も現世と同じ死後の世界が表現されている [西嶋 1995]。

（2）隋唐壁画と高句麗

高句麗壁画と隋唐壁画の大きなちがいは、人物群像の有無である。四神思想と経世思想とのちがいとみえる。

壁画には、支配統治思想、他界観などが表現される。社会的な所産である。隋・唐と異なる独自の墓制が発達していたのである。壁画墳がきわめて政治的産物であることは、渤海の貞孝公主墓(792年)にみることができる。渤海は、高句麗滅亡後に、東北アジアで勃興した国であるが、高句麗族をふくむ多民族国家である。その壁画は、唐壁画の主題である人物像(侍従像)が描かれている。この点は高松塚古墳でも同様である。唐の影響のもとに人物群像が描かれている[東 1995]。

魏晋壁画では、墓主図像とともに、墓主の昇仙という思想が表現されている。

墓主図像は、魏晋や高句麗壁画において、5世紀初めには墓室の後(北)壁に表現されるようになる。その風習は北朝までつづき、その末期に屏風画として表現される(東八里窪墓)。やがて墓主図像(肖像)を描く伝統はとだえてゆく。

四神・畏獣図像 茹茹公主墓(550)では墓道に青龍・白虎・儀仗・戟架、墓室の四壁に墓主像と侍従群像という、のちの隋唐墓の壁画構成上の原形があらわれている。墓主の死後の世界における生活情景が表現されているのであるが、墓室の天井部(天界)には四神と山景文がえがかれ、昇仙思想と混淆している。それらの畏獣・神経像と墓室内の四神図像が消滅して唐様式の壁画に移す。中国壁画において、畏獣像は、6世紀末の隋李和墓(582)の石棺装飾の像をさかいに表現されなくなる。

さらに四神図像は、6世紀中葉の東魏の茹茹公主墓(550)や北齊の湾漳墓(560)から、墓道に表現されるようになる。隋墓では未出であるが、唐代では礼泉・長楽公主墓(643)において、青龍・白虎が墓道に表現されている。663年の新城長公主墓や667年の蘇定方墓などに継承されていく。7世紀中葉ごろに墓道内に青龍・白虎像がえがかれる。その青龍・白虎は墓主の死後の世界を守護する辟邪である。この7世紀中葉ごろは、壁画に表現された現象からみると、ひとつの画期と推定される。

いっぽう高句麗は、4世紀代には三燕と戦争をふくめた交通関係にあったが、5～6世紀代には、北朝と平和的な外交関係にあり、598～614年に対隋戦争、644～668年に対唐との戦争状況にはいる。北朝との対外関係のなかで、壁画のうえでも影響関係がみられた。ところが北朝末期から隋・唐にかけての国際環境において、帝陵の墓室装飾の変化の影響はうけずに、高句麗独自の壁画が表現されていた。それは王都を中心として、王陵の造営理念は四神思想で、その滅亡まで存続した。高句麗王権の統治思想であった。統治思想としての四神思想は、隋・唐との戦争のなかで、限界性をもっていたといえる。

高句麗の広大な領域の支配は、風水的・四神思想にもとづくイデオロギー的支配では敢行しえなかった。政治的・軍事的・経済的な国家機構の発展段階が問題となるであろう。

江西大墓(590年の平原王陵)と江西中墓(618年の嬰陽王陵?)壁画の四神の図像上の変化に、王の権力性がみられる。つまり壁画の図像に、高句麗王権、隋唐の国家権力を読みとろうとしているのである。

6世紀末から7世紀前半、飛鳥時代の日本列島には、高句麗そして百済から造寺・造仏、天文学、土木技術などが伝えられた。

四神思想とともに天文学も伝わり、天象列次分野之図のような天文図も高句麗からもたらされている[宮島一彦 1998]。

602年の「十年冬十月、百済僧觀勒來之。仍貢曆本及天文地理書并遁甲方術之書也」（『日本書紀』卷22、推古10年）と、百済からは觀勒によって天文学が流入している（『日本書紀』）。

百済においては、熊津時代時代の王陵は宋山里古墳群にある。始祖廟（陵）と推定される積石方壇の南面に宋山里壁画墳（四神壁画）や武寧王陵が築造されている。泗沘城時代では、王陵群は陵山里にあり、風水思想にもとづき造営され、近接して陵寺も建立されている。陵山里壁画墳（東下塚）には、四神・星宿図がえがかれ、威徳王陵（在位554～598年）と推定される。

このころ、百済から倭に仏教も伝来した。また553年に医博士・易博士・曆博士（『日本書紀』卷19、欽明14年）、554年に易博士施徳王道良、曆博士固徳王保孫（同欽明15年）がみえ、仏教などとともに天文学が伝えられている。

新羅においても天文学が発達していたが、新羅孝昭王元（692）年に「高僧道證自唐廻上天文図」と、唐の天文図も招来されている。

6世紀末から7世紀代の、古代東アジアにおける国際環境において、その唐・高句麗・百済・新羅・渤海・倭（日本）の壁画墳を比較すると、他界観・政治思想・国家体制などがかいまみられる。

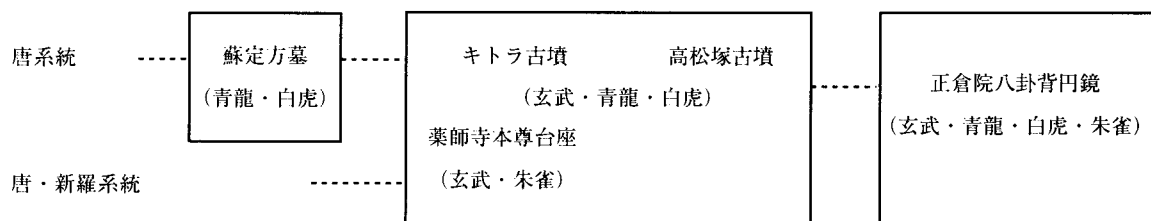
（3）キトラ古墳と高松塚古墳壁画の四神図像

高松塚古墳の四神図の系譜をめぐって、高句麗・百済・唐代の図像との比較が試みられてきた[末永雅雄 1975, 有光教一 1972, 渡辺明義 1984, 町田章 1987など]。

1998年のキトラ古墳の調査によって、北壁に玄武、東西壁に青龍・白虎、天井石の斜面の青龍上に日象と雲文、白虎上に月象と雲文、頂部に星宿図が確認された[相原嘉之・西光慎治 1998]、高松塚古墳の二基をあわせて、玄武像、さらに白虎・星宿図像、石槨構造、立地条件などを比較しえるようになった。

キトラ古墳の調査では、玄武・白虎図像はほぼ完存し、青龍の一部が確認された。玄武像は、キトラ・高松塚・薬師寺薬師如来台座図像、正倉院十二支八卦背円鏡と共通する。白虎像は、高松塚古墳と同様、尾が左後ろ脚にくぐるように表現されていることが図像解析のよって明らかにされた。それらの構図が、正倉院の十二支八卦背円鏡などの図像と類似することが指摘されている[井口喜晴 1997]。青龍像も、一部が撮影されただけであるが、高松塚古墳のものと類似する。高松塚・キトラ古墳の青龍・白虎像の構図が十二支八卦背円鏡など奈良時代のものに類似することから、その年代は8世紀以降ととらえられているようである。

ところが、同じ構図の白虎が、陝西省咸陽の唐の蘇定方墓（667年埋葬）にみられる。667年に埋葬されているが、そうした図像が7世紀後半までさかのぼる。



高松塚古墳とキトラ古墳の白虎・青龍図像は、6世紀末から7世紀前半代の高句麗の江西大墓や江西中墓、百済の陵山里壁画墳の画風と差異のみられることが明らかになった。

図像の構図、表現法などからみて、蘇定方墓→キトラ古墳→高松塚古墳・薬師寺如来台座→正倉院八卦鏡というように変容したようである。

正倉院十二支八卦背円鏡の四神図像は、和鏡であれば、キトラ・高松塚古墳の図像の粉本（原形）をもとに鑄造されたのであろう。その四神図像のなかで、青龍・白虎像が十二支の龍・虎と身体像の唐草装飾や尾の意匠構図が異なる。十二支像はいずれも疾走する姿態の表現である。四神図像は、四神図像としての基本形（原形）が意識されていたことをしめす。この円鏡は仿製鏡〔中野政樹 1978〕と推定されている。

薬師寺本尊台座の玄武像は、キトラ・高松塚古墳のものと類似するが、青龍・白虎像は異なる。薬師寺本尊の青龍は「角・頸部に隋唐的な様式をそなえ…頸部と尻部につく宝珠形の髭は比較的古い要素」である〔町田 1987〕。白鳳期に造られた仏像と推定される。

キトラ古墳の白虎像に、蘇定方墓のような唐の画風の影響がみられる。これらは7世紀後葉から8世紀初の白鳳期に共通するモチーフとして流行したのであろう。

これら四種の図像に共通性のみられることはたしかである。四神図像は、藤原京時代の「作殯宮」のような造墓（画師）集団によって、粉本（原本）が代々継承されたのであろう。

ところで、『日本書紀』には、671（斉明10）年3月に、黄書造（連）本実が水ばかりを献上し、その四月に漏剋が設置されたとみえる。その本実は、遣唐使に随行し、天智10年に帰国した。薬師寺の仏足石の図ももたらされている。また大宝2（702）年の持統喪儀の作殯宮司、慶雲4（707）年の文武の殯宮に供奉し、葬儀の御装司として、葬儀の威儀を司っていたという〔和田萃 1998〕。こうした職能からみて、黄文連本実、もしくはともに入唐した画師によって、670年前後に流行していた壁画構成や画風・画法が将来され、四神図像の粉本も入手していた可能性がつよい。

飛鳥時代において、高句麗・百済から四神思想、四神・星宿図像も流入していたのであろう。キトラ・高松塚古墳の墓室構造は百済の影響で形成されたものである。唐において、四神図像は7世紀後半以降、墓室内には表現されない。また宮廷儀礼など人物群像が描かれる。つまりキトラ古墳壁画に人物群像が表現されていないことは、四神図と天文図が一体となった百済・高句麗的な壁画の伝統であることをしめす。

それにたいして高松塚古墳では、四神図と人物図で構成されている。このふたつの古墳の壁画構成のちがいは看過しえない。わずか2基の対比によって、結論づけることはむずかしいが、四神図像が共通している点から考えて、人物像の有無は意味をもつとみられる。

このように、キトラ・高松塚古墳の壁画の基層には、高句麗・百済があり、それに唐の影響という二重構造となっている。キトラ・高松塚古墳の築造時期は、百済・高句麗の滅亡後の7世紀末から8世紀初めとかがえられる。その絶対年代は、被葬者の比定によるほかはない。

キトラ・高松塚古墳壁画には、日本と百済・新羅・高句麗・唐という東アジア世界における、さまざまな国際関係が表現されているといえる。

参考文献 (発行年代順)

- 関野貞他 1917 『朝鮮古蹟図譜』 3
関野貞 1930 『古蹟調査特別報告』 5
関野貞 1941 『朝鮮の建築と美術』
趙萬里 1954 『漢魏南北朝墓誌集釈』 (『考古学專刊乙種』 第2号)
常書鴻 1954 「從出土文物展覽看越的漢唐墓室壁畫」 (『文物參考資料』 1954-10)
祁英嬌・杜仙洲・陳明達 1954 「两年来山西省新發現的古建築」 (『文物參考資料』 1954-11)
陝西省文物管理委員會 1955 「西安任家口 M229号北魏墓清理簡報」 (『文物』 1955-12)
王子雲 1957 『中国古代石刻壁畫』
朝鮮民主主義人民共和國科学院考古学及民俗学研究所 1958 『大同江流域古墳發掘報告』 (『考古学資料集』, ピョンヤン)
楊富斗 1959 「山西曲沃泉泰村發現的北魏墓」 (『考古』 1959-1)
敖承隆 1959 「河北磁縣講武古墓清理簡報」 (『考古』 1959-1)
河南省文化局文物工作隊 1959 「1955年洛陽潤西区北朝及隋唐墓發掘報告」 (『考古學報』 1959-2)
陝西省文物管理委員會 1959 「西安羊頭鎮李爽墓的發掘」 (『文物』 1959-3)
陝西省文物管理委員會 1959 「西安南郊草場坡北朝發掘簡報」 (『考古』 1959-6)
李慶發 1959 「遼陽上王家村晋代壁畫墓清理簡報」 (『文物』 1959-7)
陝西省文物管理委員會 1959 「長安南里王村唐韋洞墓發掘記」 (『考古』 1959-8)
陝西省文物管理委員會 1959 「太原市金勝村第6号唐代壁畫墓」 (『考古』 1959-8)
賀梓城 1959 「唐代壁畫」 (『考古』 1959-8)
唐金裕 1959 「西安西郊隋李靜訓墓發掘簡報」 (『文物』 1959-9)
山西省文物管理委員會 1959 「太原市南郊金勝村唐墓」 (『文物』 1959-9)
甘肅省文物管理委員會 1959 「酒泉下河清第1号墓和第18号墓發掘簡報」 (『文物』 1959-10)
朝鮮民主主義人民共和國科学院考古学及民俗学研究所 1960 「安岳第1号及第2号墳發掘報告」 (『遺跡發掘報告』 4, ピョンヤン)
王增新 1960 「遼寧遼陽縣南雪梅村壁畫墓及び石墓」 (『考古』 1960-1)
陝西考古所唐墓工作隊 1960 「西安東郊唐蘇思昂墓清理簡報」 (『考古』 1960-1)
廣東省文物管理委員會ほか 1961 「唐代張九齡墓發掘簡報」 (『文物』 1961-6)
岡崎敬 1962 「唐, 張九齡の墳墓とその墓誌銘」 (『史淵』 89)
田崎農 1963 「伝東明王陵付近壁畫古墳」 (『考古学資料集』 3, 科学院出版社)
中国社会科学院考古研究所 (王世和・韓偉・賈瑞原) 1963 「陝西咸陽唐蘇君墓發掘」 (『考古』 1963-9)
陝西省文物管理委員會 1964 「永泰公主墓發掘簡報」 (『文物』 1964-1)
周到 1964 「河南濮陽北齊李雲墓出土的瓷器和墓誌」 (『考古』 1964-9)
陝西省文物管理委員會 1966 「陝西省三原縣雙盛村隋李和墓清理簡報」 (『文物』 1966-1)
河南省文化局文物工作隊 1966 「洛陽北魏長陵遺址調查」 (『考古』 1966-3)
中国社会科学院考古研究所 1966 『西安郊区隋唐墓』 (『中国田野考古報告集』 考古学專刊丁種18号)
長広敏雄 1969 『六朝時代美術の研究』 美術出版社
洛陽博物館 1972 「河南安陽北齊范粹墓發掘簡報」 (『文物』 1972-1)
陝西省博物館・乾縣文教局唐墓發掘組 1972 「唐章懷太子墓發掘簡報」 (『文物』 1972-7)
陝西省博物館・乾縣文教局唐墓發掘組 1972 「唐懿德太子墓發掘簡報」 (『文物』 1972-7)
陝西省博物館・礼泉縣文教局唐墓發掘組 1972 「唐鄭仁泰墓發掘簡報」 (『文物』 1972-7)
有光教一 1972 「高句麗壁畫古墳の四神図」 (『壁畫古墳高松塚』)
岡崎敬ほか 1972 「大陸裝飾墓との比較考察」 (末永雅雄・井上光貞編『朝日シンポジウム高松塚壁畫古墳』朝日新聞社)
安陽縣文教局 1973 「河南安陽縣清理一座北齊墓」 (『考古』 1973-2)
黎瑤渤 1973 「遼寧北票縣西官营子北燕馮素弗墓」 (『文物』 1973-3)
洛陽博物館 1973 「洛陽北魏元邵墓」 (『考古』 1973-4)
鎮江市博物館 1973 「鎮江東晋画像磚墓」 (『文物』 1973-4)
河北省博物館・文物管理处 1973 「河北平山北齊昂墓調查報告」 (『文物』 1973-11)
洛陽博物館 1974 「河南洛陽北魏元父墓調查」 (『文物』 1974-12)
末永雅雄 1975 「飛鳥の考古学遺跡と高松塚」 (『創立35周年記念 檀原考古学研究所論集』)
陝西省文物管理委員會・礼泉縣昭陵文管所 (王玉清・苟若愚) 1977 「唐阿史那忠墓發掘簡報」 (『考古』 1977-2)
石家莊地区革委會文化局文物發掘組 1977 「河北贊皇東魏李希宗墓」 (『考古』 1977-6)
磁縣文化館 1977 「河北磁縣東陳村東魏墓」 (『考古』 1977-6)
馬希桂 1977 「北京王府倉北齊墓」 (『文物』 1977-11)
大同市博物館・山西省文物工作委員會 1978 「大同方山北魏永固陵」 (『文物』 1978-7)
-

- 洛陽博物館・黃明蘭 1978 「北魏洛陽景陵位置的確定和靜陵位置的推測」(『文物』1978-7)
- 宿泊 1978 「北魏洛陽和北邙陵墓—鮮卑遺跡編錄之三」(『文物』1978-7)
- 磁県文化館 1979 「河北磁県北齊高潤墓」(『考古』1979-3)
- 王克林 1979 「北齊庫狄迴洛墓」(『考古學報』1979-3)
- 湯池 1979 「北齊高潤墓壁画簡介」(『考古』1979-3)
- 何直剛 1979 「河北景県北魏高氏墓發掘簡報」(『文物』1979-3)
- 吳福驥 1979 「酒泉, 嘉峪関晋墓的發掘」(『文物』1979-6)
- 張明川 1979 「酒泉丁家関古墓壁画藝術」(『文物』1979-6)
- 洛陽博物館 1980 「洛陽北魏画像石棺」(『考古』1980-3)
- 李殿福 1981A 「吉林集安洞溝三室墓清理記」(『考古与文物』1981-3)
- 李殿福 1981B 「集安洞溝三室墓壁画著錄補正」(『考古与文物』1981-3)
- 関天相 1981 「山東嘉祥英山1号隋墓清理簡報」(『文物』1981-4)
- 姚遷・古兵 1981 『六朝芸術』文物出版社
- 陳相偉・方起東 1982 「集安長川1号壁画墓」(『東北考古与歴史』1982-1)
- 宿泊 1982 「西安地区唐墓壁画的布局和内容」(『考古學報』1982-2)
- 楊正興 1983 「乾陵石刻中的線刻図」(『考古与文物』1983-1)
- 山西省考古研究所・太原市文物管理委員会 1983 「太原市北齊婁叡墓發掘簡報」(『文物』1983-10)
- 磁県文化館 1984 「河北磁県東魏茹茹公主墓發掘簡報」(『文物』1984-4)
- 湯池 1984 「東魏茹茹公主墓壁画試探」(『文物』1984-4)
- 李慶發 1984 「朝陽袁台子東晋壁画墓」(『文物』1984-6)
- 王仁波・河修齡・单章 1984 「陝西唐墓壁画之研究上」(『文博』1984-1)
- 王仁波・河修齡・单章 1984 「陝西唐墓壁画之研究下」(『文博』1984-2)
- 朱全昇 1984 「河北磁県東陳村北齊堯陵墓」(『文物』1984-4)
- 渡辺明義 1984 「画題とその意味」(『高松塚古墳』『日本の美術』217, 至文堂)
- 森貞次郎 1985 『裝飾古墳』教育社
- 貞安志・王学里 1985 「唐司馬睿墓清理簡報」(『考古与文物』1985-1)
- 金日成総合大学(呂南喆・金洪圭訳) 1985 『五世紀の高句麗文化』雄山閣出版
- 遼寧省博物館 1985 「遼陽旧城東門里漢壁画墓發掘報告」(『文物』1985-6)
- 済南市博物館 1985 「済南市馬家庄北齊墓」(『文物』1985-10)
- 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館 1985 「寧夏北周李賢夫婦墓發掘簡報」(『文物』1985-11)
- 傅熹年 1986 「唐代隨造型墓形制構造和所反映的地下宮室」(『文物与考古論集』文物出版社)
- 小泉顕夫 1986 『朝鮮古代遺跡の遍歴—發掘調査三十年の回想』六興出版
- 町田章 1987 『古代東アジアの裝飾墓』同朋舎出版
- 黃明蘭 1987 『洛陽壁頭世俗石刻線画集』人民美術出版社
- 劉中澄 1987 「関朝陽袁台子墓晋壁画の初步研究」(『遼寧文物學刊』1987-1)
- 咸陽市文管会・咸陽博物館 1987 「咸陽市故家溝西魏侯義墓清理簡報」(『文物』1987-12)
- 張小舟 1987 「北方地区魏晋十六国墓葬的分区与分期」(『考古學報』1987-1)
- 昭陵博物館 1988 「唐昭陵長楽公主墓」(『文博』1988-3)
- 王樹村 1988 「中国石刻線画略史」(『中国美術全集』絵画編19 石刻線画)
- 鄧明文 1988 「裝飾画 石棺」(『中国美術全集』絵画編19 石刻線画)
- 山西省考古研究(寧立新・馬升) 1988 「太原市南郊唐代壁画墓清理簡報」(『文物』1988-12)
- 昭陵博物館 1988 「唐安元中寿夫婦墓發掘簡報」(『文博』1988-12)
- 林巳奈夫 1989 『漢代の神神』臨川書店
- 邱玉鼎・佟佩華 1989 「済南市東八里窪北朝壁画墓」(『文物』1989-4)
- 張力光・王九剛 1989 「長安県南里王村唐壁画墓」(『文物』1989-4)
- 王育龍 1989 「西安南郊唐韋君夫人等墓清理簡報」(『考古与文物』1989-5)
- 昭陵博物館 1989 「唐昭陵段簡壁画墓清理簡報」(『文博』1989-6)
- 湯池 1989 「魏晋南北朝墓室壁画」(『中国美術全集』絵画編12 墓室壁画)
- 吳福驥 1989 『酒泉十六国墓壁画』文物出版社
- 斎藤忠 1989 『壁画古墳の系譜』(『日本考古学研究』2, 学生社)
- 李蘭映 1989 『新羅の土偶』国立慶州博物館, 慶州
- 安靜地 1990 「唐房齡大長公主墓發掘簡報」(『文博』1990-1)
- 劉謙 1990 「錦州北魏清理簡報」(『考古』1990-5)
- 中国科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作隊 1990 「河北臨淄鄴北城遺址勘探發掘簡報」(『考古』1990-7)
- 陝西省考古研究所 1990 「長安県北朝墓清理簡報」(『考古与文物』1990-5)

- 齊東方 1990 「略西安地区発現的唐代双室磚墓」(『考古』1990-9)
- 高崎市教育委員会他編 1990 「中国山西北朝文物展図録」
- 董高 1991 「朝陽北塔“思燕仏図”基址考」(『遼海文物學刊』1991-1)
- 陳安利・馬咏鐘 1991 「西安王家墳唐代唐安公主墓」(『文物』1991-1)
- 徐光冀 1992 「業城跡の近年の調査成果と北朝大型壁画墓の発見」(『考古学研究』38-4)
- 蘇哲 1992A 「日本藤之木古墳出土馬具紋飾初探」(北京大学考古系編『考古学研究(1)』文物出版社)
- 蘇哲 1992B 「東魏北齊壁画墓の等級差別と地域性」(『博古研究』4)
- 今尾文昭 1992 「高松塚古墳四神をめぐる動静—中国・朝鮮の壁画墓から感じること—」(『高句麗の都城遺跡と古墳』同朋舎出版)
- 河野道房 1993 「北齊婁叡墓壁画考」(『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所)
- 西嶋定生 1993 「中国の古墓壁画と日本の装飾古墳」(『装飾古墳の世界』国立歴史民俗博物館)
- 咸陽市渭城区文管会 1993 「咸陽市渭城区北周拓跋虎夫婦墓清理記」(『文物』1993-11)
- 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊・洛陽古墓博物館 1994 「北魏宣武帝景陵発掘報告」(『考古』1994-9)
- 東 潮 1995 「古代朝鮮の古墳壁画と装飾古墳」(国立歴史民俗博物館編『装飾古墳が語るもの』吉川弘文館)
- 西嶋定生 1995 「中国の墳墓壁画との比較からみた日本の装飾古墳」(『装飾古墳が語るもの』吉川弘文館)
- 江達煌 1995 「磁県漳潭墓北朝大墓墓主試析」(『魏晋南北朝学会』)
- 宿白 1995 「西安地区的唐墓刑制」(『文物』1995-12)
- 南秀雄 1995 「高句麗古墳壁画の図像構成—天井壁画を中心に—」(『朝鮮文化研究』2)
- 孫機 1996 「唐李寿石槨線刻《侍女図》、《樂舞図》散記(上)」(『文物』1996-5)
- 宿白 1996 「関于北四処古墓の札記」(『文物』1996-9)
- 俞偉超 1996 「中国古墓壁画内容変化的階段性—《河北古代墓葬壁画精粹展》座談会上的發言提綱」(『文物』1996-9)
- 徐萃芳 1996 「看《河北古代墓葬壁画精粹展》札記」(『文物』1996-9)
- 黄景略 1996 「古代墓葬壁画的縮影」(『文物』1996-9)
- 徐光冀 1996 「河北磁県漳潭北朝大型壁画墓的発掘与研究」(『文物』1996-9)
- 湯池 1996 「磁県発現東魏北齊大型壁画墓的啓迪」(『文物』1996-9)
- 董高 1996 「三燕仏教略考」(『遼海文物學刊』1996-1)
- 郎成剛 1996 「朝陽北塔三燕礎石考」(『遼海文物學刊』1996-1)
- 李新全 1996 「三燕瓦当考」(『遼海文物學刊』1996-1)
- 東 潮 1997 『高句麗考古学研究』吉川弘文館
- 磁県文物保管所 1997 「河北磁県北齊元良墓」(『考古』1997-3)
- 陝西省考古研究所・咸陽市考古研究所 1997 「北周武帝孝陵発掘簡報」(『考古与文物』1997-2)
- 谷一尚 1997 「寧夏固原原州遺跡の発掘調査」(『日本中国考古学会会報』7)
- 礪波護 1997 「兩晋時代から大唐世界帝国へ」(『世界の歴史』6, 中央公論社)
- 大形徹 1997a 「四神考—前漢、後漢期の資料を中心として—」(『人文学論集』15)
- 大形徹 1997b 「張目吐舌考—悪霊との関連から—」(『大阪府立大学紀要』45)
- 大形徹 1997c 「蛇と悪霊の関係について—新出土資料の蛇をめぐる—」(『中国出土資料研究』創刊号, 中国出土資料研究会)
- 井口喜晴 1997 「正倉院宝物と奈良朝の意匠—海を渡った龍の文様について—」(『帝塚山大学考古研究所市民大学講座』発表資料)
- 橋口いずみ 1998 『中国墓室壁画研究—画題の特徴とその背景』徳島大学総合科学部卒業論文
- 和田萃 1998 「高松塚古墳(覚書き)」(『古代学研究』140)
- 相原嘉之・西光慎治 1998 「キトラ古墳の調査について」(『考古学ジャーナル』432)
- 宮島一彦 1998 「キトラ古墳天文図と東アジアの天文図」(『東アジアの古代文化』97)

(徳島大学総合科学部, 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)

Mural Paintings of Northern Dynasty, Sui, and Tang China and Koguryo, Korea

AZUMA Ushio

This paper traces changes in the structure of painted stone burial chambers and the spatial compositions of their mural paintings in ancient East Asia, particularly those of Koguryo, and the three polities of Yan, Northern Dynasty, Sui and Tang of China. Analyses focus on spaces represented by the four directional deities and other monsters as well as changes in pictorial representations of these figures. By classifying the Koguryo pictorial representations of mythical figures into demonic figures, wrestlers, and guards, and by paying attention to their morphological changes, it is possible to point out how the Koguryo mural paintings are related to those of the Northern Dynasty of China, probably as a result of international interactions.

The four directional deities painted in the Koguryo tombs may be a reflection of the ruling, political philosophy in Koguryo. After the middle sixth century, the tombs were constructed under a rigid plan so that they could conform with geographical conditions as defined by *Feng-sui* philosophy.

Figures of foreigners painted in tombs of Koguryo, and Northern Dynasty, Sui, and Tang China between the fourth and eighth centuries clearly indicate that international interactions took place at that time. I argue further that they were a symbolic representation of the quelling of Evil in western Asia. I also suggest that a demonic figure in the Tongjiang Tomb was a symbolic representation of the quelling of Evil.

A comparison of the numerous attributes of mural paintings in different regions suggests that representations of the four directional deities and court rituals depicted in Princess Ruru's tomb of Eastern Wei were a prototype of early Tang mural pictorial representations. Starting in the middle seventh century, the four directional deities in Sui and Tang China came to be depicted in the corridors leading to the main burial chamber, rather than in the chambers themselves. I also make some remarks on possible relationship between the four directional deities of Sui, Tang, and Koguryo and those of the Kitora and Takamatsuzuka tumuli in Nara, Japan.

北朝・隋・唐壁画墓地名表

墳墓 番号	遺跡	没年	埋葬 年代	所在地	墓主・身分	構造・規模	墓 道		過道	天井	甬道
							東壁	西壁			
1	北陳村壁画墓		北魏	陝西・洛陽							
2	東八里窪墓		北齊	山東・濟南	士大夫階層	板石築穹窿單室墓 全長10.8m					侍女, 屏風画
3	侯義墓		544	陝西・咸陽	侯義(太師開府參 軍事)	穹窿單室土洞墓 全長7.8m~					花樹, 人馬, 弧線
4	封思温墓		546	河北・吳橋	封思温	單室塋墓 全長30.2m					
5	東陳1号墓		547	河北・磁県	堯氏(趙郡君)	單室塋墓 全長36.6m					
6	高長命墓		548	河北・景県	高長命(北齊雍州 刺使)	塋築双室墓 全長6.5m~					
7	茹茹公主墓		550	河北・磁県	茹茹公主	土洞穹窿單室塋墓 全長34.9m	青龍, 儀仗隊, 羽人, 方相氏, 鳳凰	白虎, 儀仗隊, 羽人, 方相氏, 鳳凰	草花文		侍衛, 忍冬唐草文 摩尼宝珠, 火焰
8	崔芬墓		551	山東・臨朐	崔芬(威烈將軍行 台府長史)	石築穹窿單室墓 全長3m					
9	湾漳墓		560	河北・磁県	武寧陵?	穹窿單室土洞墓 全長52m	朱雀, 神獸, 青龍 儀仗隊, 蓮花, 流雲	白虎, 儀仗隊, 建築, 流雲文	忍冬文		朱雀, 神獸, 流雲, 侍女, 蓮華, 流雲
10	庫狄迴洛墓		562	山西・寿陽	庫狄迴洛(北齊貴 族)	穹窿單室塋墓 全長21m					男侍
11	崔昂墓		566	河北・平山	崔昂(祠部尚書趙 州刺使)	穹窿單室塋墓 全長20m					
12	堯峻墓		567	河北・磁県	堯峻(母趙南陽郡 君)	穹窿單室塋墓 全長22.8m					羽人, 朱雀, 雲文, 蓮華
13	李賢夫婦墓		569	寧夏・固原	李賢(北周柱国大 將軍 大都督)	穹窿土洞單室墓 全長48.1m	武士	武士	武士 双層門樓	武士	双層門樓
14	婁叡墓		570	山西・太原	婁叡(東安王朔州 刺使)	土洞穹窿單室塋墓 全長32.5m	出行, 軍樂儀仗	婦來囡, 軍樂儀仗			軍樂儀仗, 門衛儀仗 蓮花, 蓮座, 摩尼宝
15	茫粹墓		575	河南・安陽	茫粹(驃騎大將軍, 開 府儀同三司, 涼州刺使)	穹窿單室土洞墓 全長14.7m					
16	顏玉光墓		576	河南・安陽	顏玉光(北齊高洋 文宣帝妃)	單室土洞墓 全長6.0m~					
17	高潤墓		577	河北・磁県	高潤(北齊皇族)	穹窿單室塋墓 全長63.2m	忍冬蓮華文	忍冬蓮華文			
18	講武城56号墓		北齊	河北・磁県		穹窿單室塋墓					
19	張道貴墓		北齊	山東・濟南	張道貴(阿県令)	石築單室墓 全長9.7m					獸
20	王府倉北齊墓		北齊	北京・王府倉		穹窿單室塋墓 全長3.3m~					
21	金勝村北齊壁 画墓		北齊	山西・太原 金勝村		穹窿單室塋墓 全長5.7m~					
22	李和墓		582	陝西・三原	李和	穹窿單室土洞墓 全長37.6m				男女侍	
23	英山1号墓		584	山東・嘉祥	徐敏行夫婦	穹窿單室塋墓 全長9.6m					門衛
24	呂武墓		592	陝西・西安	呂武(大都督左親 衛軍騎將軍)	單室土洞墓 全長23.2m					
25	李静訓墓		608	陝西・西安	李静訓(左祿大夫 女)	單室土洞墓 全長12m					
26	史射勿墓		609	寧夏・ 回族自治州	史射勿(正議大夫 右領軍驃騎將軍)	單室土洞墓 全長29m	武士	武士	武士, 執笏 男侍, 家屋	武士, 男侍	
27	金勝村3号墓		初唐	山西・太原		穹窿單室塋墓 全長11.2m					
28	金勝村4号墓		初唐	山西・太原		穹窿單室塋墓 全長5.06m~					
29	金勝村5号墓		初唐	山西・太原		穹窿單室塋墓 全長4.6m~					
30	金勝村6号墓		唐	山西・太原		穹窿單室塋墓					

墓 室					石刻	文献
東壁	西壁	北壁	南壁	頂部		
帷屋・帷幕, 墓主坐像, 侍女, 童子, 山岳文, 扶桑樹						
竹林七賢飲酒作樂 (屏風画)						文物1989-4
				星宿		文物1987-12
						考古通訊1956-6
紅・黒・緑・黄の彩色痕	赤・黒・緑・黄の彩色痕	赤・黒・緑・黄の彩色痕	赤・黒・緑・黄の彩色痕			考古1977-6
						文物1979-3
青龍, 男侍	白虎, 侍女	玄武, 侍女, 墓主人	朱雀	四神, 山川林木		文物1984-4
日, 羽人, 騎龍仙人, 方相氏, 屏風画延長	月, 虎, 仙人, 方相氏, 墓主夫婦行・昇天・侍女, 屏風画	玄武, 神人, 方相氏, 山岳樹木, 人物, 樹石 (屏風画)	朱雀	星宿		中国美術全集19
動物, 神獸, 墓主	動物	動物	動物	星宿, 銀河		考古1990-7
十字形図案		十字形図案	十字形図案			考古学報1979-3
人物, 鳥獸	人物, 鳥獸	人物, 鳥獸	人物, 鳥獸		石門 (卷草文)	文物1973-11
						文物1984-4
侍女伎楽	侍女伎楽図	侍女伎楽図	侍女伎楽図			文物1985-11
青龍, 雷神	白虎	玄武		日, 月, 十二支		文物1983-10
黒線痕		黒線痕				文物1972-1
	騎馬武士, 抱嬰兒婦女	騎馬武士, 鷹	男女侍			考古1973-2
牛車出行図	侍従	墓主人臨終・侍従哀悼図				考古1979-3
人物, 車, 樹, 蓮花						考古1959-1
儀衛, 馬と馬夫	墓主婦人車馬出行・侍女	山岳流雲・墓主・奏事吏 (屏風画)	門衛	日, 月, 星宿		文物1985-10
紅・黒・緑色線痕	紅・黒・緑色線痕	紅・黒・緑色線痕	紅・黒・緑色線痕			文物1977-11
騎駕青龍仙人, 引導羽人, 男子 (屬吏館客)	上部: 騎虎仙人, 怪獸, 宝相花, 牛車, 男女侍	屏風の前に座る墓主・侍女, 男侍		星宿		文物1990-12
枯樹, 築山	枯樹, 築山	枯樹, 築山	枯樹, 築山		石門 (衛士, 忍冬文) 石棺 (人物, 飛天, 四神)	文物1966-1
墓主夫人出遊, 侍女, 安車双犬, 青龍	墓主出行, 白虎	墓主夫婦饗宴, 山水屏風, 牽馬, 男侍	武士像 (門衛), 奔馬, 侍者	星宿, 日象, 月象 (桂樹・玉兔)	石門 (翼龍, 蓮台, 火焰, 宝珠, 怪獸)	文物1981-4
						西安郊区隋唐墓1966
					石棺外面 (四神, 男女侍)	唐長安城郊隋唐墓1980, 考古1959-9
人物画	侍女					固原南郊隋唐墓地1996, 文物1992-10
						考古1960-1
侍女, 樹下老人 (屏風画)	侍女, 樹下老人 (屏風画)	樹下老人 (屏風画)	門衛	四神		考古1959-9
樹下老人 (屏風画)	樹下老人 (屏風画), 牛車, 車夫	樹下老人 (屏風画)	馬, 駱駝, 馬夫			考古1959-9
建物	建物	建物	建物	四神図, 蓮華文, 流雲文, 雲文, 日, 月, 星宿		文物1959-8

墳墓番号	遺跡	没年	埋葬年代	所在地	墓主・身分	構造・規模	墓道		過道	天井	甬道
							東壁	西壁			
31	金勝村337号墓		初唐	山西・太原		穹窿単室墳墓 全長4.3m～					
32	大原南郊唐代壁画墓		初唐	山西・太原		穹窿単室墳墓 全長5.9m					
33	李寿墓		630	陝西・三原	司空(正一), 淮安郡主(従一)	穹窿単室土洞墓 全長44m	飛天引導, 出行, 騎馬出行	飛天, 狩獵, 騎馬出行	步衛, 重樓, 建祭	列戟, 農耕, 鍛冶, 樂舞	飛天, 侍女, 武士, 文史, 寺院, 道觀
34	長楽公主墓	643		陝西・礼泉	太宗李世民第五女	土洞有龕単室墳墓 全長48.2m	青龍, 車馬, 儀衛	白虎, 車馬, 儀衛	門闕	儀衛, 男侍	蓮華文
35	司馬睿墓	649		陝西・西安	太子左内率	有龕墓道土洞墓 全長約20m	建築	建築			
36	段簡壁墓	651		陝西・礼泉	太宗李世民の外甥女	土洞穹窿単室墳墓 全長46.2m			男侍	列戟, 女侍	
37	冉仁才墓	652	654	四川・万県	使持節永州刺史	有耳室甬道・有耳室墓, 全長8.4m					青龍, 白虎, 星宿
38	張士貴墓	657	65	陝西・礼泉	張士貴(左領軍大將軍虎国公)	土洞穹窿単室墳墓 全長57m					
39	尉遲敬德墓	658	65	陝西・礼泉	尉遲敬德(開府儀同司鄂国公)	土洞穹窿双室墳墓 全長56.3m					
40	執失奉節墓		658	陝西・西安	執失奉節(常楽府県殺)						
41	新城長公主墓	663		陝西・礼泉	新城公主(高宗皇帝同母妹)	土洞穹窿単室墳墓 全長約50m	青龍, 儀仗出行, 樓閣	白虎, 儀仗出行	男女侍, 平棋圖案	列戟, 男女侍, 宝相文	侍女, 平棋圖案, 花卉, 火焰
42	鄭仁泰墓	663	664	陝西・礼泉	鄭仁泰(右武衛大將軍涼州都督)	穹窿双室土洞墓 全長53m	馬・駱駝牽引図, 儀仗隊, 男侍	牛車, 儀仗, 男女侍, 儀仗隊			
43	李震墓		665	陝西・礼泉	李震(梓州刺史)				戲鴨侍女		
44	蘇定方墓	667	667	陝西・咸陽	蘇定方(左驍騎大將軍邢国公)	土洞穹窿双室墳墓 全長73m	青龍, 馬, 男侍	白虎, 馬, 男侍	男侍, 樓閣, 建築	男侍, 儀仗架, 馬車	
45	李爽墓		668	陝西・西安	李爽(司刑太常伯)	土洞穹窿単室墳墓 全長24.5m	武士	武士			属史, 侍女
46	李勣墓		670	陝西・礼泉	李勣(司空上柱国曹国公右武侯大將軍)						
47	房陵大長公主墓		673	陝西・富平	大長公主(唐高祖李淵第六女)	土洞穹窿双室墓 全長57.8m				侍女	侍女
48	李鳳墓		675	陝西・富平	李鳳(司徒, 炎王)	土洞穹窿単室墳墓	儀仗隊		駱駝, 蓮華文, 忍冬唐草文	忍冬唐草文	侍女, 男装侍女, 花文
49	阿史那忠墓		675	陝西・礼泉	阿史那忠(鎮軍大將軍荊州大都督上柱国)	土洞穹窿単室墳墓 全長55m	青龍, 馬, 駱駝, 儀仗隊	白虎, 牛車, 御者	男女侍, 樓閣, 男侍	六戟架, 男女侍	
50	安元寿墓	683	684	陝西・礼泉	右威衛將軍上柱国	双室墳墓 全長60.2m		花文	女侍, 童侍		
51	李徽墓		684	湖北・鄖県	李徽(太宗孫, 濮王李泰次子, 新安郡王)	穹窿単室墳墓 全長13.8m～					男侍
52	薛元超墓	684	685	陝西・西安	薛元超(太常少卿薛収の子)	単室墓					執擯人物, 荇葦, 船, 侍女
53	閻婉墓		690	湖北・鄖県	閻婉(濮王李泰妃, 李徽の母)	穹窿単室墳墓 全長約21.5m					男侍
54	金郷県主墓		690	陝西・西安	金郷県主(唐高宗李淵孫, 滕王李元婴第三女)	単室土洞墓 全長約43m～			牽駝出行図, 侍女	牽駝出行図, 侍女	男侍, 頂部, 星宿
55	趙澄之墓		696	太原・董茹荘	大周趙君墓						
56	梁元珍墓		699	寧夏・回族自治区	梁元珍	土洞穹窿単室墳墓 全長23.9m				牽馬	牽馬
57	懿德太子墓	701	706	陝西・乾県	李重潤(中宗長子)	土洞穹窿双室墳墓 全長100.8m	青龍, 儀仗隊, 樓閣	白虎, 儀仗隊, 樓閣	馴豹, 架鷹, 男女侍, 花文, 河女, 架鷹	列戟	宮女, 雲鶴, 花文
58	永泰公主墓	701	70	陝西・乾県	李仙(中宗第三女)	土洞穹窿双室墳墓 全長87.5m～	武士, 青龍, 樓閣, 儀仗隊, 戟架	武士, 白虎, 樓閣, 儀仗隊, 戟架	宝相花, 平棋圖案	人物画	人物, 花草, 築山, 平棋圖案, 雲鶴
59	章懐太子墓	684	70	陝西・乾県	李賢(高宗と則天武后の第二子)	土洞穹窿双室墳墓 全長71.0m	青龍, 儀仗隊, 客使, 出行	白虎, 儀仗隊, 客使, 馬毯			男侍, 侍女
60	韋洞墓	692	708	陝西・長安	韋洞墓(衛尉卿, 淮陽郡王)	土洞穹窿双室墳墓 全長31.3m	青龍, 朱雀	白虎, 朱雀			人物脚部
61	薛氏墓	710	710	陝西・咸陽	薛氏(万泉県主大平長公主第二女)		青龍	白虎	牽馬侍者, 門樓, 建築	五戟架, 人物	女侍, 架鷹侍者

墓 室					石刻	文献
東壁	西壁	北壁	南壁	頂部		
侍女, 樹下老人	侍女, 樹下老人	樹下老人	門衛	四神, 日, 月, 星宿		文物1990-12
侍女, 樹下老人	侍女, 樹下老人	駱馬人物出行帰来, 樹下老人	侍衛	日, 月, 星宿, 四神, 花文, 連珠文		文物1988-12
忍冬唐草文, 飛天	馬小屋, 餅小屋, 男 撲	庭園, 列戟, 門衛, 侍女, 樂舞	侍女		石門(朱雀, 武士), 石棺 (四神, 仙人, 女侍樂舞)	文物1974-9
	斗供	斗供		星宿		文博1988-3
						考古与文物1985-1
					楣石(朱雀, 門扇, 四神, 怪獸)	文博1989-6
	星宿					考古学報1980-4
					石門(花文, 男女侍)	考古1978-3
					石門(朱雀, 卷草文, 侍衛)	文物1978-5
		舞女				文物1959-8
侍女	侍女	侍女	侍女	日, 月, 銀河	墓門(鳳凰, 雲文, 山樹, 連珠文, 花文, 飛龍, 天 馬, 辟邪)	考古与文物1997-3
						文物1972-7
						福岡市博物館図録 1992
				日, 月, 星宿, 銀河		考古1963-9
女侍, 男樂人	男女侍	女侍, 女樂人	人物画			文物1959-3
		樂舞図				福岡市博物館図録 1992
侍女	侍女	侍女	前後室: 侍女			文博1990-1
				日, 月, 星宿, 銀河, 雲文		考古1977-5
						考古1977-2
					石門兩壁(侍女)	考古与文物1988-12
男女侍	花卉(屏風画)	花卉(屏風画), 男侍 馬		星宿, 蟾蜍		文物1987-8
	官吏					考古与文物1983-6
侍女				星宿		文物1987-8
	侍女		侍女			文物1997-1
侍女	侍女	樹下老人	門衛			文物参考資料1954 -11・12
男女侍, 枯樹, 執笏 侍者	樹下老人(屏風画)	樹下老人(屏風画)	執笏侍者	日, 月, 星宿, 銀河		固原南郊隋唐墓地1996, 1996, 文物1993-6
宮女, 技樂, 宮女	宮女	宮女	宮女	銀河, 星宿		文物1972-7
侍女	前室: 侍女	樂隊	執笏侍者, 男女侍	日, 月, 星宿	石槨(男侍, 侍女) 石門(男女侍, 花鳥)	文物1964-1
樂器を持つ侍女	宮女(觀鳥捕蟬), 侍女	侍女, 男装侍女	侍女		石槨(朱雀, 男女侍) 石門(朱雀, 獅子)	文物1972-7
花卉鳥類	花卉鳥類, 侍女	花卉鳥類, 男女侍		雲鶴		文物1959-8
	侍女, 花鳥	獅子				文物1959-8

墳墓番号	遺跡	没年	埋葬年代	所在地	墓主・身分	構造・規模	墓道		過道	天井	甬道
							東壁	西壁			
62	李仁墓	707	710	陝西・西安	李仁(唐成王)	土洞双室墳墓 全長16.4m					
63	楊思勗墓		720	陝西・西安	楊思勗(驃騎大將軍)	单室墳墓 全長5.7m~					
64	李欣墓		724	湖北・鄖県	李欣(神堯皇帝曾孫太宗文武聖皇帝孫)	土洞穹窿单室墳墓 全長15.8m~					
65	薛莫墓	727	728	陝西・西安	薛莫(右驍騎大將軍,雁門県公)	单室墳墓 全長9.3m	青龍,男女侍,雲鶴	白虎,男女侍			
66	馮君衡墓		729	陝西・西安	馮君衡(潘州刺史)			人物画			
67	張九齡墓	740	740	広東・韶関	張九齡(玄宗代・中書令)	穹窿单室墳墓 全長8m					侍女蟠桃園
68	豆盧氏墓		740	河南・洛陽	豆盧氏(唐睿宗貴妃)	土洞穹窿单室墳墓 全長22.3m		侍女,花草			男侍,侍女,雲鶴
69	韋君夫人墓	740	742	陝西・長安	韋君夫人	土洞室墓 全長約23m	青龍,男侍	白虎,男侍	牽馬,牽駱駝男侍,牛車		男侍
70	宋氏墓		745	陝西・西安	宋氏(内侍雷府君夫人)	单室土洞墓 全長7m~					
71	蘇思勗墓		745	陝西・西安	蘇思勗(銀青光祿大夫行内侍省内侍員外)	土洞穹窿单室墳墓 全長13.7m					男女侍,担架人物像
72	雷府君夫人墓		745								
73	張去奢墓		747	陝西・咸陽	張去奢(唐少府監)		青龍	白虎			
74	張去逸墓		748	陝西・咸陽	張去逸(銀青光祿大夫太僕卿上柱国)		青龍	白虎			武士,侍女,牛
75	吐番阿斯塔那墓	盛唐中唐		新疆ウイグル自治区・吐番		土洞穹窿双室墓					
76	富平県唐墓	盛唐		陝西・富平		穹窿单室墓 全長4m~					
77	金勝村6号墓	盛唐		山西・太原		穹窿单室墳墓 全長4.4m					
78	史索岩夫婦墓	盛唐		寧夏・回族自治区	史索岩夫婦	土洞穹窿单室墳墓 全長41.8m			朱雀,蓮華		
79	高元珪墓		756	陝西・西安	高元珪(明威將軍)		青龍	白虎		騎馬侍衛	侍女
80	韓氏墓		765	陝西・西安	韓氏(揚州大都督府司馬吳賁)	土洞穹窿单室墓 全長10.1m					馬蹄
81	唐安公主墓		784	陝西・西安	唐安公主(唐德宗長女,皇太子李誦の妹)	土洞穹窿单室墳墓 全長8.2m~					男女侍
82	王邳夫婦墓		784	河北・北京							
83	邾国大長公主墓		787	陝西・西安	邾国大長公主(肅宗第四女,下嫁張清)		青龍	白虎	男侍	牽馬侍者,侍女	
84	董檀墓		807	陝西・西安	董檀(蘇州長史)	土洞单室墓 全長20.1m					
85	姚存古墓		835	陝西・西韓	姚存古(長城県開国主,上柱国)		青龍	白虎			侍者
86	梁元翰墓		844	陝西・西安	梁元翰(桂管監軍使太中大夫,上柱国)						
87	八里庄唐墓		846	北京・海淀区	王公淑(銀青光祿大夫)	单室墳墓 全長7.4m					
88	高克從墓		847	陝西・西安	高克從(義昌軍監軍使官宦高力市五世孫)						
89	楊玄略墓		864	陝西・西安	楊玄略墓(銀青光祿大夫行上柱国開国侯)		青龍	白虎			
90	錢寬墓		900	浙江・臨安	錢寬	多耳室墳墓 全長6.8m					
91	李貞墓		718	陝西・礼泉	李貞(李世民第八子)	土洞穹窿单室墳墓 全長46.1m					

墓 室					石刻	文献
東壁	西壁	北壁	南壁	頂部		
					石門 (双鳳, 卷草花文, 武士, 流雲文)	西安郊区隋唐墓1966
					石槨外面 (建築, 畏獸雲文)	唐長安城郊隋唐墓1980
						江漢考古1980-2
人物画	人物画	人物	人物	星宿		考古通訊1956-6
馬						文物1959-8
青龍	侍女					文博1961-6
			侍女, 花草文			文物1995-8
痕跡	痕跡					考古与文物1989-5
楽人, 舞女, 青龍	墓主人					考古通訊1957-5
舞楽図, 楽器を奏する男侍	人物6幅 (屏風画)	玄武, 男女侍, 男装女侍	朱雀	日, 月, 星宿	石門 (侍衛, 男侍)	考古1960-1
						考古通訊1957-5
						文物1959-8
男女楽隊, 絨毯	武士, 侍女	執笏人物				文物1959-8
前室上部: 飛鶴, 草花図案, 乘駕鶴童子	前室上部: 飛鶴, 草花図案, 乘駕鶴童子	飛鶴, 草花文, 乘駕鶴童子, 墓主, 侍者	前室上部: 飛鶴, 草花文, 乘駕鶴童子	雲文, 飛鶴文, 日, 月, 二十八星, 銀河		文物1973-10
楽舞図	山水 (六扇屏風画), 男侍	仙鶴図, 牽牛, 侍女	獅子, 門衛	日, 星宿		考古与文物1997-4
文吏, 侍女, 樹下老人	文吏, 侍女, 竹下老人	樹下老人, 竹下老人	門衛	四神, 日, 月, 星宿		文物1959-8
						固原南郊隋唐墓1996
舞女	花卉	墓主人, 侍女				文物1959-8
	男女侍					西安郊区隋唐墓1966
男女侍, 奏樂場面	花鳥図	侍従, 玄武	朱雀	月, 星宿	石門 (朱雀, 武官, 牡丹文, 双龍)	文物1991-9
						考古1980-6
伎楽人			蓮座			考古学報1982-2 文博1984-1・2
侍者	花卉	几座	朱雀			文博1984-1・2
	雲鶴 (六扇屏風画)		朱雀			考古学報1982-2 文博1984-1・2
花文裝飾	花文裝飾	牡丹・雁・蝶	男侍			文物1995-11
	鳩 (六扇屏風画)					文物1959-8
	雲鶴 (六扇屏風画)					文物1959-8
				日, 月, 二十八星宿		文物1979-12
					石門 (朱雀, 男侍)	文物1977-10

〔賀梓城 1959〕〔王仁波・河修齡・單草 1984〕〔宿白 1982〕〔湯池 1989〕〔王仁波 1989〕〔蘇哲 1992〕〔橋口いずみ 1998〕などによる